
最強の剣士 ～ 紅の都を創る者 ～

勝利 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の剣士 ～紅の都を創る者～

【Nコード】

N4763V

【作者名】

勝利g

【あらすじ】

「最強になるついでに…世界を救ってくれないか？」
一度は夢を絶たれた主人公が異世界へ飛び、世界を救いながら最強を目指す、というお話です。基本、主人公は最強ですが、主人公よりも強い生物？もいます。主人公が最強になって世界を救う様を一緒に見ていただければ光栄です。

プロローグ 1（前書き）

誤字、脱字がありましたらご指摘お願いします。

プロローグ 1

「ぐっ……！！ああああああ！！」

俺は右腕を掴みながら叫び声をあげる。

俺の全身からは汗が噴き出していて黒い道着がびっしょりになってしまっていた。十五歳ながら、同じ中学の友人からは整っていると言われる顔も今は痛みで歪んでいるだろう。今にも乗せられている台から落ちてしまいそうだ。

そんな俺を見かねたのか、俺の側にいた白衣の男、おそらくは医者だろう、そいつが二、三人の看護師に指示を出す。

「鎮静剤早く！ 急いで！」

医者 of 良く通る声で指示を出された看護師たちが慌ただしく動く。俺が今いるのは県有数の大学病院だ。救急車で運ばれてきたのを覚えてる。

その時、ズキン！ と右腕の肘の痛みがますます大きくなった。

「あっ……ぐっ……！！」

今、俺の右腕、肘にあたる部分が大きく腫れ上がっているのだ。肘から発生する痛みは電気信号となって俺の神経系を駆け上り、脳に身体の異常を伝え続けている。

「先生！ 用意できました」

看護師の声が聞こえた。痛みには耐えながらチラリと声のした方向を見ると、看護師が医者に注射器を渡しているところだった。円筒形

の形をしたそれは無針高圧注射器という押し付けるだけで注射できるものだろう。医者は右手に注射器を持って、俺の首筋の血管を探ると銀色に光るそれを押し付ける。

「ちよつとチクリとしますよー」

妙に間延びした声とともにプシュ！ という音がなり、俺は右腕の痛みがだんだん和らいでいくのを感じた。麻酔の効果もあったのだろうか、だんだん瞼が重くなっていく。

俺は眠気に襲われながら、右腕にあてていた左手を自らの額に当てる。

（なんで…こんなことになったんだっけ…？）

俺はついさっき自分の身に起こったことを思い出そうと、己の記憶の海に沈んでいった。

二時間前――。

俺、^{ふじみやうじ}藤宮紅都は祖父の家である剣術道場で、目の前にいる三人が防具をつけ終わるのを待っていた。

実戦剣術を基本とする藤宮流剣術の次期当主である俺は、祖父の言いつけでいつものように素手で防具もつけずに三人を相手にする稽古を行おうとしていた。

目の前にいる三人、村田、上代、服部の後ろにはこの前に行われた全日本剣道大会中学生部門の俺の優勝の証である黄金のトロフィーが輝いていた。

そちらに目をやっている間に、三人は防具をつけ終わったようだ。左手に竹刀を持って立ち上がる。

防具で全身を固めた三人に対し、俺は黒の道着のみだ。

「それじゃ…始めましょうか」

稽古開始の合図を出すと、三人は俺に向かって竹刀を正眼に構え、俺は重心を低くし両腕の力を抜いてだらりとたらす。

別にやる気がないわけではない。三人相手に竹刀も防具もつけさせずに戦わせる祖父に不満は抱くが、多人数が相手の場合、相手が動いてから迎え撃つ、後の先をとるために動きに柔軟性を持たせる必要があるので力を抜いている。

力を抜きながら、めんどくさいな…と考えていると村田と上代がすり足で俺の後ろまで移動していた。

二人が動きを止めると俺は、正面の服部、右後方の村田、左後方の上代と、三人に囲まれる形になった。

いい大人が三人で中学生に打ち掛かろうとするなんて…と口の中で呟いた次の瞬間、

「メエエエン!!!」

村田が動きを見せた。素早い動きで俺に打ち掛かってくる。

氣勢とともに俺に竹刀を打ち下ろしてきた。体重ののったいい斬撃だ。スピードもなかなかで悪くはない。

素人ならば、いや、経験者であっても防ぐのは難しいだろう。

だが、俺は右足を支点にして左足で床をけって反時計回りに90度旋回、半身になることで高速で迫る竹刀を難なく回避。

目の前を竹刀が通り過ぎる。俺は竹刀を奪うために村田の手に左の手刀を喰らわせた。

「ぐっ…!」

バシン! と村田の手に手刀がヒット。村田の口からうめき声が漏れる。もちろん防具の上からのただの手刀では

ダメージが与えられるわけがない。俺が使ったのは古武術の技の一種『鎧通し』の応用技、藤宮流『幻刀』だ。

名前の由来は手刀からのダメージが刀で受けたものと大差なかったため、幻の刀という意味で名づけられたそうだ。

本来なら奥義と呼ばれてもおかしくない技なのだが、祖父の地獄の特訓のおかげである程度は使いこなせるようになっていた。

相当痛いだろうな…と考えながらも力が抜けそうになっている村田の手に容赦なく右手で幻刀を叩き込み左手で村田の手から竹刀を抜き取る。村田が打ち込んでから5秒程で一連の動作を終えると、俺は一度、後方へ飛びすさった。

両足で三メートルほど後ろに着地、奪った竹刀を正眼に構え残りの二人へと向き直った。

ひるんだのだろうか、服部がジリッ…と後ずさりする。俺はそれを見た瞬間、猛然と床を蹴って服部へと小手面を喰らわせる。

パパン…！という音が響き服部が大きくのけぞる。俺は面を打った反動を利用し竹刀を大上段に構え、全身の力を込めて服部の面を打った。

「ハア…！」

ドパン…！！と凄まじい音が俺の鼓膜を震わせる。服部は足をよろめかせるとその場に座り込む。

それを一瞬だけ見ると、前へ進む勢いを利用して180度反転。

「おっと…！」

振り向いた瞬間、眼前に竹刀が迫ってきていた。少し慌てながら右腕に力を込め、

「ふっ！」

俺の正面やや左に向かって打ち込まれた竹刀の右側面に高速の切り払い。上代には俺の右手が動くのを見ることはできなかったのだろう。面越しに見えた上代の顔には驚きの表情が見て取れた。その隙に俺は体を右にひねり、

「セイツ！」

上代のだに強烈な突きを叩き込んだ。捻転力を最大に乗せた俺の突きを受けて上代が吹き飛んでいく。

「グゲエエッ！」

(…なんだろう、この変な声は？ 空耳か？ 空耳だな)

と、上代の断末魔を空耳扱いしておいてから、竹刀を村田へと放っておく。

首をこきり…と左右に曲げ、軽く体操をしてから、体をほぐすためのランニングへと向かった。

ブログ 1（後書き）

初めまして！勝利gです！

ちなみに今年高校受験なので更新が不定期になるかもしれませんが…
この作品を

読んでいただけた方にお礼と謝罪を^^

書き直しました

捻転力を最大に使った？捻転力を最大に乗せた

誤字、脱字は指摘していただければうれしいです！

プロローグ 2（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします！

ブローグ 2

タツタツタツ、と俺は火照った体を冷やすために田舎の道を走り抜けて行く。一月も半ばにさしかかろうか、というところなので、ひんやりとした空気が肌に心地よい。

しばらくアスファルトで舗装された道路を走っていると、

「ん…？」

何かが聞こえた気がして、俺は足を止めた。しばらく耳をそばだててみるが何も聞こえてこない。

空耳か？ と再び走り出そうとするが、

「にゃあ…！」

猫の鳴き声が聞こえ、俺はさっき聞こえた音も猫の声だったのだろうと納得してから鳴き声の聞こえた方向に首を向ける。

すると道路のそばの草むらから俺を見つめてくる黒猫の姿を見つけることができた。

可愛いなーと俺が黒猫をじっ…と見ていると、黒猫がトトト…と近づいてこようとした。

その時、

ブロロロロー！と、軽トラックがかなりのスピードで走って来た。

前方にいる黒猫に気付いていないのだろうか、スピードを全く落とさずに直進して来ている。

「間に合え！」

このままでは黒猫は軽トラックに撥ねられるだろう、俺はそう考え黒猫を助けるために地面を蹴った。

十メートルほどの距離を二秒ほどで駆け抜け、体勢を低くすると黒

猫を捕獲。近くの草むらに放り投げる。だが、黒猫を救った直後、ドゴン！ と、俺の全身を衝撃が襲った。撥ねられたのか、そう自覚した時には俺の体はすでに宙に浮いていたが、すぐに頭を抱えて体を縮こまらせ落ちたときの衝撃に備える。

その一秒後、俺は地面に落ちた。だが、ボグッ…と体の部位の一部が地面にぶつかり、嫌な音を立てる。その音の発生源は、

俺の右肘だった。

事故の翌日

「『右腕肘関節部複雑骨折』…君は剣道をやっているんだっかね？ 酷なことを言うようだが…剣道はもうできないと思った方がいい。日常生活にも支障が出るかもしれないレベルの怪我なんだ。靱帯も損傷してる」

目の前にいる医者、俺の手術を担当した医者で名前は牛田というらしい。牛田が無表情に俺に現実を突きつけて来た。

俺はその言葉を聞いて、思わず立ち上がり、ガタン！ とイスを倒してしまふ。だがそれに構わず、ポツリ…と声を発した。

「…本当なんです…か？ …なんで…なんで…！！」

呟いていくうちに自分でも声がどんどん大きくなっていくのがわかった。俺は頭に血がのぼり、感情を抑えられなくなってしまった。た。

「俺は！ 二度と！！ 剣が握れないってのか！！！」

ドスン！ と俺はギプスのはめた右腕を無理やり動かし壁に叩き付けた。すると、神経がズキズキとした痛みを脳に伝えてきた。その痛みの大きさから、俺にも自分の右腕が使いものにならなくなっていたことがわかる。

そんな俺を牛田は哀れむような目で見てくる。しばしの沈黙のあと、

「そうだ…。君は二度と剣道はできない」

と牛田は言い切った。

俺の頬に何か熱いものが伝って落ちていった。牛田が気をきかせたのか、俺の個室から出て行った。

ボタンとドアの閉まる音がきつかけとなったのか、俺の目から涙が溢れてシーツにいくつものシミを作った。

プロローグ 2（後書き）

ちょっと悲しい感じです…

文章下手だなー俺（泣）

1 転送？

俺、藤宮 紅都はなじみの弁当屋『あじのひらき』に立ち寄っていた。

少し古いが家庭的な感じもする場所、その小さな弁当屋で日々の夕食を買うのが、この前に高校二年となった俺の毎日の日課となっている。弁当を買うためにここへ立ち寄るのが午後六時半ぐらいなので、『あじのひらき』の店主であるおじさんとその奥さんが作り立てを用意して待っていてくれる。

ちなみに、俺はこの店であじの開きを見たことがないのだ。なぜ店名になっているのだろうという疑問がここへ立ち寄る度にいつも頭をよぎる。

「はいよ！ 藤宮弁当ね、500円だよ！」

そんなことを考えている内におじさんが弁当をビニール袋に入れて俺に差し出してきていた。

差し出された弁当の名前は、『藤宮弁当』である。藤宮弁当とは俺が事故の後に一人暮らしを始め、ここで弁当を買うようになって三ヶ月ほどたったある日、おじさんに、好きなおかずやアレルギーなどを詳しく聞かれ、戸惑いながらもその全てに返答すると、その翌日から『日替わり藤宮弁当』がメニューに並び売りに出された。

そして、それから二年が経った今でも、俺は藤宮弁当を食べ続けているのだ。

俺はいつも通り、制服である黒のスラックスに手をつ込んで小銭を取り出し、代金を手渡す。

「いつもどーも」

「まいどっ！」

礼を言っ
てビニ
ール袋
を受け
取る。

俺はおじさんの元気な声を背に受けながら、見慣れた大通りを歩き始めた。

(腹減ったなあ…、さっさと家に帰って飯食おう)

そう思い、歩くスピードを上げる。その時、

「おっと！」

「うわっ！」

曲がり角を曲がろうとした時、俺は小学生くらいの子供とぶつかった。

子供はぶつかつたはずみで尻餅を突いてしまう。

「大丈夫か？」

声をかけて助け起こそうとした時、子供の背にあるものを見つけて俺の動きが止まる。

あるもの、それは、竹刀と防具を入れた袋だった。

俺の脳裏に一つの場面が映し出される。

「剣を握れないお前なんてクズだ……！」

祖父の口から俺に向けて、冷たい言葉が投げかけられた。周囲にいる門下生たちもゴミを見るような視線を俺に向けてくる。

周りの人間が向けてくる……視線……視線……視線……視線……視

線視線視線視線視線視線視線視線視線視線視線

視線

「お兄さん？ 大丈夫？」

小学生が心配そうに俺に声をかけてくる。その声でハッと現実へと意識が切り替わった。

（まだトラウマが残ってんのかよ…）

心の中で呟く。俺が一人暮らしをすることになった原因。いや、事故のせいでやめざるを得なかった剣道。

剣道だけが取り柄だった俺が、他の奴らからひどいイジメを受けるのにそうはかからなかった。

そのせいで剣道関係のものをみると、軽いめまいのようなものに襲われてしまうのだ。

俺が、ふう…とため息をつく。

そんな俺を小学生はじつ…と見つめて大きく頷いた。

「それで、突然なんだけど…、お兄さんって『藤宮 紅都』さんだよね？」

「？ そうだが、なんで俺の名前を…？」

見ず知らずの子供にいきなり自分の名前を言われ、俺は小学生に疑惑の視線を向ける。だが小学生は満面の笑みを浮かべるととんでもないことを俺に言ってきた。

「良かった〜！ じゃ、ちょっと神様に会ってきてください！」

「はあ！？」

「えいつ！」

子供が俺に何かボールのようなものを放ってくる。そのボールに俺

が触れた瞬間、

パアアアアア！と俺の周囲が輝いて…

俺は意識を失った。

2 神様とご対面？（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

2 神様とご対面？

まぶた越しに光を感じ、俺は目を開いた。

俺が横になっているのは青々とした野原、そして俺の視線の先には青空が視界いっぱい広がっていた。

「目が覚めたら、そこは見知らぬ天井だった。てわけじゃないよな…、空だし」

俺はボソツとつぶやいてから起き上がり、大きく伸びをして体をほぐす。そして自分の体に異常がないか確認しようとして、あることに気づいた。

「なんだこれ！？」

俺の服装は腰に一枚、布が巻かれているのみでほとんど全裸に近い状態だった。しかも胸の中心には丸い宝石のようなものがはまっている。

宝石？の大きさは直径10センチほどで、不思議な赤色の光を放っていた。

俺は五秒ほどその宝石を観察してから、とりあえず人差し指で突っついてみる。

「痛っ…！」

球体の表面に触れた途端に、俺の指先に電流が流れたかのような痛みが走った。

いってー、と手をぶんぶん振って痛みを和らげていると、

「それには触らないほうがいい」

中性的な声が俺の背中に投げかけられた。

「!？」

グルン！ と勢い良く振り向く。するとそこには、昔のギリシャ人が着ていたような白い衣をまとった壮年の男性がいた。こちらを見ながら、口には微かな笑みを浮かべている。

身長は175センチの俺より少し低い、170センチというところか。

なんだこいつ…と眉をひそめながら男性に質問してみる。

「あー、あなたは…何ですか？」

あ…間違えた「何」じゃなくて「誰」と聞こうとしたのに！ と心の中で後悔した次の瞬間、

「クツ…ハハハハハッ！！ 面白いな君は！ 『誰』ではなく『何』と来たか…！」

いきなり爆笑された。俺が自分の中でも後悔した後だったため、少々癪に障るものもある。はあ…とため息をついて、再度、男性に質問する。

「わかった、訂正する。アンタは誰だ？ そしてここはどこなんだ？」

俺は笑われたことに少し腹を立て、敬語を使わなくなった。だが、それを気にする様子もなく男性はひとしきり笑った後、呼吸を荒く

しながら俺の質問に答えた。

「ここは天界…、神、つまり私が存在する場所だ」

「何を…言っている？」

「分からないか？ 私を詳しく説明するのであれば、この君の住んでいる世界『アース』を創り、管理している者、神だ」

「……紙？」

「神だよ、少年。名は『イエス』でも『ゼウス』でも好きなように呼ぶといい」

男性、いや、イエスは心底どうでも良さそうに自分の名前を告げた。俺はいぶかしげにイエスを見る。

「それで…？ イエス…と呼ばせてもらうが、イエスさん、なんで俺はここにいる？」

俺の質問を聞いたイエスは何度かぱちぱちと瞬きをした後、ああ！と両手を打ち合わせた。パン！ という音が響く。

「大事なことを忘れるところだった…！ 君は藤宮紅都くんだな？」
「…そうだが、なんで俺のことを知ってる！？ なんで俺はここに
いる？ 質問に答えてもらいたいな…！！」

質問に答えようとしないうちに俺は、二年ぶりに殺気を解放、イエスにぶつけてみた。

ゾンッ！ と重苦しい殺気が野原を覆っていく。

だが、イエスは殺気を軽く受け流し、俺の胸の宝石に触れた。

バチバチバチッ！！ イエスの指と宝石が触れ合った瞬間、宝石が激しくスパークする。

「おっと…なかなかの魂の強さだ。私の目に狂いはなかったな」

手を引っ込めながらイエスが独白する。

「…どういうことだ？」

「うむ？ 魂の宝玉の大きさはその人間の魂によって決まるのだよ。常人なら1センチあればよいほうなのだが」

「…意味がわからない、魂？」

イエスは俺の言葉を受け、俺の胸の宝石を指差す。

「それが魂だ。君のな…。そしてそれが君を呼んだ理由でもある」

「理由…？」

「そうだ、君をここへ呼んだを説明しよう」

イエスは俺の周りをぐるぐると回り始める。俺はその動きを首だけを動かして追っていく。

「世界はいくつも存在している。まずはそれを理解してもらおう。君が生き、私が管理する世界『アース』もその一つだ。それで、つい最近、この世界と比較的近い次元に存在する世界『アーバニア』の神、まあ二人いるのだが、そのうちの一人から頼まれたのだ。『このままではアーバニアは滅びてしまう！ 助けてくれ！』とな」

イエスは一度口を閉じ空を見上げた。

「それで…なんだ？」

俺は話の先が気になってしょうがなかったのでイエスに声をかけて急かした。

「私たち神は直接、世界に干渉することが出来ないのだ。そこで君

の出番だ。アースで一番適正の高い人間を探してみ、適任を探した。アーバニアがこちらで言う中世のようなもので、剣を使える、ということもポイントだったがな。アーバニアを救うには世界最強くらいにはならないといけないらしいので、最強を夢見たことがあり、その素質がある、その線からも探してみた」

「それで？」

「藤宮くん……」

「なんだよ……？」

「最強になるついでに……世界を救ってくれないか？」

「……………はあ？」

突然のアホ発言に俺はフリーズしてしまった。

「？ 世界を救ってくれという単純な話なのだが」

「……………はあ？」

「アーバニアは剣と魔法の栄えた世界なのだ。ある程度、思考に柔軟性がなければならぬ、そこでアースで一番適正のある人間を探したら君が出てきた」

「……………はあ？」

「頼みを聞いてもらえないか？ もちろんただでは言わない。君の願いを何でも一つ叶えよう。……ふむ、肘を怪我しているようだな？なら願いの他にその肘を治して「本当か！？」」

しまった……！と俺は思っても、もう時はすでに遅しだ。今までずっと変な顔でジト目でイエスの話を聞いていたのに「肘を治す」という言葉に反応してしまった。

そんな俺の態度をチャンスと見たのかイエスが畳み掛けてくる。

「ああ、仮にも神だからな、人間一人の怪我を治すくらいは出来る。君はずっと苦しんでいたのではないか？ 事故により肘を壊し剣道を続けられなくなったことを」

どうやってかは知らないが、イエスは俺の心情を的確に言い当ててくる。

「……………！」

俺は唇をかみ締めた。

（そんなうまい話があるわけがない！ 命を失うリスクだってあるだろうし…）

逡巡する俺を見て、イエスは笑みを浮かべる。

「少し、君の心と記憶を覗かせてもらったよ…。君は最強を目指していたが、怪我でその夢は絶たれた。…もう一度、己を高めたいとは思わないのか？ それで納得できないのなら…君にはブランクがある。それを埋めるために世界を救うというのではどうだろう。本当の実戦経験などそうそう得られるものではない。アーバニア最強の剣士になれば、平和なアースの最強など、簡単に超えられるだろう」

イエスの言葉が、俺の心に絡み付いてくる。イエスは俺に手を差し伸べて、

「さあ、世界を救え！ それで君は最強になれる！」

無茶言ってるよな…と俺は笑いながら呟いて、イエスの手を握った。

（もういいや、多少のリスクなんて関係ねえ！ 一度は諦めかけた夢を、また掴むことの出来るチャンスなんだ！ 断るなんてありえないだろ…！）

「わかった、お前が俺の肘を治してくれるなら…その世界、俺が救ってやるっ…！！！」

2 神様とご対面？（後書き）

こんにちはー！

なんか主人公がアホっぽいかも？と思ってもそこはスルーしておいてください><

今は自分の力不足を痛感しているところなのですww

あ、あとエピソードは最後の方だと教えていただいたので

エピソード？プロログ

となってます^^

キヤー恥っずかしー！！！！

ではでは、また今度ノシ

3 異世界に出発！（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

3 異世界に出発！

「わかった、お前が俺の肘を治してくれるなら…その世界、俺が救ってやるっ！！！！」

イエスの右手を握りながら、俺はまっすぐに奴の目を見据えて宣言してやった。

もちろん、肘が治してもらえるから、という理由だけで頷いたわけではない。

最強になって世界を救う、その言葉に惹かれたのだ。

小さいころから最強に憧れていた俺だが、全中制覇などのスポーツとしての剣道の最強では我慢が出来なかった。

真剣を持ち、祖父と斬り結んだこともあるが、あの時のスリルは今でも忘れられない。

祖父との五時間にも及ぶ死闘の末、最終的に両者の全力を込めた斬撃がぶつかり合い、刀が耐え切れずに折れてしまったのでお開きとなってしまったが。

世界最強になる、地球では中世にあたる世界でのそれは、確実に俺を成長させる戦いのはずだ。

そこで得られる経験値は、俺の生きている世界である『アース』とは比べ物にはならないだろう。今までのブランクなど補って余りある。

世界を救ったあとには願いを一つ叶えてくれるというのも魅力的だった。何を願うかは、まだ決めてはいないが。

俺がそんなことを考えていると、イエスは辺りを見回しながら俺に声をかけてきた。

「さて、それでは藤宮くん。アーバニアに向かう前にいくつか君に伝えておくべきこともある、場所を変えようか」

「場所を変える？ それはいいんだけど、どこに行くんだ？」

俺の視界には見渡す限りの大空と、その下に広がる草原しかない。俺は、至極まっとうな疑問をイエスにぶつけてみた。

「どこへ行く…だと？ ああ…文字通り『場所』を変えるのだよ」

イエスはそう言うてから、俺の目の前に右手を差し出すと、パチン！ と指を鳴らす。

すると、

「なっ…！？」

世界が一瞬だけ光に包まれ、俺がまぶしさに目を瞑ってから再び開くと、そこにはさっきまでの景色は消え失せ、白亜の宮殿が広がっていた。

俺は驚愕の声を上げ、そんな俺を見てイエスは面白そうに笑っていた。

「どうかな？ 昔、私のために建てられた神殿を元に見てみたのが…」

自慢げに言うイエスに、うるさい…と、手をひらひらと振る。

「それで？ 伝えたいことってなんだよ？」

「むう…、この神殿になんの感慨も湧かぬか…。まあいい、これをやろう」

パチン！　とイエスがもう一度指を鳴らすと虚空から光とともに動きやすそうな、ゆったりとした長袖のシャツと袴に似た感じのズボンが現れた、色は両方とも漆黒。
イエスはそれを俺に投げ渡してくる。

「おっと、下着と靴も必要だったな？」

黒い靴とトランクスのようなものも放ってきた。
俺はそれをキャッチするとイエスをじっと見つめる。

「なんだよ…これ？」

「その格好のまま異世界に放り出すわけにも行かないだろう？　早く着たまえ」

俺は、ありがたく衣服を着させてもらうことにした。腰布を外してから下着、ズボン、シャツ、靴の順に身に纏っていく。

俺が服を着終わると、イエスの手には一振りの刀が握られていた。

「武器はこれでいいか？」

イエスは刀を俺に差し出してくる。黒漆塗りの鞘に包まれたそれを受け取り、俺は刀を抜き放ち刀身を外気にさらす。
シアラアアアン！　と、澄んだ音が宮殿に響き渡った。

「……すげえ…！」

刀の刀身にはうっすらと波紋が浮かび、刀身の優美さは俺が今まで

見た中でも最高のものだった。それでいて肉厚の刃が、それが観賞用ではないことを物語っている。

「気に入ったか？ 昔、趣味で作ったものだが…これもいるだろう？」

俺は渡された黒皮のベルトを腰につけ、刀をそこに吊るす。

「餞別だ、…神からの贈り物だぞ？ それと最後に…！」

イエスが俺の右肘を掴んだ。痛みはないが妙な違和感を感じる。

「おい何をす」「治れ」「」

イエスの言葉とともにイエスの手から光が生まれ、その光が俺の体を包み込んだ。

「これでいいだろう！ …しまった」

「『…しまった』って何！？」

俺は狼狽してイエスに詰め寄った。うむ…とイエスは頷く。

「肘の怪我は治ったはずだが…、実は君の体をアーバニアの光人という種族のものに作り変えたのだが…、私の力の一部も君に渡してしまったのだ」

「というと？」

「向こうの世界ではスキルというものがあるのだが…、君の体は作り変えた。『わが身を証明しろ』と唱えてみるがいい」

うん？ わかった、と俺は頷き。

「『わが身を証明しろ』…これでい——！？」

俺の言葉は光とともに目の前に現れた一枚のカードによって中断される。

大きさは、厚さ2ミリ、横幅5センチ、縦幅10センチといったところだろうか。

発光が止まると、板は重力に従い落下し始める。

「！ ととつ！」

慌ててカードをキャッチする。手に取ってからカードを眺めてみると、そこにはこう書かれていた。

フジミヤ コウト

所有スキル 『神速神武』

称号 無し

「なあ…なにこれ？」

「…長くなるがかまわないか？」

一時間後

イエスの話をまとめるとこのような内容だった。

アーバニアにすむ生物は、光人、獣人、神人、魔人の四種族と幻獣

と呼ばれる生き物。

俺は、光人という普通の人間のような種族に体が造り変わったが、イエスが間違えて自分の力をほんの少しだけ俺に譲渡してしまった。カード、スキルカードというらしいが、それに映し出されていたスキル名『神速神武』はそのせいで生まれた。

スキルとはスキル名の発声によって発動するアクティブスキルと常時発動状態のパッシブスキルがあるのだが、『神速神武』は強力すぎるため、パッシブスキルでありながら発声によって効果が発動するという激レアなものだということを教えられた。

「まあ、大体わかった…、俺に有害じゃないんらいさ」

それより、と俺は右腕に力を込める。少しずつ力を入れていき、肘に痛みがないか確認する。

「よしっ！」

腕にどれだけ力を入れても肘に痛みが走ることはなかった。

刀を抜き放って、俺は二、三度、素振りを試みた。

右上段から左下段への袈裟切り、刀を跳ね上げ左上段から右下段への逆袈裟切り、そこから水平に横一文字の二連切りにつなげる。

ヒュヒュヒュヒュン！俺の両腕が流れるように動いていく。

刀を大上段に振りかぶって、

「ハッ！」

ブォン！！空気が両断され風切り音が宮殿に響く。俺は事故以来、久しぶりに刀が体の一部になったかのような感覚を感じた。

「イエス…ありがとな…」

「礼はいい…、それより、もうアーバニアに送るぞ？ 安心しろ、転移先にはお前の肩慣らしに丁度いい相手がいる場所を選んでおい
た」

イエスが空中に光で何か図のようなものを描き始める。その図は徐々に大きくなり、俺の周囲を覆い始める。

「それでは…世界を救ってきたまえ！」

俺の周囲を覆う図が高速で回転し始めた。

パアアアアアアアア！！

と、光が輝きを増し、俺が目を開けていられなくなった。

「ぬ…」

車酔いのような軽い酩酊感を覚え、うめき声を上げる。足元が存在しなくなり、俺の体は宙に浮いているような状態になっている。天と地が何度もさかさまになっているようだ。

それが、どのくらい続いただろうか、それは唐突に終わりを告げた。

どさっ…、

「ぐおっ…」

無重力のような感覚が終わりを告げ、俺は背中から落下した。

いてて…と呟きながら起き上がってみると、俺がいたのは洞窟のよ
うなものの中だった。

暗いがほのかに明かりが見える。

「どこだ…？ 洞窟みたいだが…」

辺りに視線をめぐらせるが俺の背中側と両側には壁があるだけ、

（前に進むしかないさそうだな…）

縦横２メートルほどの洞窟に沿って歩いていると、前のほうに大きな空間があるのか、風が俺の頬をなでた。じっと見ていると炎の明かりも俺の目に映りこむ。

俺は少し、歩くスピードを上げていった。

かんかん、足音が洞窟の壁に反響して俺の鼓膜を震わせる。

「ここか……!？」

狭い洞窟の壁から抜け出す。広い空間に出たな、そう思った次の瞬間、

「グルウウウオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

耳をつんざくような咆哮が辺り一帯に響き渡った。

3 異世界に出発！（後書き）

咆哮の主は一体…！？

4 俺 VS ドラゴン!? (前書き)

更新がかなり遅れてしまいましたすいません><

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

4 俺 VS ドラゴン!?

「グルウウウウオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

耳を劈くような咆哮が響いている。

その咆哮の主は、まさに「山」という表現がぴったりの巨体であった。

三十メートルほどの高さの体は黒い鱗で覆われ、頭部には赤く光る眼、口元からは炎がちろちろと漏れ出している。これは、

「……………ドラゴン?」

思わず、後ずさりしてしまう。幸いなのは俺に背を向けていることだろうか。

ゴクリ…と唾を飲み込む。俺の脳裏にイエスの言葉が浮かぶ・

——君の肩慣らしに丁度いい相手がいる場所を——。

「ぜってえ殺すツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

本当に叫んだら目の前のドラゴンに気づかれてしまうので、心の中だけでそう叫んでおく。

ギリッ…と奥歯を強くかみ締めていると、俺の視界の端で動くものがある。

「あん…?」

そちらに目をやると、10人ほどの人間が剣や槍、杖のようなものを持ってドラゴンに攻撃を仕掛けている。だが、半分くらいは怪我をしてしまっているようだ。

その中でも、唯一戦意を失っていないさそうな姿があった。

黒い長髪を持つ、おそらくは女であろうそいつは、ドラゴンの吐く炎を前転でよけ切りかかろうとする。だがドラゴンは右腕を振り回し彼女を薙ぎ払った。

「おいおい……」

彼女の身に着けていたレザーアーマーが裂け、体が壁に叩きつけられる。

周りにいた杖を持っている奴らが、杖を持ち上げ何事かを口にする。すると彼女の周りに合計で三枚の半透明な盾のようなものが形成される。

盾に守られる形となった彼女にとどめを刺そうと、ドラゴンが炎を吐いた。

ゴオオオッ！と猛る炎は盾にぶつかりその勢いが弱まる。

「うおおおおー……！！！！」

ドラゴンが炎を吐いている隙を狙ったのか、全身をフルプレートアーマーで覆った男が大剣を大きく振りかぶって突進。大剣をドラゴンの足に叩きつけようとする。

「セアッ……！！」

鎧男は走る勢いそのままに大剣をドラゴンの右足に叩きつけた。しかし、ガイン！と刃はドラゴンの黒鱗に当たった瞬間弾かれる。だが、鎧男の攻撃を受けてドラゴンは炎を吐くのを中断。丸太のよ

うな左腕を鎧男にぶつける。男はにぎやかな音を立てながら、その場に崩れ落ちた。

「ぼーっと、それを見ていた俺は、はっ…！と我に返った。願わくばあの連中がドラゴンを倒してくれるかもしれない、と思っていたがどうやらそれは無理そうだ。」

「やつぱ…、俺が助けるしかないか…？」

ここであの人たちを助ければ、知り合いのいないこの世界で生きていくのが楽になるだろう。

だが、十人がかりで敵わないドラゴン相手にどう戦うか、俺はそこで一つのことを思い当てる。

「イエスの言ってたあのスキル…。使ってみるか…？人間相手に試すのもどうかと思うし、効果を確かめる相手としては『丁度いいか…』」

深呼吸してから気持ちを落ち着かせ、刀を抜き放って右腕だけで構える。

「よしっ…！『神速神武』…！」

俺がスキル名を発声した途端、一瞬だけ俺の体を光が包んだ。

「おお…！？」

右腕に感じていた刀の重みがほとんどゼロになっている。俺の筋力が強化されたのだろうか。

一度、刀を鞘に納めてからドラゴンと戦っている連中に目を向けると、

「うん？ あの女の子…まだ戦う気なのか？」

黒髪の女の子が仲間の制止を振り切って、また剣を持とうとしている。

その間にもドラゴンが彼女の仲間を叩き潰していく。

「やっべえな…！」

彼女たちの前まで40メートルほど、俺の脚なら6秒足らずでドラゴンと彼女たちの間に入り込めるだろう。足に力を込めて地面をける。

次の瞬間、

「じふっ！？」

俺の体は黒髪の女の子のそばの壁に激突、肺から空気が吐き出される。

「………は？」「………」

黒髪の女の子と彼女のそばにいた、まだ意識の残っている人たちの声が見事にハモる。

うーん、とうめき声を上げつつ、状況を把握しようと頭を動かす。

「…ッ！一体何が…？ あっ！ 頭からぶつかったよーな気がする…大丈夫か？」

俺は頭を押さえるが、そこで体の異変に気づく。

（ぶつかつた頭から血が流れてない…？ てか、一瞬でここまで移動するって…）

頭を振って意識を切り替えてドラゴンの方に視線を移しながら、まだ、あんぐりと口を開けている人たちに声をかけた。

「俺がこいつをやるから、弱い奴は少し下がってくれないか？」

「は？ あんた何言って——」

黒髪の女の子が何かを言ってくるがそれを気にしている暇はない。ドラゴンに向き直り、刀を抜いて構える。今度は、やり過ぎないように一割ほどの力で地面を蹴ってドラゴンの体の真ん前に体を躍らせる。

動く俺でさえ鍛えた動体視力でやっと自分の動きを把握できるのだから、他の人間にはまるで転移したように見えるだろう。

後ろから「ちょっ！ あんた…！？」という声が聞こえたが、そのままスルー。

ドラゴンの前に出てからジャンプ。10メートルほどの高さに到達すると刀を横一文字に薙ぐ。

「ラアッ！！」

スパッ！ と刀身が黒鱗を切り裂いてドラゴンの腹に滑り込んでいく。豆腐を包丁で切ったかのような感覚に少し驚愕するが、落下中にも何度か切りつけておく。

「グオオオオオオオ！！！！」

ドラゴンが腹部から血を流しながら、怒りの声を上げて炎を俺に吐いてきた。先ほど吐いていた炎の息とは違い、炎の塊であったそれ

を、俺は『斬り裂いた』。

斬ッ！！

と、両断された炎は俺の背後にぶつかって弾け、二輪の炎の花を咲かせる。

俺はまた地面を蹴って今度はドラゴンの右足のそばに『現れる』。

右手一本で刀を持って、後ろに大きく振りかぶった。

「セイツ！」

多少、化け物じみた力に任せ、強引にドラゴンの足を切断した。

ドシュッ……！ という鈍い音を立てながらドラゴンの足が斬り飛ばされ、その巨体がよろめく。ぼたぼた……と血が地面に滴り落ち、吸い込まれていく。

「ガアアアアア……！」

「アヒルかお前は……！」

先ほどまではあんなにも強そうに見えた巨体が、今の俺にとってはただのかいじつのように見える。

俺はドラゴンの怒りと痛みの混じった叫びをアヒル扱いしておいてから、一度後ろに跳び退った。

「おつと……！」

後ろに下がるだけのつもりが、勢いがつきすぎて洞窟の壁にめり込みそうになってしまった。まあいいやと壁に足で着地してから、全力でそこを蹴る。

ドゴン！ という音とともに壁が陥没、俺は弾丸のようにドラゴンの首元へと飛び出した。

スキル『神速神武』の効果かどうかはわからないが、反射神経がよ

うやくこの体のトップスピードにも反応できるようになってきていた。

俺は体がドラゴンの首に到達するのに合わせて刀を振る。

ズバン！！ と俺が刀を振るのに合わせて衝撃波が発生し、ドラゴンの首の幅1メートルほどが消し飛んだ。

俺が地面に着地すると同時に、ドラゴンの首がドサリと地面に落ちた。

ヒュヒュン！と 刀を振って血払いをする。

その際にもボボッ！ と衝撃波が発生、ドラゴンの足に傷を作った。刀を振るたびに辺りに被害を撒き散らす自らの力に、俺はため息をついた。

「……………これ、どうやって止めんの？」

呟いた瞬間、体から光が滲み出し、薄れていくにつれて俺の体からも力が抜けていくのがわかった。

「ぬ…？」

刀が妙に重く感じる。変な感じー、と思いながら、チン！ と俺は刀を鞘に収めた。

「……………あんま使うのやめようコレ…、感覚鈍るわ…」

んんー！ と伸びをしていると背中に視線を感じたので振り向いてみる。

「あんた…何者なの…？」

先ほどドラゴンに跳ね飛ばされてた黒髪の女の子が俺に警戒するよ

うな視線を向けてきていた。手にはショートソードが握られている。俺は敵意がないこと示すために両手を挙げた。

「何者って言われても困るんだけど…」

（どう説明したものか…、異世界人って言って信じるか、いや俺なら信じないから信じないと思っていたほうが無難だろう。記憶喪失ってことにしておくか？）

「えっと…、とりあえず二つほど教えてほしいんだけど良い？」

俺が質問をすると、黒髪の女の子は鎧男の方に近づいていった。

「…シグント、どうする？」

さっきドラゴンに跳ね飛ばされていた鎧男はやっとという感じで立ちながらヘルムをはずした。その下から現れた顔は渋いオッサンだった。おば様たちに人気が出るような顔である。

シグントと呼ばれた鎧男は、俺に体を向けてから頭を下げてきた。

「シグント！？」

黒髪の女の子が目を大きく開く。しかしシグントは片手を挙げることでそれを制した。

「まずは礼を言わせていただきます。ありがとうございます、君のおかげで助かりました。しかし、それとこれとは別。君が突然現れた不審人物であることに変わりはありません」

丁寧な口調でシグントが話しかけてくる。顔も渋いけど声まで渋い

な。

シグントの言葉に他のメンバーが俺を囲み始める。俺はそいつらに気を配りながらシグントに話しかけた。

「はじめまして、シグントさん？ 俺は藤宮 紅都って言います。
あなたが不審人物って言うのもわからなくはないですよ」

少し、自虐的な笑みを浮かべながら俺は続けた。

「『わが身を証明しろ』、これでよければどうぞ？」

俺はスキルカードを取り出してシグントに差し出した。スキルや称号の部分は所有者がさらに許可しなくては他人には見られないらしいので、シグントに見せるのは名前の部分だけだ。シグントは俺からスキルカードを受け取るとちらりとそちらに目を向けた。

「君が名前については嘘をついていないのはわかりました。質問を聞きましょう」

シグントはそういつてスキルカードを俺に投げ渡してくる。

「ここってどこなんですかね？ それと、あなたたちは何でドラゴンと戦っていたんですか？」

俺の質問に、シグントやほかのメンバーが目を丸くする。それにかまわず俺はシグントを見据え、質問の返答を待った。

「どこですか？ …ここはマドミス王国のガラム洞窟。私たちは最近ここに住み着いたブラックドラゴンを討伐するために結成されたパーティー『黒竜討伐隊』です。それで君のことも教えてもら

いたいたのですが…」

黒竜討伐隊って…まんまじゃん！ 心の中で叫んでから俺は記憶喪失という設定にすることを決め、適当に話を合わせるために口をひらいた。

「マドミス王国…？ すみません、なぜか自分の名前しか思い出せないのです…」

俺が悲しそうな顔を見ると、シグントが、そうだったのか…！ という顔でうんうん頷いていた。騙されやすいなこいつ。

「すまない、悪いことを聞きましたね…。その詫びについてはなんですが、先ほどの礼もかねて、マドミスの首都へと送りましょうか？」

シグントの申し出に俺がすぐさま頷こうとすると、黒髪の女の子がシグントに詰め寄る。

「シグント！ 怪しすぎるわ！ こんな男をパーティーに入れるなんて…、私は断固反対よ！」

そんな黒髪の女の子にシグントが参ったな…という顔をして頭をかく。

「しかしですね…リア様、我々も疲弊しております…。先ほどのこの者の技量は見たでしょう。我々があそこまで苦戦したブラックドラゴンを簡単に倒したのです。戦力の拡大にはもってこいでしょう？」

おーい聞こえてるよーと言いたくなつたが、ここに置き去りにされるのはとても困る。

戦力扱いされるのはいい気分ではないが、何とか、リアと呼ばれた黒髪の女の子を説得しなくては。

シグントの口ぶりを聞く限り、リアはなかなか高い地位にいるようだ。様付けで呼ばれているからな。俺は恐る恐るリアに声をかける。

「あー、リア…様？」

「何よっ！！」

ヤバイ…なんか知らんが相当嫌われてるみたいだ。さっき「弱い奴」で言ったのが悪かったのかな。うーん、こんな強気なお嬢様にはこんなのが効くんじやないだろうか。

俺はリアのそばにまで歩み寄ると跪き、リアの手の甲にキスをした。

「なっ！」

「リア様…、貴女が私を嫌っていることは良く解りました。ですが私は…貴女の側にいたいと…心から願っております。どうか短い間だけでも貴女の盾として…」

今まで読んだ本の中から台詞を抜粋し組み立てた。それだけを言つて顔を上げ、俺はリアの手を取つたままその綺麗な瞳を見つめ続けた。

我ながらクサイこと言つたなーと心の中で嘆息する。

だが、俺の視線の先で、リアの顔がボンッ！と赤く染まっていく。

「え…とえとえとえと！……………わかつたわ…！王都までなら一緒に来てもいいわよ……」

良かったー！ うれしさのあまり、思わず歓声を上げそうになる俺だが、リアが、でも！ と続けたので動きを止める。

「…でも？」

「あんたのことが気になってるわけじゃないんだからねっ！…！」

リアの宣言に、思わず俺は固まってしまう。

(…わお、まさかのツンデレですかリア様…！)

4 俺 VS ドラゴン!? (後書き)

塾やら何やらで更新遅れました><

その分今回はいつもより長いのでそれで許してください!

明日明後日も事情があって更新できません…

それではまた今度^^

5 リア、はじめてのどらんたいじ♪（前書き）

更新が遅くなりました…

えっと、今回は三人称でリアがメインです^^

5 リア、はじめてのどらごんたいじ♪

マドミス王国、ルーギス家

「お父様！ どういうことよ！」

広く、そして豪華なダイニングにリアの怒気をはらんだ美声が響く。長い艶やかな黒髪と黒曜石のような瞳を持った少女、リアに詰め寄られているのは随分と派手な飾りつけのされた服を着た、リアにお父様と呼ばれた男性、そしてルーギス家当主でもあるナナド・ルーギスだ。

声に怒りをにじませるリアにナナドは困ったような顔をする。

「まあ、落ち着きなさい……」

精一杯なためようとするナナドだが、

「ふざけないで！　なんで私がお見合いなんか……！　しかもあの豚と……！」

「豚！？　リア、なんてことを言うんだ！」

ナナドが慌てる。リアが豚呼ばわりした相手は、マドミス王国の第三王子だ。それと同時にリアの憤慨の原因、見合いの相手でもある。王族を豚呼ばわりをすれば不敬罪で絞首刑になりかねない。

しかし、リアも心中穏やかではなかった。第三王子、イタリ・キナルカ・マドミスは女にだらしないことで有名な王子だ。国民の血税を無駄に浪費して己の脂肪ばかりを蓄える、まさに『豚』のような男なのだ。

今回の見合いもリアを側室として迎えたいということだろう、リアとしては、まだまだ嫁に行く気はないし、行くとしてもイタリのよ
うな豚はお断りだ。
さらに、

「そもそもなんで日取りが明日なの！？ 申し込まれたのは今日で
しょう！？」

「頼む！ 会っただけで良いのだ、リア」

「ふざけないで！ 私が会っただけのつもりでも周りはそれを勘違い
してどんどん話を進めていくでしょ！ そんなの嫌よ！ 絶対嫌よ
！ 死んでも嫌よ！！ ……むしろあの豚が死ね」

怒涛の勢いでナナドに言葉をぶつけると、リアはきびすを返してダ
イニングから出て行こうとする。

「リア！ どこに行くのだ！」

ナナドが出て行こうとする娘の背中に声をかけると、リアは一瞬だ
け動きをとめて振り返った。

それにナナドは少しだけ安堵するも、

「冒険者ギルドでクエストを受けてくるわ！」

という娘の宣言でピシリと固まる。

リアはそんな父親を一瞥してからきびすをかえし、ずんずんと廊下
を進んでいく。

「リア様」

「ひあつ！？」

リアが自室へと向かう途中、曲がり角を曲がった瞬間に声が掛けられた。

突然目の前に現れたシグントにリアが驚き、間抜けな声を上げる。しかし、自分に声を掛けてきたのがシグントだと気づいたリアは眉をひそめた。

「シグント、主を驚かすなんていい度胸ね…!？」

「申し訳ございません、リア様。…しかし旦那様を困らせるのもほどほどに致しませんと」

リアの怒りを孕んだ声を軽く受け流し、横を歩きながら進言するシグント。

「わかってるわ、そんなことより…これから一ヶ月くらいは家から離れてないといけないんだけど。…良いクエストないかしら？」

リアの言葉にシグントは一瞬考え込んだあと、

「そうですね…、最近はリア様の腕も上がってきているみたいですし」

にやりと口角を吊り上げ笑うシグント。そして再び口を開き、あるクエストの名を言った。

「『黒竜討伐』…などはいかがですか？」

十日後、マドミス王国、ガラム洞窟

「……さ、リア……ま、リア様！」
「うひゃい!？」

リアは謎言語を口にしながら飛び起きる。目を開けると、頭上にはシグントのあきれたような顔があった。

「ごめん…、眠っちゃった」
「それもいいですが…休憩はそろそろ終わりです。みんな自分の武器や防具の点検をしていますよ」

リアが周囲に視線を向けると、ギルドで『黒竜討伐』の依頼を受けた冒険者達が各々の武器の点検やポーションを用意していたりなどと忙しそうだった。

パーティメンバーはシグントとリアを合わせて十人。

力に優れた獣人が二人。狼の獣人らしく白銀の毛に覆われた耳と尻尾が生えている。

スキル『獣化』で体を強化、ドラゴンに大きなダメージを与えていく役割だ。

そして、魔力に秀でた魔人が三人。今回は強力無比な障壁を持つブラッドドラゴンが相手なので、彼らは仲間への支援魔法がメインになっている。

最後にリアやシグントを含む光人が五人。重戦士のシグントを除い

た四人は素早く動いてブラックドラゴンを攪乱する役目である。

まあ、リアはシグント以外の誰の名前も覚えてはいないが。どうせブラックドラゴンを倒せば二度と関わることもないだろう。

その役割分担をリアに聞かせた張本人、横のシグントに視線をやる
と、順々にフルプレートアーマーを身に着けていた。

（私も用意しないと…）

傍らにおいてあった自分の荷物からレザーアーマーを取り出して装着する。

レザーアーマーといっても胸当てと手甲、腰のスカートといった、動きやすさを重視した軽装である。

ショートソードを抜いて、刃こぼれがないか確認。

貴族の娘であるのにもかかわらずこんなことをしていると、確かに奇異の目で見られることもある。

しかし、今回の父の話はまるでリアを政略結婚の道具を扱おうと言う話、イタリとのお見合いだ。

そんなことになるなら死ぬまで冒険者として自由に生きていたほうがマシだ。自分の好きになった相手と結婚はしたい。ま、恋もしたことがない自分に運命の相手がいたとしても、想いを伝えられるかは不安だが。

ショートソードの刀身に映った自分の顔を見ながらリアはため息をついた。

リアが知り合いの鍛冶師に打たせたそれは、銘を『ウイングレイ』という。

刃渡り50センチで柄は20センチ。本来は片手で扱うショートソードを、柄を長くして両手で扱えるようにしたものだ。

両手で扱うことによって剣を振る速度は上がり、刀身を短くしたことで重量は抑えられている。日の光が銀色の刀身に反射して煌く様子から、『翼の閃光』と名づけられた。

しかし、そんな光に満ちた剣は自分とは対照的だ、とリアは思う。
めずらしい闇色の髪と目がリアのコンプレックスだ。

種族は光人なのに…、と場違いなことを考えながらリアはウイング
レイを鞘に収めた。

用意を終えたのはリアが最後だったようだ。他のメンバーはみんな
立ち上がって体をほぐしていた。

シグントはリアが準備を終えるのを見てから周りをぐるりと見渡し
た。

「みんな用意は終わったようですね。それでは、最後の作戦確認を
したいと思います」

その呼びかけに、リアを含む9人の視線が一斉にシグントに集まっ
た。

「いいですか？ まずブラックドラゴンに挑む前に、キナク達三人
が支援魔法で全員の身体能力を強化。ブラックドラゴンとの遭遇後
はシールドでパーティへの直撃を防いでください。回復も任せまし
たよ？」

シグントが魔人たちの三人に視線を向けると、キナクと呼ばれた魔
人が頷き、後ろの二人を振り返る。

「そして、ブラックドラゴンとエンカウントしたら、リア様含
む光人の四人は動き回ってブラックドラゴンを攪乱してください」

はい、と間延びした返事をするリアとシグント以外の光人、

「最後にカギルとクギル、あなた方はブラックドラゴンにダメージ
を与える役です。防御は考えなくてもいいので、全力で攻撃してく

ださい」

おう！ と野太い声を響かせるカギルとクギルと呼ばれた獣人たち。

「それでは…行きましょう…！」

「『フィジカルブースター…！』」

シグントの作戦開始の合図を聞いた瞬間、魔人たちが身体強化の魔法スキル『フィジカルブースト』の広範囲発動型『フィジカルブースター』を発動。

辺りに仄かな光が満ちて、リアは自分の体が軽くなっていくのが分かった。

リアたちが座っていた場所からドラゴンがいる大洞窟まで50メートルほど、ドラゴンにはもう気づかれているだろうから、慎重に行く必要は無い。

全員が疾風のように洞窟の中を走りぬけ広い空間へと体を躍らせた。

「グウオオオオオオ！！！！」

ブラックドラゴンがリア達の姿を認めた瞬間、竜族特有の莫大なプレッシャーを咆哮に乗せて撒き散らす。パーティの大半が動きを止めた。それを気にせず動いているのはシグントともう二人、

「行くぜえ！」「おうよ！」

カギルとクギルが獣人特有のスキル『獣化』を発動。二人の肌が白銀の毛で覆われ、髪が伸びる。

筋力を一点強化する『獣化』、

全体的に身体能力を少しずつ強化する『フィジカルブースター』、その二つの相乗効果で身体能力をパワー以上に強化させてから、洞

窟の中央に君臨するブラックドラゴンに飛び掛った。
その二人の行動にリアは舌を巻く。

（ブラックドラゴン相手に何の躊躇もしないなんて……！ ……負けるのはイヤよ！）

無駄な闘争心を發揮して、リアは体のギアを戦闘用へと徐々に上げていく。

「フツ……！」

呼吸を吐きながらブラックドラゴンへと突っ込んでいく。

半月を描くようにリアが走りこんでいくと、カギルとクギルが戦斧を手にドラゴンの正面と真後ろに回りこんでいたところだった。

「……ヌアツ……！」

カギルたちが全く同じタイミングでブラックドラゴンへと飛び掛った。

しかし、

「グアアアアアア……！」

ブラックドラゴンが翼を広げ、竜族の使う飛行用の竜風魔法『スライウィンド』を發動。

巨大な体軀を時計回りに回転させて飛び掛ってきたカギルとクギルを吹き飛ばした。

「チイツ……！」

カギルが舌打ちとともに着地する。クギルもうまく着地できたようだ。

「今度は！ 私の！ 番よっ！」

一拍ずつ区切りながら気合を放つ。

ブラックドラゴンが着地した瞬間にウイングレイをドラゴンの足に叩きつける。

しかし、ギャリン！ と、鱗に刃が弾かれてしまう。

「く…そおお！」

お嬢様らしからぬ悪態について、ウイングレイを何度も振るうリア。

「私たちも負けてられないわよお！」

他の光人の三人もリアに動きに鼓舞されたのか、各々の武器をブラツクドラゴンにぶつけていく。

ブラツクドラゴンにダメージは通らないまでも、頭に血を上らせることぐらいは出来たようだ。カギルとクギルへの対応も最初より力任せに、そして単調になってきている。

「離れていなさい！ 『ライトスラッシュ』！！！！！」

シグントが全種剣用スキル、光属性重斬撃『ライトスラッシュ』を発動させる。

大上段に振りかぶったシグントの大剣から真つ白な光が滲み出し、シグントの体を覆っていく。

シグントが大剣を持ったままかなりの速さでブラツクドラゴンに接近、同時にリア達がブラツクドラゴンからバックステップで距離を

とる。

「おおおおおお！！」

ドッ！ と、光が炸裂、大剣の刃がブラックドラゴンの鱗にめり込み、わずかに鱗が割れる。

「行けるぞ！ 畳み掛ける！」

全員がギアをマックスまで上げ、ブラックドラゴンに攻撃を加えていく。

斬撃、斬撃、刺突、殴打、障壁、回避、斬撃、殴打、斬撃、回避、防御、スキル、刺突、刺突、スキル、斬撃、障壁、回復、刺突、斬撃、スキル、斬撃、斬撃――。

全員が渾身の力を振り絞っていく。
しかし、ドラゴンもただじっとしているわけではない。

右腕での薙ぎ払い、竜風魔法での回転防御、ファイアブレス、左腕での薙ぎ払い、ファイアブレス、薙ぎ払い、薙ぎ払い、ブレス、薙ぎ払い、ブレス、咆哮、ブレス、咆哮――。

リア達とブラックドラゴンの戦いが続く。

5 リア、はじめてのどらごんたいじ♪（後書き）

ほんととはもつと早くに投稿しようと思ったんですけど書いてた本文がPCの電源が急に落ちてロストしてから書く気がしばらく起きませんでした…

次の話も書いてあるので明日更新します^^

6 リアの初恋？（前書き）

リアのキャラが分からない…orz

6 リアの初恋？

竜族の中でも一、二を誇る戦闘力を持つブラックドラゴンは、やはり強かった。

十分間の神経をすり減らすような死闘に加え、精神力と体力を消費する武器スキルの連発、集中力を切らしたカギルとクギルが仕留められ、光人の三人も体力が尽きたところを吹き飛ばされた。

キナクたち魔人が回復魔法『ヒール』を使っていたので外傷は回復しているはずだが、直接『焼かれた』感覚や、『痛み』までもが回復できるわけではない。怖気ついて腰を抜かしているような状態になっているものが大半だ。

前衛メンバーが五人リタイアして、残るはリアとシグントの二人。それに後衛役のキナクたち三人の魔人だ。

「グルア！！」

轟！！ とブラックドラゴンがリアに向けてファイアブレスを吐いた。

一直線にリアに向かってくる灼熱の槍を前転で潜り抜け、高速移動のスキル『ダッシュ』でドラゴンに飛び掛っていった。

「敵を喰らえ！！『エアロファンクス』！！」

リアの編み出したウイングレイ専用スキル『エアロファンクス』
ショートソードの特性である短い刀身、ツーハンドソードの特性である長い柄。

その両方を使って、リアは片手剣用スキル、二連撃技『デュアルフ

アング』と、両手剣用スキル、風属性単発重斬撃『エアロブレイド』を同時発動。

武器スキルの力の源である双子の神の一人「ナヴィス」が定めた武器スキル発動の条件はスキルに合った武器の特性があること。

魔力と明確なイメージさえあれば発動できる魔法スキルとは違い、武器スキルには様々な制約とナヴィスからの人の動きを超えた動きをするためのアシストがある。

制約とはつまり、大剣用スキルを片手剣で発動しようとする、スキル発動の要である神からのアシストが受けられないため、発動は出来るが体に負担がかかる。

しかし、逆に言えば、武器ごとの特性を理解し、一つの武器に組み合わせれば多種スキルの同時発動は可能と言うことだ。

二連撃技『デュアルフアング』と風の属性を付与した重斬撃『エアロブレイド』、これの同時発動が可能であることに気づいたリアは一週間ほどの修練でスキルの合成を完成させ、スキルカードのスキル欄にウイングレイ専用スキル、風属性二連重斬撃『エアロフアングス』（ナヴィス命名）を加えた。

だが、『エアロフアングス』がブラックドラゴンにヒットする直前、ドラゴンの右腕が動いて、リアを壁際まで吹き飛ばした。

「かふっ…！？」

リアが身に着けていたレザースーツが裂け、肺からは強制的に呼吸が吹き出された。

壁に叩きつけられ意識が飛びかけるもどうにか持ちこたえる。

視界の隅でブラックドラゴンの腹がどんどん膨らんでいくのが分かった。

（まずい…！？ プレス…）

リアは体に鞭を打ってプレス of 攻撃範囲から逃れようとするも、ピ

クリとも動かずに洞窟の床に倒れふす自分の体が恨めしい。

「『『プロテクトバリア』……!!!!」」

リアの絶体絶命のピンチを救ったのは魔人の三人だった。

ブラックドラゴンとの間に高速で三枚の障壁を展開すると同時に、ブラックドラゴンの口からも、ブォァッ！ と炎の奔流が流れ出す。三枚の障壁と炎がせめぎ合う。しかし障壁が竜炎魔法に分類されるファイアブレスの為、ピシリ！ と、ひびが広がっていく。

キナク達は苦しそうに顔を歪める。

一撃だけを防ぐのなら一度の魔法に込める魔力だけで済むが、常に押し寄せてくる炎に耐えるためにキナク達は魔力を障壁に流し続けているのだ。いかに光人の十倍ほどの魔力量であったとしても相当にキツイだろう。

「うおおおおおー……！！！！」

シグントが氣勢をあげてブラックドラゴンに斬りかかった。重い鋼で作られたフルプレートアーマーを纏っていないかのような動きでブラックドラゴンに突っ込んでいく。

「セアッ……!!」

突進力を斬撃に添加し、シグントはブラックドラゴンの右足に大剣を叩き付けた。

ガイン！ しかし大剣はブラックドラゴンの鱗にふれた瞬間に弾かれてしまう。

「く……ッ！」

ブラックドラゴンの腕が、動きを止めたシグントの真上に振り落とされた。

がっしゃーん！ とにぎやかな音をたててシグントが崩れ落ちる。

「…シ…グント！」

リアは体を無理やり動かして、傍らに落ちているウイングレイを掴んで立ち上がる。

「君！ 無理だ！ ここは撤退しなければいけない！」

キナクがリアに走りよって撤退を指示する。光人たちもなんとかシヨック状態から回復してシグントを二人がかりで運んでいる。

「なら…時間稼ぎは私がやるわ！」

こんなやり取りをしている間にもクギルが吹き飛ばされた。まだ、『焼かれた』シヨックからは回復していないようだ。

「……………頼みました、おい！ 撤た——ッ！」

キナクの撤退の指示が途中で途切れる。その原因とは、ドゴンッ！！ と、リアとキナクの目の前の壁に何かが衝突したからだ。

「………は？」「……」

その場にいたリアや魔人たち、シグントと仲間を介抱していた光人が顔に「？」を浮かべる。

「ッ！　いったい何が？　あつ！　頭からぶつかったよーな気がする…　大丈夫か？」

土煙の中から頭を押さえた一人の男性…というよりも少年が出てきた。歳はリアと同じくらいだろう。何事かを呟いている。

リアは己の目を疑った。どこから出てきたというのだろうか、このガラム洞窟には入り口が一つしかなかったはず。

ブラックドラゴンのような膨大な魔力があれば最上位魔法スキルの一つである『テレポート』が使えるが、この男はどう見てもドラゴンには見えない。百歩譲って魔人の最高クラスの魔力保有量であるならば納得もいくが、肌の色も魔人のようなアルビノではない。

リアが思案にふけっていると、少年がこちらを向く。

（なにかしら？）

リアがそう思った次の瞬間、少年は口を開いてとんでもないことを言った。

「俺がこいつをやるから、少し下がってくれないか？」

一瞬何を言っているのか分からなかった。リア達十人でさえ敵わなかったブラックドラゴンをこの少年は一人でやる、と言っているのだ。

「は？　あんた何言って――」

リアは思わず聞き返そうとするが、それが終わる前に武器、おかしな形状をした剣を抜いて地を蹴ってしまった。

「ちよっ！　あんた…！？」

少年は何らかのスキルを使ったのか、一瞬でドラゴンの前に進むと大きく飛び上がって、剣を横薙ぎに振りぬいた。

「ラアッ!!」

少年の氣勢とともにブラックドラゴンの腹に剣が滑り込んでいく。落下中にも何度か斬りつけている。

（嘘でしょ!? 何であんな簡単に…!?）

魔物の中でもトップクラスの硬さを誇る竜鱗を容易く切り裂いていくことに、リアは目を丸くするが、驚愕する事象はそれだけではなかった。

「グオオオオオオ!!」

ブラックドラゴンが怒りの声を上げて大きく息を吸い込む、そして竜炎魔法のファイアブレスの上位版であるフレイムカノン放った轟!!! 範囲攻撃の部類に入るファイアブレスよりも威力の高いフレイムカノンが、少年に向かって大気を燃やしながら飛んでいく。しかし、少年は向かってくる炎球を前に剣を大上段に振り上げている。

（何してんの!? 炭になるわよ!?）

リアがそう思った刹那、少年の腕が霞み、炎球が真つ二つに別れ、少年の背後に飛んでいった。

それは少年が剣で斬ったからだ、とリアの脳が認識するより早く、今度はブラックドラゴンの右足の傍に少年が現れる。

「セイツ！」

少年が剣を右手だけ持ち、大きく振りかぶったかと思うとブラックドラゴンの右足が飛ばされ、血が吹き出る。

「ガアアアアア……！」

「アヒルかお前は……！」

少年はブラックドラゴンの叫び声に何か侮辱のような言葉を投げかけると、凄まじいジャンプ力で後ろの壁に体を向かわせる。

タン！ と着地したかと思うと、それに倍する音を響かせて矢のようにブラックドラゴンへと飛び出した。

ズバン！！ という轟音が響いたと思うとブラックドラゴンの首が落ちた。

「え？」

リアの口から小さな眩きが漏れる。リアには何が起こったか分からないうちにブラックドラゴンが死んでいたのだ。

リアに圧倒的な強さを見せつけた少年は、ふう、というため息をつく。その端正な顔をリアは横からまじまじと見てしまう。そしてそんなリアの胸中に一つの思いが去来した。

（なんだろう…、胸が…苦しい？）

リアには未経験の体験であり、それが何かは分からなかったが、聡明なリアはそれが俗に『恋』と呼ばれるものだろうと、一瞬思ってしまう。

しかし、

（恋って……なんで？　こんなに苦しいものなの？　…ううん！
私が恋なんてするわけない！）

リアも女の子である。だが、それ以前に警戒心の強い冒険者なのだ。
ぶんぶんと頭を振っている、少年は血払いのためか剣を振っている。
ポポッ！　と音がして、ブラックドラゴンの足が傷つけられた。
そして少年の体から光が滲み出して薄れていった。

「ぬ…？」

なぜか眉を潜めながら少年は剣を鞘に収めた。そしてぼそりと呟く。

「……………あんま使うのやめようコレ…、感覚鈍るわ…！」

んんー！　と伸びをしている少年の背中をリアが見つめていると、
少年が唐突に振り向いた。

少年の視線がリアと交錯する。

（わっわっ！　どうすればいいのよ！）

パニックになるリア、とにかく何か言わなければという思いに駆られてしまう。そして、口から出たのはリアの言おうと思っていた言葉と正反対のものだった。

「あんた…何者なの…？」

（何言ってるのよわたし！！）

全力で己に突っ込むリア。本当はお礼を言いたかったのにー！　と後悔していると少年が苦笑いしながら自分の手元を見ているのに気

づいた。

「何者って言われても困るんだけど…」

（もしかして…私警戒されてる！？）

自分が感謝をしたいと思っている相手に警戒されていると分かってしまったリアだが、魔人に『ヒール』を掛けてもらって回復したシグントらの周りの目もあるため今更、態度は変えられない。

「えっと…、とりあえず一つ教えてほしいんだけど良い？」

少年の言葉に、なるべくこちらを刺激しないようにしている感情が読み取れて少し落ち込むリア。

（はぁ…って何で私が落ち込まなきゃいけないのよ！）

しかし、返事をしないわけにはいくまい。でもなぜか話しかけられない状態になってしまっているのだがどうすればよいだろう。そこで、一番自分の意図を読み取ってくれそうなシグントに話を振った。

「…シグント、どうする？」

シグントは少年からは見えないように、一瞬だけリアにいたずらっぽいウインクをしてから、少年へと向き直る。
そして、

「シグント！？」

いきなり少年に頭を下げたのだ。リアは思わず声を上げてしまう。

「まずは礼を言わせていただきます。ありがとうございます、君のおかげで助かりました。しかし、それとこれとは別。君が突然現れた不審人物であることに変わりはありません」

シグントの不審人物と言う言葉に反応したのだろうか、パーティの面々が少年を囲み始めた。

しかし、少年はまるで動じずにシグントに話しかけた。

「はじめまして、シグントさん？ 俺はフジミヤ コートって言います。あなたが不審人物って言うのも分からなくは無いですよ」

一度、言葉を切って少年はスキルカードを取り出した。

「『わが身を証明しろ』、これでよければどうぞ？」

シグントにスキルカードを差し出しているが、リアの頭の中はそれどころではなかった。

（フジミヤコート？ コートっていうんだ…！ コートコート…！
…それがなんだっていうのよ…！）

初めての一目惚れ、しかも恋愛をしたことの無い少女には想い人の名前を知っただけでも興奮する材料になるようだ。リアはそれが恋だと認めてはいないが。

「…君が名前については嘘をついていないのはわかりました。質問を聞きましょう」

シグントが少年、もといコートに質問の許可を出す。

「…ここって…どこなんですかね？ それと、あなたたちは何でドラゴンと戦っていたんですか？」

（冷静だし…イタリなんかとは大違いだわ）

コートの質問に関係ないことを考えてるリア以外のパーティーメンバーの全員が目を丸くした。

「…どこ…ですか？ …ここはマドミス王国のガラム洞窟。私たちは最近ここに住み着いたブラックドラゴンを討伐するために結成されたパーティー『黒竜討伐隊』です。それで君のことも教えてもらいたいのですが…」

「マドミス王国…？ すみません、なぜか自分の名前しか思い出せないのです…」

少し哀しそうな表情を見せたコートにシグントは、納得したような仕草をみせる。基本いい人だからだろう。

「すまない、悪いことを聞きましたね…。その詫びについてはなんですが、先ほどの礼もかねて、マドミスの首都へと送りましょうか？」

シグントがリアの望んでいたことと全く同じことを言ってくれた。しかし自分の恋を認めたくないその口からは拒絶の言葉が出てしまう。

「シグント！ 怪しすぎるわ！ こんな男をパーティーに入れるなんて…、私は断固反対よ！」

「しかしですね…リア様、我々も疲弊しております…。先ほどのこの者の技量は見たでしょう。我々があそこまで苦戦したブラックドラゴンを簡単に倒したのです。戦力の拡大にはもってこいでしょう

？」

リアが納得できる理由をつけるためにもっともらしくシグントが説得してくれている。

自分の中の乙女心が首をたてに振ろうとするが、冒険者と恋愛に初心な部分がそれを邪魔する。

内心でリアが泣きたくなくてきていた次の瞬間、リアに声が掛けられた。

「あの一、リア…様？」

「何よっ！！」

思わず乱暴になってしまった。…嫌われたかも、と落ち込む乙女心に、これでいいんだとささやきかける冒険者の部分。しかし、

「なっ！」

「リア様…、貴女が私を嫌っていることは良く解りました。ですが私は…貴女の側にいたいと…心から願っております。どうか短い間だけでも貴女の盾として…」

甘い言葉と共に手の甲に何かやわらかいものが押し付けられた。

リアの頭の中が真っ白になる。と、同時に冒険者の部分の99パーセントがノックアウトされた。

「え…とえとえとえと！ わかったわ…！王都までなら一緒に来てもいいわよ…」

自分の顔が真っ赤になっていくのが分かった。しかし、残りの冒険者の部分が復活、邪魔をして「でも！」と続けてしまう。

「…でも？」

聞き返してくる彼に一応、自分がコートが好きだってことがばれないように言うておく。

「あんたのことが気になってるわけじゃないんだからねっ！…！」

しかし……最後に自滅していることに気づかないリアであった。

6 リアの初恋？（後書き）

突然ですが！！

皆さんにお願いがあります！！

えっと、主人公たちが使うスキルが全然思いつかないので募集したいと思います！

拙い作者に救いの手を差し伸べてくださる方がいましたら感想などに書き込んでくれると嬉しいです!!!!!!

お願いします!!!!!!!!!!!!!!

7 名探偵シグント！？

「それじゃあ、ブラックドラゴンの素材を剥ぎ取りましょうか」

リアのツンデレ発言の後、シグントが俺に話しかけてきた。素材の剥ぎ取りとかできねーよ！ と、内心でどう答えるべきか迷っていると何故かリアが口を出す。

「『黒竜討伐』のクエストを受けたのは私たちだけど、実際に倒したのはあんただから素材の所有権はあんたにあるのよ。でも、その代わりにクエストの賞金は私たちがもらうけど」

懇切丁寧にほどもないがリアが説明してくれた。そこで、俺はある可能性に気づいてリアに質問してみた。

「へえ…、でも、それを俺に教えなければ素材全部を横取り出来たんじゃないか？」

「少なくとも私やシグントはそんなことしないわよ。あんたが記憶を無くしてるらしいから教えてあげただけ」

「ありがと、リア様。優しいんだな？」

「なっ！？ べ、別に優しくなんか無いわよ！」

礼を言ったら怒鳴られてしまった。なぜだろう。

リアがそっぽを向いてすたすたと歩いていってしまったので、ひと

まずそれは置いて、シグントに剥ぎ取りの手伝いをレクチャーしてもらうことにした。

「えっと、シグントさん。剥ぎ取りのやり方も忘れてるみたいなんです。良かったら教えてくれませんか？」

「いいですよ、それとシグントで結構です。話し方ももっと楽しんでくださると嬉しいですね、コート君」

「オッケー、シグント！」

「あはは、それでは剥ぎ取りを始めましょうか」

そう言つてシグントはドラゴンの死骸の方に歩いていこうとするが、二三歩歩いてから急に俺に振り返る。

「そう言えば…コート君、貴方のスキルカードに何か追加されてないか確かめてくれませんか？」

「え？」

「いえ、別にコート君のことを探ろうとしているわけではないですよ？ ドラゴンを単身で撃破したのですから『竜殺し』の称号が追加されていてもおかしくないでしょう」

それを知りたいのです、と続けるシグントに俺はスキルカードを具現化してみる。

フジミヤ コウト

所有スキル『神速神武』『竜断ち』

『竜鱗』『竜力』『竜心』

称号『竜殺し』

「…シグント…『竜殺し』はあつただけだよ…」
「…どうしました？」

俺は自分のスキルカードに追加されていたスキルと称号を見てげんなりする。

なんだこりゃー！ と叫びたくなるのを我慢して「我、開かん」と呟き、シグントにスキルカードを開示した。『神速神武』の部分だけは隠しておく。

「これは…！」

シグントが絶句している。その顔が面白くて吹き出しそうになってしまった。

いかんいかんと首を振ってから、新たに増えたスキルがどのようなものなのかと質問する。

「スキルの部分を指で触ると詳しい情報が得られますよ？ 生憎それは持ち主にしか出来ませんが」

ふーん、とあいづちをうちながら俺は『竜断ち』と書かれているところに触れてみた。

フォン！ と一瞬だけカードが光ったかと思うと中に書かれている内容が変化していた。

『竜断ち』

刀用スキル、単発重遠距離斬撃。

衝撃波を発生させ斬撃を離れた場所に命中させるスキル。発声発動型

俺がスキルカードの中身を見て感じたことは二つ。

（重遠距離斬撃ってなんだ！ あと説明アバウトすぎんだろ！
離れた場所に命中させる」…って！！！！）

「シグント…他の見るにはどうすれば？」

「もう一度スキルの部分を触れば元の状態に戻れますが…」

シグントの言葉が終わる前に俺は片っ端からスキルにタッチしていた。

『神速神武』

神の力を持つものに顕現するスキル
詳細不明

『竜鱗』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル
物理、魔法、全ての耐性が大幅に上がる。常時発動型。

『竜力』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル
筋力を飛躍的に上昇させる。常時発動型。

『竜心』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル
魔力の量をドラゴンと同等にする。常時発動型。

「…何だこれは…！」

俺は眉間にしわを寄せて低く唸った。

「あ、忘れているかもしれないので言っておきますが、自分の名前を触ると、今現在のステータスが分かりますよ」

「おっけい…！」

シグントが親切に俺に教えてくれる。俺がスキルカードを突き破らなばかりの勢いでタッチするとまた画面が切り替わった。

フジミヤ コウト

筋力	S
魔力	S
体力	S
敏捷力	A
物理耐性	S
魔法耐性	S
所有スキル数	5

（チート…だよなあ？）

俺はスキルカードに書かれた自分の能力に少し疑問を持つ。アース

でも剣道をやめてからはゲームやラノベも読んでいたので大体の予想はつくが平均が分からない。

そこで、とりあえず聞いてみることにした。

「えーと、シグント。参考までに聞いておきたいんだけど…Sって？」

シグントは「S」と言う言葉を聞いて、おや…というような顔をした。

「やはりSランクがありましたか…、文献のとおりですね」

「…文献？」

「ええ、『竜殺し』を得るためには単独でドラゴンを捻じ伏せる必要があり、コート君はそれをクリアしました。そして、過去に『竜殺し』の称号を持った人には、筋力をSランクにする『竜力』、魔力をSランクにする『竜心』、物理、魔法耐性をSランクにする『竜鱗』のどれかを取得できる」

そこで言葉を切って、シグントは首を振った。

「しかし、さつきコート君にスキルを見せてもらいましたが…その三種類の全てを君は習得していました。それは過去に例の無いものです」

「へー、俺ってすごいんだなー」

「はい、あれらのスキルは隠しておいたほうがいいかもしれませんね」

「おけ、んじゃ剥ぎ取りにいいこうか」

「……それだけですか？」

「……他に何が？」

俺の態度に、なぜかシグントは戸惑っていた。その理由を考えていると一つ思い当たることがあった。

「ああ、んで。Sランクって何？」

「Sランクは普通の光人の成人男性1000人分くらいの能力です。ちなみにAは100人分…って違いますよ!!」

「違うって何が？」

あくまで冷静にシグントに聞き返しながら、俺は己の異常性について考え始める。

（普通の光人…ってのが良くわかんないけど、1000人分ってのは尋常じゃないだろ）

さて…どうするかねえ、と思案に耽る俺にシグントは呆れたような口調で呟く。

「コート君は自分の存在が特別だってことを知ったほうがいいですよ…!」

それだけ言って、剥ぎ取りにいきますよ、とシグントは俺の手を引っ張って行く。

しかし、俺は最強になるべくこの世界に来たのだ。最強が特別でなくて何になる。

俺はそこで思考を自己完結させて、おとなしくシグントについていた。

30メートルくらい歩いた場所には、ドラゴンの死骸が横たわっていた。

「なんか…よく見るとでかいよな…」

「何を言っているんですか…、君が倒したのに」

目の前で見えるブラックドラゴンの死骸は小山のようだった。

でも良く考えたら当然だよな…、頭の先から足までで20メートルくらいあるんだから。

と、俺はそう理由づけてからシグントの方を見やると、刃渡り30センチほどのナイフを鱗と鱗の間に突き立てているところだった。

「それが剥ぎ取りってやつ？」

俺が声を掛けると、ガスガス！ と鱗と肉を剥がすシグントは振り向かずに答えた。

「はい…！ こうやって素材を『剥ぎ取る』んですよっ！」

力んだ声と共にシグントの筋肉が盛り上がり、縦40センチ、横20センチほどの楕円形の鱗がベリッと剥がされる。

ブラックドラゴンの体から剥がされたそれは黒い輝きを放っていた。

「ふうん、結構綺麗だなそれ…」

「ドラゴンの鱗はかなり貴重ですから…とくにブラックドラゴンのものとなれば尚更」

そう言ってからシグントはまた新たに一枚の鱗を剥ぎ取りにかかった。

俺は自分もやってみようと思って腰に帯びている刀を抜く。少し離れた場所まで歩いて一枚の鱗に目をつける。シグントと同じように刀を鱗と鱗の間に突き立てて、てこの原理で剥がしにかかる。すると、俺が思っていたより鱗は簡単に剥がれた。

「おおっ！」

微妙な達成感があった。それに意外と面白い。俺は調子に乗ってバリバリと鱗を剥がしていく。10分もすると、俺の周りには剥がされた鱗が散乱して地面が黒く光っていた。

「こんぐらいでいいかな……」

俺は落ちている鱗を拾い集めてから、少し離れた場所で剥ぎ取りをしているシグントの元へ向かう。シグントは鱗と格闘しているとこらだった。

「このくらいで大丈夫？」

俺が声を掛けるのと、シグントが鱗を剥ぎ取るのは同時だった。シグントは剥ぎ取った鱗を抱えてから俺のほうを振り向いた。

「…どのくらい取れましたか？」

息を荒くして振り向きながら聞いてくるシグントに俺は鱗を突き出す。

「こんぐらいだけど…どうかな？」

「！！ そんなにとったのですか！？」

なぜかシグントが驚いている。ていうか、さっきから驚いてばかりだなシグント。

ふと、シグントの傍に置いてあった鱗を見ると、数は…6。

それに対して俺が取った鱗の数は30を超える。

それは実にシグントの五倍の速さで鱗を剥ぎ取っていたということになる。

「……………ふむ」

シグントは俺の取った鱗を手に取り、まじまじと見つめながら点検している。

「すごいですね…、綺麗に剥ぎ取れてます」

よっしゃ！ と俺がガッツポーズをとりながら喜んでいると、シグントは少し離れた場所にある自分の荷物から小さな袋を取り出してきた。

「コート君にお願いがあるのですが…、その鱗を私に売って頂けませんか？」

そう言つて袋の中から金色に光る大きなコインを取り出した。

「この袋の中には小金貨が15枚入っています。『黒竜の鱗』はとて面白い防具の材料になるので、とても鱗三十枚分の60枚には及びませんが、残りの45枚は王都に着いてから支払います」

ああ、鱗の所有権は俺にあるから売ってほしいってことか…、しかしシグントの言う相場が本当かどうかは分からないから、売るのは迷うな。

俺は、そこで一つの考えを実行することにした。

「……………鱗三十枚で、その小袋の中身だけでいいよ」

「…どういうことですか？」

「交換条件ってこと。鱗の本当の相場と、それに貨幣の換算の仕方、価値を教えてほしい」

俺が満面の笑みで理由を伝えると、シグントは少し黙り込んだ後面白そうに笑った。

「…やっぱり…コート君は面白いですね…」

ハハハ！ と愉快そうに声を上げて笑うシグント。

「では、答える代わりに逆に一つ教えてもらいましょうか…。よろしいですね？」

悪戯っぽい微笑を浮かべながら俺に問いかけてくる。俺は、コクン…と首を縦に動かしてそれに応答した。

シグントは周囲をきよろきよろと見渡してから口を開いた。

「リア様がいらないから言いますが…コート君、君は記憶喪失なんかじゃないですね？ 私の考えでは…」

挙動不審に辺りを見渡していたのはリアを探していたらしい。
俺の秘密を暴くかのようなことを言って一度、言葉を切るシグント。

俺はゴクッ…と喉を鳴らしてシグントの言葉の続きを待つ。

「異世界人ではないですか？」

シグントに、俺の正体がバレた。

7 名探偵シグント!? (後書き)

大幅な加筆修正しました。

読み返してもらえると嬉しいです。

九月八日

8 ドラゴンの卵？

「異世界人ではないですか？」

シグントの問い。それはまさに俺の秘密そのものであったが、どうして言い当てられたのだろうかと考える。

無論、シグントには悟られないように無表情を貫く。

問いかけられたときには一瞬だけ目を見開きそうになったが、ピクリとまぶたが動くだけだったと思う。

（どうして分かったんだ？ いや、カマをかけてるだけかもしれない…。様子を見てみるか）

「…何言ってるの？ シグント」

「ですから…君は異世界人ではないですか？」

目を逸らしながらごまかす俺、しぶとく聞いてくるシグント。

よく考えてみると、何のヒントもなしに『異世界人』というワードが出てくるわけが無いのだ。

シグントにはバレてると思ったほうがいいだろう。

「…あー、そうだよ、俺は異世界人だ。…なんで分かった？」

俺は頭をガシガシと掻きながらシグントに白状する。するとシグントは少し笑ってから語りだした。

「私は意外と本を読むのですよ。昔読んだ歴史書に書かれていまし

た。過去に二度、このガラム洞窟には異世界からの旅人が現れています。一人は世界最強の大魔法使い、もう一人は世界最強のドラゴンライダーとしてこの世界に名を馳せました。そして、その二人の共通点はこのガラム洞窟に現れたことと、二人が現れる直前には必ずブラックドラゴンがこの洞窟に住み着いたこと」

まあ、他の種類のドラゴンも住み着くのですがね、と真顔で聞く俺にそう続けてからシグントは俺の顔をじっと見つめてからニヤツと笑った。

気持ち悪い。

（どういうことだ！！ 聞いてないぞ糞イエス！！！！）

心の中で色々と説明不足な神様に悪態をついていると、俺の脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

「へえ、でもそんな話が広まったら、またここにブラックドラゴンが住み着くと騒ぎになんじゃないか？」

「ええ…ですが、300年前と600年前の話なので大丈夫だと思いますよ」

「じゃあ平気…か？ …それより俺の質問にも答えてくれよ？」

俺は自分だけ色々答えさせられていること苛立ちを覚える。それと同時にシグントがかなりの頭脳を持っていることを悟った。

（さっき一度信じたように見せたのは…俺を欺くためのブラフか…）

そして苦笑いしてからシグントに交換条件の答えを促した。

「わかりました。鱗の相場…でしたね？ 『黒竜の鱗』…この品質

に光以外の魔法耐性の上昇効果付きですから、一枚につき小金貨八枚と言ったところででしょうか」

「ッ……!?!」

本当の相場を聞かされて絶句する俺。いくらなんでもボツタクリすぎだろシグント……。

思わず、頬を引きつらせてしまう。まさかシグントがそんなに狡猾だと思わなかった。

「……切り刻むぞシグント」

「ハハハ……。落ち着いてください。竜を殺せる君が言うとしやれになりませんよ……。次は貨幣の換算……つまり数え方でしたね?」

「……もったいぶるな、……切り刻むぞ」

「だから落ち着いてください! 本当に殺気が出てますから!」

俺は無意識のうちに殺気をぶつけてしまっていたらしい。それにシグントは冷や汗を流している。

そんなつもりは無かったのにフハハハ。

心の中で邪悪な笑みを浮かべてシグントの解説を待つ。

「小銅貨十枚で大銅貨一枚、大銅貨十枚で小銀貨一枚、小銀貨十枚で大銀貨一枚、大銀貨十枚で小金貨一枚、小金貨十枚で大金貨一枚です!」

シグントが焦りながら一気に教えてくれる。

そのビビりっぷりに心の中で大爆笑しながら俺は次の質問の答えを促す。

「最後のは貨幣の価値だ。答えろ」

わざと脅すような口調を使って、刀の柄に手を置いてやるとますます冷や汗をながすシグント。

さまみろ俺をだまそうとした罰だ。

ビクつきながらシグントは口を開く。

「貨幣の価値…えーと、答えづらいですが…平民の一食が大銅貨五枚ですね」

俺の一食は五百円くらいだから、小銅貨一枚十円ってところか。なら大銅貨は百円、小銀貨は千円、大銀貨は一万円、小金貨は十万円、大金貨は百万円。

（うん？ …てことは鱗一枚八十万だから三十枚で二千四百万…か。シグントは四分の一の値段で俺に売ろうとしてたから六百万のさらに四分の一で俺に入るのは百五十万？）

すくねえなあ…、とため息をついていると、

「これで交換条件は終わりですね？ 代金です」

と言ってシグントが小袋を渡してきた。

俺が中身を見てみると、その中には少し小さな金貨が確かに十五枚入っていた。

その中の一つを小袋の中から取り出して眺めてみると、なかなか綺麗な装飾が施されていた。

「ほい、鱗」

はい！ とシグントに鱗を投げ渡してやる。

「さっきの切り刻むってのは冗談だよ。王都までよろしくな！」

わかってると思うけど、と脅しすぎたかも知れなかったのでシグ
ントとの交友関係を回復しておこうとする俺。

「はい、お願いしますね？」

しびいバリトンボイスで敬語を使われると、なんか違和感あんだよなーと今更ながらに思ったが、それはそれだ。

それと、金を稼ぐためにも必要なものがある。シグメントにもらおう。

「シグント？　なんか大きな布とかあったらくれない？」

「布ですか？　これでよければどうぞ？」

二つ返事に布を俺にくれるシグント。

布の大きさは縦横2メートルくらいで鱗を包むには十分な大きさだった。

俺はそれを受け取ってからブラックドラゴンの死骸の元へと向かった。

「うりゃああああ!!」

と、死骸にたどり着いた俺は掛け声を上げながら片っ端から黒い鱗を剥いで回る。

[illegible]

剥ぐに剥ぐこと二十四枚、俺は光沢のある鱗をベリベリ剥いで行くうちに洞窟の反対側の壁にまで到達、そこで一つの歪な形をした球

体を見つける。これは、

「卵…か？」

アースでの箱根の黒卵のような見た目をしている。

違うのは大きさだろうか、この卵は大きさが1メートルほどもある。

「玉子焼きにでもするか…」

黒卵を見て、俺はこちらに来てから何も口にしていないことを思い出す。

鱗をかき集め布に包んでから背負う。そして卵を抱えるとシグントの元へと歩いていく。

「おーい！ シーグント？」

卵は思ったよりも軽く、簡単に持ち運ぶことが出来た。

シグントの元へと卵を運び、目の前にそっと置いた。

シグントは卵を見ると大きく目を見開いた。ふるふると体を小刻みに震わせている。

「……！！！！ これはドラゴンの…しかもブラックドラゴンの卵じゃないですかー！！」

「そうなの？ ま、とりあえず焼いて食べるか「焼いて食べる！？」

！？」

シグントが俺の言葉を遮って叫ぶ。

なんでそんなに驚いているのだろうか。理由が分からなかったため、冷静に対処することにする。

「うん、焼いて食べる。火イ頂戴？」

「何言ってるんですか！？ リア様、リア様ちよつと来てください
！！」

シグントが何故かリアを呼んだ。

ちなみにリアは洞窟の壁に背を預けてうとうととしてるところだった。
シグントにいきなり大声で呼ばれて飛び起きる。「ひあっ！！」…
可愛らしい声を上げていた。
あ、こっち来る。

「なんか用かしら！？！？」

ダッシュで走り寄りながらシグントを怒鳴りつけるリア。なんか怖いな。

「申し訳ありません…、しかしコート君がブラックドラゴンの卵を
焼いて食べると申すものですから」

「卵！？ ブラックドラゴンの！？」

シグントとよく似たリアクションをするリアだが、大きく見開いた
目をそのまま俺の方に向けてくる。

「あんたねえ！ ブラックドラゴンの卵を食べるとか有り得ないか
ら！！」

「なんで？」

「ブラックドラゴンは存在自体が神格化されているのよ！？」

「それを狩りに来てたじゃんリア様」

「ッ！ 人に害を与えるかもしれないから仕方ないのよ！」

「はいはいご都合主義乙です」

「バカにするなあ！！！！！！」

「ちよつ！！ 何で剣を抜くんだよ！」

こちらの世界にないはずの「ご都合主義乙です」という言葉のニ
ユアンスがからかっているものと分かったのだろう。

腰の剣を抜き放ち振り回すリア、そしてその凶刃から逃げ続ける俺。

それを五分ほど繰り返しリアの体力が続かなくなったところで、命
懸けの鬼ごっこは終了。

ちなみに俺は汗一つかいていない。すごい体力だな、以前の俺な
ら息ぐらいは乱れていただろうに。『竜殺し』の称号すげーな。

「ハアハア……！ とにかく、食べるなんて許さないわよ……！」

「はいはい、それでどうするんですか？」

うーん、とリアは己のあごに手をやって可愛い思案顔を作る。

「あんた、魔力値はどのくらい？」

…魔力値って何だっけ？ ああ、さっきスキルカードに出てた奴の
ことだろう。

リアは俺の魔力の大きさを聞いてくる。それにどう答えるべきか少
し迷う俺。

「えーと、Aランクだけど？」

実際のランクより一つ小さいものを教えておく。それなら大丈夫だ
ろ、そう思っただけの発言だったのだが。

「A！？ そんなに高いの！？」

「そうだけど……」

「好都合じゃない！」

やべ、なんか間違えたか？ そう思ったが、それはいらぬ心配だったようだ。

リアは重そうに卵を抱いて俺の前に置く。

…そんなに重かったかな？ それとも『竜力』の恩恵がそれほど凄いものなのか。

俺は、自分のスキルの力に興味がわき始める。本格的に思考を開始しようとするが、

「ちょっと、この卵に手を当てて！」

リアの声で現実に取り戻される。まあ、後で考えればいいかと思考を頭の隅に押しやり、言われるままに俺は卵に両手を当てた。

「次は魔力を流し込んで！」

「……………」

いきなり、魔力を流し込めとか言われても困るだけである。仕方ない。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。

「…どうやってやればいいんですかリア様」

「…あんたって記憶無いんだっけ」

えっとー、と考え込むリア。

やがて、なにか得心がいったように手をポンと打ち合わせる。

「ちょっと手を貸して？」

突然、リアに両手を握られる。

意外にすべすべとしている陶器のような白い肌だったが、手の平には硬いマメがあつた。

それなりに努力しているのだろう。

「魔力を流し込むから…後は感じて？」

そう言うや否や、リアは目を閉じる。なにやってんだろ、と俺が思うのも束の間、

「なんだこりゃ…！？」

何か得体の知れないものが手の先から流れ込んでくる感覚。

それは、手の先から全身を巡り、そしてまた、握られた部分から抜けていった。

「これが魔力か…」

魔力を流し込む、というのは体の中を流れるエネルギーを意識してそれを外に放出するようなものなのだろう。

納得がいった。俺はリアに声をかける。

「もう、いいよリア様」

声を掛けられてリアは目を開ける。俺とリアの顔の距離は10センチほど、何故かリアは固まってから、段々と顔を赤くしていった。

「あつ…！　そう？　分かったならいいわ…」

ギョーン！　とリアは高速で首をそむける。

それから、卵を指差して、

「卵に魔力を流し込んで…！」

「オッケー」

短く返事をして俺は卵に両手を当てる。

先ほどのリアとは違い、輪のように魔力を通すのではなく与え続ける。

（まずは魔力の通り道を認識、それに掌という出口を作ってこれに流し込む。両手から…一方通行で…）

体の中の力が抜けていくのが分かる。

黒い卵にどのくらい魔力を注ぎ込んでいたんだろうか。

流し込むうちに、ピシッ！ と卵にひびが入る。

「お！？」

感嘆の声を上げる俺の前で、ピシッ！ ピシリ！ そのひびはどんどん広がっていく。

「おお！？」

そして、ピシピシピシ！ とひびが連続して出来たかと思うと、

「がー」

中から、小さく、そして黒い、ドラゴンが現れた。

8 ドラゴンの卵? (後書き)

大幅な加筆修正しました。

読み返していただけると嬉しいです。
九月八日。

9 ドリゴンの名前!?(前書き)

スキル募集中です!!

9 ドラゴンの名前!?

「がー」

という鳴き声をあげて、小さな炎をげつぷと共に吐き出しながら、親のブラックドラゴンをそのまま小さくしたかのような小さいドラゴンが現れた。

「……」

俺とシグントとリアが揃って黙り込む。俺たちが固まりながらドラゴンの幼生を見つめ続けている。

そうしている内にドラゴンの赤ちゃん……ベビードラゴンはさっきまで自分の入っていた殻をポリポリとかじり始めた。

「……」

「ぐる……」

一分ほどで殻を全て食べ終わると、ベビードラゴンは辺りをきよろきよろと見回している。

そして、よたよたと歩くと俺の胸に飛び込んできた。

ベビードラゴンの唐突なその行動に、俺は驚愕に目を見開く。

「なっ……!?!」

「ぐるぐる……」

ベビードラゴンは座り込んでいた俺の膝の上で体を丸めると、甘え

たような声を上げる。

それにどう対応するべきか迷ったが、とりあえず頭から背中にかけて優しくなでてやった。

「ぐあゝ」

俺の膝の上で気持ちよさそうな声をだすベビードラゴンを横目で見ながら、リアが口を開く。

「アンタのこと…親だと思ってるみたいね」

「親？ 『刷り込み』 ってことか…」

「すりこみ？」

「ん？ えっと…最初に見た物を親だと思い込む習性のこと」

「ふーん」

「コート君！ 」

「え？ …あっ！ 」

ベビードラゴンの鱗のすべすべとした感触に、つい気が緩んでしまっていた。

リアはお嬢様っぽいのに『刷り込み』を知らないってことは、この世界では伝わらない言葉なんだろう。

急いでさっきの発言をフォローしようとする。余談だが、フォローってのは「ついていく」って意味なんだよな。日本で使われている意味は変化したものらしい。

「まあ、どこかの本で読んだ知識だけど」

「そうなんだ、意外と物知りなのね？ アンタって」

リアは特に疑うこともしなかったので、俺は胸を撫で下ろした。ふー、とため息をついているとシグントが小声で話しかけてくる。

「（気をつけてくださいね…！）」

「てか別にバラしても問題ないような気がするんだけどな」

「（声大きい…！！）」

「どうしたの？」

俺とシグントがコソコソしているのを不審に思ったのか、リアが声をかけてくる。

それに、ビクッと反応するシグント。

「い、いえいえ…何でもありませんよ、リア様」

「？　ならいいけど、ねえコート…その子撫でてもいい？」

「あ、ああ…いいぜ？」

二人揃って冷や汗を流しながらごまかす。

だが、リアはベビードラゴンに興味津々のようだ。

目を輝かせながら、しかし恐る恐るといった感じでベビードラゴンに触れる。

「…可愛い…」

「ぐる？」

目をキラキラさせながらリアがベビードラゴンを撫でている。

そこで、ふと俺は一つのことを思いついた。

「そうだ、こいつに名前付けないと…」

「名前？」

リアが顔を上げて聞き返してくる。

そのときリアは俺の顔を見上げる形になり、急に顔を赤くすると後

ろに跳び退る。いや、実際にそんなことをしたわけではないが、それに迫る勢いで後ろに下がる。

「……どうかした？」

「ッ！ な、なんでもないわよ！」

俺が呆れたようにすると、リアは何故か気分を害したように語気を荒くした。

「……まあ、名前決めちゃおうぜ？」

話を逸らそうとする。何でリアは怒ってるんだろ……。俺何かした？

「そうですね」

「早く決めなさいよ！」

シグントは普通に賛成してくれたが、リアは怒っている。もう一度言うが俺が何かしたか？ 知ってるなら誰か教えてくれ……。

心の中で呟きながら、俺はベビードラゴンの名前について考え始めた。

（どうすっかな……。うーん……。ブラックドラゴンだからブラック？ いや、なんか不吉そうだから……。ラックってのはどうだ？）

一度思いつくと、「ラック」という名前が頭から離れなくなってしまった。

俺は、シグントとリアに早速提案してみることにする。

「なあ、二人とも！ ラックってのはどうだ？」

「………」

「……だめ？」

“しぐんととりあのちんもくこうげき！”

“こうこのないーぶなこころはだめーじをうけた！”

俺は本格的にへこみそうになる。自信満々で提案しただけにダメーシが大きい。

穴があつたら隠れたい！と思うがガラム洞窟はそれ自体が大きな穴であることに気づき自分の頭を切り落としたい衝動に駆られた。

「いいんじゃない？」

「私もそう思います」

刀を抜きそうになった寸前で二人が口を開く。

この二人には知りようのないことだが、俺の自滅寸前の心と命を救ったのである。原因を作ったのもこいつらだが…。

「…じゃ！今日からお前の名前はラックだ！」

「がるー！！」

言葉が分かったわけではないだろうが、ベビードラゴン改めラックが嬉しそうな声を上げる。

俺はラックを膝からどかし、立ち上がった。

シグントにラックを押し付けると本当のラックの親であるブラックドラゴンの死骸に向き直る。

「そろそろ出発だろ？先に行つていて！」

それだけ言って、俺は刀を抜き放つ。

一分後、ガラム洞窟の壁は隅から隅までドラゴンの血液で彩られることになった。

後日、俺が聞いた話ではガラム洞窟にドラゴンが住み着くことは無くなったと言う。

「ま…親の死んだところなんて、子供が見るものじゃないだろ」

俺の呟きは誰にも聞こえずに…洞窟の壁に染み込んで消えた。

「お待たせ！」

洞窟の半ばまで進んだところでリアと合流することが出来た。

「さっさと行くわよ！」

「はいはい」

リアに理由も無く怒られてビビるものの笑顔で受け流す。

しばらく他愛の無い話をしながら、シグントの仲間たちと歩いていると一時間ほどで洞窟の外に出た。

俺は強烈な太陽光に目を細める。

「まぶしっ!」

「当たり前でしょ?」

何をバカなことを…と呟くリアに俺は苦笑いしながら隣で歩いているラックに視線を向けた。

「ぐるる」

楽しそうにしているラックを見て、まあいいかと俺も笑った。背中を撫でながら、前を歩くリアたちについていく。すると、急にリアが振り向く。

「本当に王都に行っているの?」

「おっけー」

このとき軽く了承したリアの言葉の意味に俺が気づくのは…

おそらく二話ぐらい後だろう。

9 ドラゴンの名前！？（後書き）

最後の方がよくわからない駄文になってしまいました…

以後気をつけます！

外伝 アーバニアの双神（前書き）

この度、小説の題名を変更いたしました^^

外伝 アーバニアの双神

真っ白い空間の中に、二つの人影がある。

その一つは、アーバニアの全ての生命と大地をを創りし神「ナヴィス」

もう一つは、アーバニアの全ての幻獣と大空を創りし神「ルビアナ」

今、その双神達はお互いに武器を持ち、壮絶な戦いを繰り広げているところであった。

「なんで浮気なんてしたのよー!!」

絶世の美貌を持つ魔の女神ルビアナが怒声とともに手をナヴィスにかざす。

轟!! と巨大な火球がナヴィスに襲いかかった。

その数、優に百を超える。

ドガガガガガガガガガッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しかし、ワイルドな風貌を持つ美男ナヴィスも、巨大なクレイモアを片手で振り回しその全てを剣圧だけで吹き飛ばす。

「だーから誤解だつて!!」

先ほどから必死に説得するも、妻であるルビアナは怒りを鎮めよう
としない。

舌打ちしてから、虚空からもう一本の剣を取り出す。

真っ赤に燃えるような刀身を持った神器『ボルケイノブラッド』。

本当は人間たちが住む場所の最奥のダンジョンに封印したものである
が緊急事態だ仕方ない。

「目を醒ませ…『ボルケイノブラッド』」

ナヴィスが呟いた瞬間、赤い刀身から焰が溢れ出し、右手ごとボル
ケイノブラッドを覆った。

刀身は摂氏八千度を超える炎に耐えきれずにドロリ…と溶け出す。
しかし、それはボルケイノブラッド本来の姿だ。

「ハッ！」

ナヴィスの右手が霞む。すさまじい速さでボルケイノブラッドが振
られ、焰の刀身は遠心力でその姿を伸ばした。

キュガッ!! と轟音が響いた。ナヴィスが放った必殺の威力を孕
んだ炎撃を、ルビアナが反属性の水の盾で受け止めたのだ。小規模
な水蒸気爆発が発生する。

「妻にこんな攻撃を…、許せない!! 私をそんなに殺したいなん
て！」

「え!?! ちょ…それも誤解…」

「問答無用!!」

ナヴィスの言い訳を黙らせるとルビアナは右手に魔力を集中させる。

「！！！！ それはまずいつて！！！！」

ナヴィスが冷や汗を流す。ルビアナが貯めている魔力は、単純なマナバレットに変換したとしても次元を一つ消し飛ばせるレベルのものであったのだ。

魔力のロスが激しいマナバレットでも次元を消し飛ばす一撃を、ルビアナは原始の力『闇』へと変えていく。

光さえも捻じ曲げすべてを押しつぶす『重力球』へと。

それがルビアナが使おうとしている魔導の正体だとナヴィスは考え、『闇』の反属性である原始の力『光』をボルケイノブラッドに集中させる。

光と炎が混ざり合い強力な『光』を形作っている。

ボルケイノブラッドの刀身は姿を変えた。

この世で最も光を放つ物体『太陽』へと。

ナヴィスはボルケイノブラッドを構える。

ルビアナは右手を左腕で支え照準をつける。

カッッッッッッッ！！！！！！

二つの原始の力がぶつかり合い、一瞬だけ空間に『無』が満ちた。

「まったく…早くしてくれないと世界が滅びちまうぜ…？ イエス
よお」

ナヴィスはため息をつきながら、別の世界の一人の友のことを考えた。

10 絶好の昼寝日和が…！？

ガラム洞窟を出発してから六日後、王都まで後数時間。

俺、ふじみや こつこ藤宮紅都は今、リア達に冒険者ギルドから支給された三台の馬車の一台、リアとシグントが乗っている馬車に乗車していた。

しかし、屋根の上に…だが。

ここで勘違いしないでほしい。

別にいじめられているだとかそんなことではない。

「あー、気持ちいいー♪」

「ぐるーー♪」

現在のアーバニアの気候はアースの春のものとよく似ていた。

馬車に乗った最初の三日にこちらの常識のことをシグントから叩き込まれて、気分が滅入っていた俺は、気分転換のために屋根に登ってみた。

そこで俺は気づいたのだ、屋根の上でする昼寝の素晴らしさに。

「三日間寝てるけどー今日は格別だなー♪」

「ぐるぐるー♪」

俺の眼下には青々とした野原が広がり、頭上には雲ひとつ無い青空からぽかぽかと太陽の日差しが降り注ぐ。

まさに絶好の昼寝日和だ。

春の日差しの中、俺の頬をやわらかい風が撫でていき、俺はブラッ

クドラゴンの幼生のラックと共に夢の世界に誘われ――。

ドドドドドドドドオオ……！ と、俺のまぶたが閉じた次の瞬間、地響きを鳴らして大地がグラグラと揺れた。

「ッ！？！？ 何が……！？」

俺は夢の世界から引き戻され、すぐさま飛び起きた。音のしている方向に目を向けると、茶色い絨毯が蠢きながら馬車に突進してくるところだった。

「？ えっと……茶色い鱗に小さい翼、短い四肢と低い重心……。ランドドラゴンか？」

俺はシグントに叩き込まれた知識から動く絨毯の正体を想像する。

「ランドドラゴンの群れだー！！！」

俺の推理を裏付けるかのように、他の馬車の御者をしていた男の光人、レンカが大声を張り上げた。他のパーティーメンバーも馬車の窓から顔を出しランドドラゴンたちを見ている。
数は50匹ほどだろうか。

「シグント？ ランドドラゴンってこんなに数多かったっけ？」

窓から顔を出して後方を見ているシグントに声をかける。

俺の問いにシグントはランドドラゴンを見ながら、

「……通常は多くとも十匹ほどなのですが……、ランドドラゴンを統率する女王が生まれたと考えたほうがいいでしょうね」

「そいつ倒せばみんな引くか？」

ま、全滅させてもいいんだけど……と言葉をつなげながら俺は腰の刀の柄に手を置いた。

そこで、ふと俺はひとつのことを思いついた。

「シグント、魔法ってどうやるんだっけ？」

幸いランドドラゴンの足は馬車よりも遅い、下位種とは言え竜族なのでスタミナはあるがそれも三時間ほどで切れるだろう。

魔人たちが風の魔法を使って軽くした馬車なら走りきれるはずだ。つまり、追ってくるだけのランドドラゴンなどただの的というわけだ。

「全く……ランドドラゴンが不幸に思えてきましたね」

シグントは苦笑いしながら一度、頭を馬車の中に引っ込める。

「リア様！ 起きてください！」

「何ようるさいわね……！」

どうやら絶賛昼寝中だったリアを起こしているようだ。

というかこの地響きの中寝続けていられるのはすごいな、と俺は素直に感心する。

「簡潔に言います。コート君に魔法を教えてあげてください」

「……………はい？」

「困惑するのはわかりますがまずは馬車の後方を見てからになさって下さい」

シグントに言われ窓から頭を突き出すリア。
黒髪が風になびく。髪の間からちらりと見えたその表情は驚きに染まっていた。

「なんでランドドラゴンが!？」

「詳しいことはまた後で、今はとりあえず馬車の上に上がってください。コート君の魔法の練習です」

「何で私が…」

「最初に魔法を教えたのはあなたですよ？ 無理にとは言いませんが…」

論争に負けて、しょうがないわね…!とご機嫌斜めなリアなぜか頬を赤くしながら窓から身を乗り出した。

俺はリアに手を差し伸べて引き上げようとする。

「…別にアンタのためじゃないんだからねっ!！」

屋根に上ったリアがそんなことを言う。

あくまでツンデレ路線で行く気だろうか、デレは見たことないのでフラグも立っていないが。

ゴホン! と咳払いしてからリアは魔法についての講義を始めた。

「魔法って言うのは明確なイメージとそれを発動させるための魔力量が必要なの。たとえば水の槍を想像しながらファイアの魔法を使っても失敗するってこと」

「ふむふむ」

「あと魔力量を超える魔法は使えない。えっと…具体的に言うとファイアとかの基礎魔法の消費魔力を1だとすると光人の平均魔力量は15くらいかしらね、派生魔法には大体3くらいの魔力が必要よ」
「後は？」

「残りは魔法の名前ね…、『ファイア』って唱えてみて」
「はいリア先生」

俺はおざなりな返事をして、馬車の上で仁王立ちになるというシュールな光景を演出しながら体の中に流れる魔力をイメージする。その流れが手の先を通るたびに少しずつ抽出していき、全体の百分の一ほどが集まったところでそれをやめる。「え？　ちょ…！　何やっつて——！」

今度は『火』をイメージしていく。火の玉が手をかざした方向に放つイメージをつくる。
そして、

「『ファイア』！」

ボウッ！！　と俺がスキル名を唱えた次の瞬間、手の平の先に直径二メートルはあろうかという巨大な火球が発現した。

「！？」

俺が驚いて手を空へ向けた次の瞬間、轟！！　と周囲の酸素を喰らいながら火球は空へと放たれた。

ギシッ！　と俺の体に反動が押し掛かり足の下にある馬車が軋む。火球は五十メートルほど空を飛ぶと、花火のように爆散し紅蓮の大輪を咲かせた。

「……………」
「……………」

俺とリアは馬車の上でそろって空を見上げた。
やがて、リアが何かを重い出したかのように口を開いた。

「…ねえ」

「…なんでしょう」

リアは回れ右をすると俺の腹に強烈なボディブローを浴びせた。
ドス…！ と鈍い音を立てて腹にリアの拳がめり込む。

「がつ…！？」

俺は肺から息を吐き出しながら、リアの突然のご乱心になす術もなく屋根の上に転がった。
よろよろと右腕をリアに向ける。

「何…すんだ…、リア様…」

息も絶え絶えに抗議の声を上げる俺を、リアは絶対零度の視線で射抜いた。

ふー…！ と自分を静めているかのように呼気を大気中に吐き出す。
足は小刻みにトントンと屋根にリズムを刻んでいる。

「誰が…発動しなさいなんて言ったのよ…！ 私は『ファイア』って唱えてみて…って言ったんだけど？」

リアの背後に鬼が見える…。このままでは殺られる！ と俺は自分の未来を予期してしまい戦慄する。ゾクッ！ と背筋が凍った。

「えつと…悪かった！ 許してくれ！ リアに良いところ見せたかったんだ！」

命を守るため、土下座しながら苦し紛れの言い訳。

自分でも「ムリあるなあ」と思うが頭上からリアの雷どなりが降ってくることは無い。

俺は恐る恐る顔を上げる。するとそこには、赤く染まった自分の頬に手を当てるリアの姿があった。

「私に良いところを見せようなんて…キヤー!!」

などと小声で呟いていた。意味がわからなかったがとりあえず声をかけてみる。

「あのー……………リア様？」

「ッ!!」

俺の声にリアはビクツと反応する。ゴホンゴホンと咳払いをして、

「まあいいわ、本当は魔力を使わなければ魔法が失敗するってことを教えたかったんだけど。アンタみたいに魔力値が高いのには関係ないかもね」

「……………」

「なによ!!」

「…いえ何でもございません」

少し黙り込んでいただけて怒鳴られてしまった。怒りっぽい女は嫌われるというのに。

そこで急に後方のランドドラゴンへとリアは手をかざした。

「お手本、見せてあげる」

それだけ短く呟いて、リアは目を閉じた。すると、数秒もしないうちにリアの手が緑の燐光に包まれていった。

「『ウィンドカッター』!!」

ボヒュヒュヒュ!! とリアの手から半透明の風の刃が生まれランドドラゴンの群れを蹂躪した。

茶色い絨毯のなかに赤い絵の具が散った。足をやられたものはその場に崩れ落ち、踏み潰されていく。

しかし、風刃は何匹かのランドドラゴンを吹き飛ばしたものの群れの勢いは微塵も衰えていない。

「おおー」

「バカにしてるの…!?!」

かすかな皮肉を込めた感嘆の声にリアは敏感に反応した。

眉間にしわを寄せて美貌を台無しにしているリア、俺はからかい続ける気も無かったのでそれを切り上げた。

そんな事よりも、魔法のほうが面白そうだ。

剣道一本の俺だが、剣道をやめてからはライトノベルなども読み漁っていたため憧れはあるのだ。

「リア様、ちょっと聞きたいんだけど良い？」

「…なによ」

「魔法ってさ、イメージと魔力があれば発動できるんだよね？」

——さあ、魔法を使うための第一歩だ！

10 絶好の昼寝日和が…！？（後書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

11 オリジナルマジック！そして王都に！

「魔法ってさ、イメージと魔力があれば発動できるんだよね？」

俺の質問に、リアは少し考える素振りを見せる。

「一応…できると思うけど…誰もやらないわよ？ スキルとして認められないとルビアナ様からの手助けを得られないから」

「おーけーおーけー、それだけ聞ければ十分。ありがとな」

俺が推測するに、神様からの手助けが大きすぎる所為でこの世界の住人は挑戦することが苦手なのだ。

良く言えば規則的で綺麗な、悪く言えば型にはまった生き方をしてるのだろう。

それは俺にとっては大きなアドバンテージといえる。

全く新しいスキルを作るとは、相手にとっては未知の兵器を使われるのに等しい。

俺がリアの言葉を聞いて思いついたのは、新しい魔法の創造である。幸い、魔力は足りているようだし想像力も悪くは無いと思う。

俺は魔力を集め始める。全体の半分ほど…光人五百人分の魔力を手腕に満たしていく。

そして、俺は新しい魔法の創造を始めた。

――想像しよう

――総てを焼き尽くす灼熱の炎を

――火よりも明るく

――炎よりもなお激しい

――其は業火…

――俺の敵を灰燼と成せ

――世界全てを焰で包め

――創造しよう…

「『レッドカーベット
炎の世界』…！」

ヴァオオオオオ！！！！！！！！

視界一面を真紅の炎が片端から舐めていく。

俺の腕から魔力が一度に抜けていくのがわかった。膨大な量の魔力の消費が俺にかなりの倦怠感をもたらす。

「ギヤオオオオ…！」 「グアアア…！」

ランドドラゴンの断末魔の声が辺りに響いた。生きたままその体を炎で焼かれていく、ということは彼らにも原始的な恐怖を呼び起こしたらしい。しかし、その苦しみも長く続かなかった。

魔法の威力が高すぎたために、ランドドラゴン達は灼熱の大炎に包まれ骨まで焼き尽くされていく。

辺り一面に肉と骨の焼ける死臭が漂った。

「これは…きつついな…」

思わず苦笑いをする俺の足の下で、三台の馬車がその場に停車する。中からぞろぞろと冒険者たちが降りてくるが、眼前に広がる炎の海に皆一様に目を丸くしていた。

炎はしばらくすると小さくなっていった。

炎の消えた後に残ったのはブスブスと白煙を上げながら燻り続ける焦土と、白い塵となつて風に吹き飛ばされていくランドドラゴンの骨だけだ。

「あ…いや違うんだよこれは」

弁明を始めようとした俺の頭部に、ポツリ…と何かが落ちてきた。

「？」

頭上を見上げると暗雲が立ち込めているところだった。

当然だろう。あれだけ色々なものを燃やしたため、煙を凝結核として水滴が集まっているのだ。

雲ひとつ無い晴天だった空は重く淀んでいる。

「馬車の中に入ったほうがいいでしょうね…」

シグントが呟くと、みんなも各自の馬車の中へと入っていく。

雨のおかげで残り火も完全に消火され、白い煙が漂うのみとなった。馬車の中に入り腰を下ろしながら、シグントとリアの顔色を伺う。

二人は、いや特にシグントが難しい顔をしながら額に手を当て、何かを考え込んでいるようであった。

ガッ！ と先導の馬車が出発したのだろうか、馬車が走り始めた。

「……………コート君、さっきの魔法は何なのか教えてもらってもいい

かな？」

十分後、

「要するに…あの広範囲殲滅魔法は、君が一から創りあげた物だと言いたい訳ですね？ イメージと魔力さえあれば発動できるというリア様の言葉の裏について」

「私の所為みたいに言わないでよ…」

シグントが頭痛に耐えるような顔をしながら言う。
横ではリアまであきれたような表情を作っていた。

「はい…そうです…」

うつむいて答える俺に、シグントは苦笑いを浮かべる。
まるでお手上げた、とでも言うように手を上に上げた。やれやれと首を振って俺に優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ、皆には『テレパティア念話』であの炎はあなたの魔力をきつかけにした自然魔力の暴走ということで説明しておきましたから」
「シグントー！！」

ヒシッ！ と俺はシグントにすがりつく。それを鬱陶しげに両手で

押し戻してから、シグントは、しかし！ と続けた。

「コート君が新しいスキルを創造できるということは伏せておいたほうがいいですね」

「やっぱ？ まあ、知られても得なことは無いからいいんだけど…」

こくりと頷いてから俺は、先ほどから顕現させていた手元のスキルカードに視線を落とした。

『レッドカーペット
炎の世界』

広範囲殲滅型戦術級魔法

最低必要魔力量 3500 炎属性

どう見ても尋常ではないレベルの内容が書かれている。広範囲殲滅型戦術級魔法… 噛んでしまった…。普通の光人二百人強が魔力を合わせてやっと発動できるクラスの魔法が俺には簡単に発動できてしまう。

小さな国なら簡単に滅ぼせる戦力だ。ばれたら国を挙げて狩られるか、取り込まれるかの二つに一つだろう。

「しかし… どうしようか…」

俺は目を瞑りながら自分の未来の選択肢を模索する。

いくつかの選択肢が脳裏に浮かんできた。

一つ目、どこかの国に仕官して悠々自適のハーレムライフ。

二つ目、世界中を旅して自分の腕を高めていく。

三つ目、いくつもの国を全て滅ぼす、そして自分の国を造る、ついでに世界も滅ぼす。

まあ、三つ目は論外だ、世界救いに来たのに滅ぼしてどうする。一つ目は後ろ髪が引かれるものもあるが、それは諦めたほうがいいだろう。何千人もの人を虐殺させられて世界征服の道具になるのがオチだ。

そんなことを考えているうちに、疲れが溜まっていたのだろう。俺はいつのまにか眠り込んでしまっていた。

「コート君！ つきましたよ、起きてください」

「むにやむにや…後五分」

「起きろって言うてるでしょ……！！！！！！」

俺を起こそうとするシグントの声に寝ぼけて応えた俺は、リアの怒声とともに馬車から引きずり出される。

ドシャッ！ と地面に頬をつけると同時に意識を覚醒させた俺は目の前の光景に圧倒されてしまった。

視界の大半を占めるのは、高さ50メートルはあろうかという城壁と、荘厳な雰囲気放つ巨大な城であった。

目を大きく見開きながら絶句する俺を満足そうに見てから、リアが得意げに胸を張った。

「すごいでしょ！！　これがマドミス王国王都『グランキャッスル』よ……」

マドミス王国王都『グランキャッスル』

その正体は王都全体が堅牢な守りを誇る城壁で包まれた、巨大な一つの『城』であった。

11 オリジナルマジック！ そして王都に！（後書き）

紅都の新魔法はいかがだったでしょうか？

12 謎の美少女!?

俺はリアに連れられて、グランキャッスル内の宿屋『肉と野菜と料理』に宿泊していた。

明日になったら迎えに行くから待っていなさい！　と言われてからここに叩き込まれた。

ちなみにブラックドラゴンの幼生のラックは危険度を判定するために五日ほど治安部隊の元へ。

それはともかく町のこともなんて知らないから出歩くことも出来ないのそつ…と俺は寝そべっていたベッドから立ち上がった。靴を履いてから部屋のドアを開けると階段を下りていく。一階には食堂があるので昼飯を食べに行くのだ。

「ノル八さん、昼飯ください！」

「はいよ！」

元気の良い宿屋の女将、ノル八さんは俺の頼みを受けて料理を皿に盛りつけ始める。

それを見ながら俺はテーブルの傍の椅子に腰を下ろした。

ちなみに料金は三食飯付き二週間で小金貨一枚だ。

俺は何の気もなしに辺りを見回してみる。昼時なのでちらほら人影が見え始めている。

「ん？」

何かトラブルのようだ。巨漢のスキンヘッドとローブを目深にかぶった人影が言い合いをしている。

お、ノル八さんが出てきた。

「ちょっと！ 揉め事はよしとくれ！」
「うるっせえ！」

スキンヘッドは声を荒げるとノルハさん突き飛ばした。
ノルハさんが持っていたサンドイッチやら何やらが床に散らばる。

——てかあれ俺の昼飯じゃねーのかよ何やってくれてんだあのハゲ
！！

俺は怒りをあらわにスキンヘッドの元へと近づいていく。

「おい！」

俺は後ろからスキンヘッドの肩を掴んでこちらを向かせる。もちろん力は手加減して、だ。

「ぐっ…！ 痛えな！」

スキンヘッドは上から俺を睨みつけてくる。しかしハゲに睨まれるなどブラックドラゴンの咆哮を受けることに比べればどうと言ったことはない。

思い切り下から睨み返してやる。

「こんなところで騒ぐんじゃねーよ」
「チビは引っ込んでやがれ！」

俺がわざわざ注意してやってるというのにスキンヘッドは強硬な態度を崩さない。

スキンヘッドはチッ！ と舌打ちをすると全身ローブに向き直った。

「おら！ テメエがいつまで経っても謝らねえからめんどくせえことになったじゃねーかよ！」

再び全身ローブに悪態をつくスキンヘッド。

スキンヘッドは全身ローブの胸倉を掴み上げる。

「その汚い手を私に近づけないでくださいます？ 汚れてしまいますわ」

「！」

「なんだと！？」

俺は全身ローブの声を聞いてわずかに眉を上げた。まさか女だとは思わなかったのだ。

というかひとまずそれは置いて、そういえばあのハゲ俺のことをチビとか言いやがってくれましたかア！？

俺は怒りに任せて出入り口のほうへ向けてスキンヘッドを蹴り飛ばす。

「げぶつ！？」

ドゴン！ という凄まじい音と共にスキンヘッドの身体が吹っ飛んでいく。

ピクピクと痙攣しているその男の側まで歩み寄ると俺は首根っこを掴んで外へ放り投げた。

「チビじゃねーよ！」

言ってから俺は一つの思いつきを実行することにする。

（しばらく懲らしめておこう…！ クフフフフ）

内心で悪役っぽい笑みを浮かべてから俺は千分の一ほどの魔力を片手に集めた。

――想像しよう

――黒き力の束縛は

――何人たりとも逃がさない

――万物を縛るその力

――私の敵を地に縛れ

――創造しよう

「『グラビティエリア重力の戒め』」

即興で作った闇系の束縛魔法だが、込めてる魔力が派生魔法の五倍だ。効果も強い。

ズシン！ とスキンヘッドの周囲がわずかに歪む。重力の奔流が光をわずかに歪めているのだ。

だが、強さで言ったら五倍ほどの重力なのでたいしたことは無いと思う。

効果時間も十二時間ほどなので死にはしないはず。

地面とキスをし続けているスキンヘッドに一瞥をくれてから、俺は宿屋の中に入っていた。すると目の前に全身ローブが来ていた。

「どうかした」「一応お礼をしておきますわ」「…うん」

俺の言葉に割り込んで全身ローブが慇懃な態度をとってくる。だが、お礼をしてくれるというのだ。素直にもらっておこう。

「お礼？」

「ええ、よろしいですか？」

「ああ、大丈夫」

俺が全身ローブの問いに頷くと、全身ローブは俺の手を握って引き寄せた。

全身ローブの唐突な行動に目を丸くする俺だがその先の展開にさらに目を丸くする。

ファサツと全身ローブはフードをはいで、その顔をあらわにした。

「なっ！？」

全身ローブの素顔を見て俺はまたもや絶句する。年は同じくらいだろうか。

良く通った鼻梁に、形のいい唇、細い眉に、パツチリ二重の大きな金の瞳、そして黄金のようなその髪だ。とても美しいその顔に俺は啞然とする。

俺が驚いた次の瞬間、綺麗な顔が俺に近づく。そして、チュッ！と俺に頬に何かやわらかいものが触れた。

「は？」

もはや状況についていけない俺に全身ローブは柔らかに微笑んだ。一歩下がってから口を開く。

「以外にお顔のよろしい御方でしたので…印をつけさせて頂きましたわ。…貴方、冒険者ですわよね？それなら武芸大会で御会い

できるかも知れませんわね」

それだけ言って『肉と野菜と料理』から出て行ってしまった。
長い沈黙の後、俺はやっとと言っ感じで言葉を発した。

「.....なんだっただ...？」

13 ギルド登録！

謎の全身ローブ女にキスをされた後、ようやく自分を取り戻した俺はノルハさんに昼飯をもらって自分の部屋に引き返した。

サンドイッチをたいらげてからさっきの全身ローブについて考え始めた。

変なこと考えるなよ読者の諸君！！別にキスのことを思い出していたわけではないのだ。

…何言ってるんだらう俺。

まあいい、俺が考えていたのは武芸大会と言う言葉のことだ。

最近は魔法も使っているので忘れられているかもしれないが、俺は剣士である。もう一度言うが俺は剣士である。大事なことから二回言いました。

まあ、分類としては魔法剣士にでもなるのかもしれないが、俺としての本質は剣士のままだ。

閑話休題

武芸大会とやらに参加したい気持ちもあるが…正直俺の能力は強すぎる。

どんなチートだとたまに叫びたくなるぐらいだ。

この力がある限り優勝は確実だろう。そんなの全然面白くないし、俺の技術の向上にも繋がらない。

シグントの話では常時発動型のスキルは効果の切り替えが出来ないらしい。

ということは、何かの魔法具とかで力を弱めるしかなさそうだが…、

「どうしようかなあ…」

俺が考え事を始めようとすると部屋のドアを誰かがコンコン！と叩いた。

俺はいったん思考を中断し、ドアに向かって声をかける。

「どーぞー！」

「入るわよ？」

ドアを開けて入ってきたのはリアだった。

長い黒髪を、今日は頭の後ろで束ねている。いわゆるポニーテールとか言う奴だ。

リアは抱えていた紙袋の中から何かを取り出した。

それは一枚の紙と羽ペン、それに黒いインク瓶だ。

「何？ それ」

「これはギルドに申請する書類って——何よそれ！？！？」

途中で俺の顔を見た途端にリアが顔色を変える。

最初は白磁のような白、それから赤くなっていった。最後には蒼白になっていった。

その代わり様に俺は冷や汗を流す。

「……………どうかしたんでしょうか？」

「アンタ…！ その顔のキスマークはなんなのよ…！！」

「…は？」

リアの指摘に驚いて俺は部屋に備え付けられている鏡の前にすっ飛んでいく。

「げっ…！」

俺の頬にはピンク色の口紅の跡が残っていた。おそらく先ほどの全身ローブにつけられたのだろう。さっき言われた『印』ってこのことか！ と心の中で叫ぶ。

俺は慌ててごしごしと袖でぬぐった。

それからリアのほうを振り向くと、リアはプルプルとつつむきながら震えていた。

「私には関係ない私には関係ない私には関係ない…」

ぶつぶつと怨嗟のようなものを呟いている。まじで怖い。

「何でもないよ！ なんかない女を助けたらお礼とか何とか言われてされただけだから」

「私には関係ないって言ってるでしょ！！ 良いからさっさとこれに署名しなさい！！」

「わぶっ！」

リアが俺の顔に紙を押し付けてくる。

俺はそれを引き剥がして中を覗き込んでみる。

「……………読めない」

また問題が一つ発生してしまった。俺はアーバニアの文字が読めない。

何とかして読もうと画策する。

（どうするどうするどうする！？ 魔法を作るか？ でもどんな魔法なのかわからない。いや待てよ？ 属性じゃなくて目的を主題において作って見たらどうだ？）

ピンチを切り抜けるために俺は頭を高速回転させて簡単な魔法を作る。魔力は3ぐらいを消費しておく。総魔力量の五千分の一だ。そして、その魔力を材料に俺は早速、新魔法の創造を開始した。

——想像しよう

——全ての言葉を解し

——全ての文字を解し

——全ての言葉を用い

——全ての文字を用いる

——創造しよう

「『パーフェクトランゲージ
言語解説』」

魔法を使ってからもう一度書類を覗き込んでみる。

——冒険者ギルド登録申請書——

この書類は冒険者ギルドの申請に際して、登録用紙と、登録に関する注意事項を記した書類です。
良くお読みください。

注意事項

当ギルドは、加入者側に一切の過失が無く、ギルドの側にのみ過失がある場合以外では一切の責任を負いません。

当ギルドは、クエスト中に起こった事故、負傷、死亡に関して一切の責任を負いません。

当ギルドは、冒険者同士のトラブルで起こった損害などに対して一切の責任を負いません。

「……ギルド責任逃ればっかだな」

俺は苦笑いしながら呟く。そのまま流し読みしていくと書類の最後に名前を記入する場所があった。

俺は羽ペンをインクに浸すと一応リアに確認しておく。

「ここに名前書けばいい？」

「………そうよ」

なぜかまだリアは怒りを収めてなかったが、俺は羽ペンを使って名前を書いていく。

羽ペンを使うのは初めてだったが、意外とさらさら書けたのに驚く。

「これでよし」と。後はこれをギルドに提出すればいいんだよね？」

「ねえ…登録終わったらアンタ…ちよつと買物に付き合いなさい…！」

「…良いけど」

なんで買い物につき合わされるのかはわからなかったが荷物持ちとかそんなところだろう。

それで、機嫌を直してくれるなら、と俺は了承する。

結局のところそれは正解だったようでリアは俺が頷いた瞬間に笑顔を取り戻していた。

「それじゃさっさと行くわよ！」

腰に刀を差し、リアに手を引かれて俺は宿屋から冒険者ギルドへと向かった。

「あっちが武器屋、こっちが防具屋、それであそこが魔法具屋ね」

道中、リアから町についての説明を受けながらギルドへと向かう。宿屋から二十分ほど歩いた場所にそれはあった。

「でかいな…」

「当たり前でしょ」

俺はギルドを見上げて感嘆の声をもらす。

赤みがかった木と石で出来た建物は十分に歴史の重みを感じさせる。俺はリアを伴いながら大きな扉を開いて中に入った。

瞬間、俺とリアの中にいた冒険者たちの視線が集まった。

品定めするような視線が俺たちに浴びせかけられる。しかし、リアはそれを気にする風も無く先に歩いていこうとした。

俺も他の冒険者たちの姿を観察するのを後回しにしてリアについていく。

「ここが受付よ、ちゃっちゃんと済ませなさい！」

俺はリアに言われるままにカウンターに足を運ぶ。そして受付のお姉さんに紙を提出した。

「えっと、新規の登録お願いします」

「はい、スキルカードをお出しになってお待ちください！」

お姉さんはにこやかに俺に対応するとカウンターの奥に引っ込んでしまった。

俺はスキルカードを取り出すとそれを覗き込んでみた。

フジミヤ コウト

所有スキル

『神速神武』 『竜断ち』 レッドカーベット 『炎の世界』 グラビティエリア 『重力の戒め』 パーフェクトランゲージ 『完全言語』

『竜鱗』 『竜力』 『竜心』

称号

『竜殺し』 スキルジェネシスト 『技能の創造主』

「なんか増えてるなー」

半分呆れながら呟いているとお姉さんが半透明な球体を持って奥から出てきた。

「スキルカードをここに当ててください」

「はい」

短く返事をしてから球体にスキルカードを触れさせた。感覚で言うならスイカとかパスモとかと同じ感じで。球体は一瞬光った後もとの状態に戻った。これで終わりだろうか、と俺はお姉さんを見る。すると、お姉さんはにこりと笑って、

「登録は完了です。ようこそ、新しい冒険者さん♪」

14 能力封印！？

ギルドのお姉さんに別れを告げて、俺は今リアの買い物に。

というか舐めていた…舐めすぎていた、女の子の買い物に付き合うという高難易度ミッションを…。

さつき下着店に入った時など周囲の視線が痛すぎて本当に死にたくなった。ちなみに女性用の下着を売っているのはマドミス王国だけらしい。

持たされた荷物の高さは俺の身長など優に超える。

それを一旦休憩ね、とかなんとか言っただけの部屋に放り込むのはどうかと思う。

なんかかんやで二時間ほど買い物に付き合った後に、最後の場所と言われて魔法具屋まで来たのであった。

「なんかアヤシー」

「普通よこのくらい」

俺も気後れしながらドアを開けて中に入る。

ドアを開けた先に広がっていたのは中々に広く薄暗くて煙っぽい空間であった。

壁にはロープのようなものが掛けられ、棚には水晶玉が置いてあった。他にも指輪やらネックレスやらの装飾品が所狭しと並べられている。

店の奥にはおじいさんが目を瞑って座っていた。

「リア様、何を買いに来たの？」

こんな怪しい場所に何の用だろう？ と疑問を覚えた俺はリアの背中に声を掛ける。

リアは棚に置いてある指輪を取ってじろじろと見ていた。

「シグントから言われたのよ。アンタの力を弱める魔法具を用意しなくちゃいけないって。でも…『竜殺し』の力を弱める魔法具なんであるのかしら？」

「へー…、…そうだ！ リア様！ なんか俺にいい指輪見繕ってよ」

俺は魔法具が無いのなら自分で装飾品に『呪い』を掛ければ良いのではないかと思いつく。

前にシグントからダンジョンの奥とかで見つかるアイテムには『呪い』というステータスを下げる魔法が掛かっていると聞いていたのを思い出したのだ。

リアは不思議そうな顔をしながら俺の頼みを了承して、棚の中から一つの指輪を持ってきてくれた。銀のリングに青い宝石のはまった指輪、かなり綺麗だ。

リングの外側には薄く紋章のようなもの掘りこまれている。

「これなんてどう？」

「…いいね、リア様って意外とセンス良いんだね？」
「意外とって何よ！」

リアはぷうと頬を膨らませてそっぽを向いた。
それに苦笑しながら俺はそれを店の奥にいるさっきからピクリとも動かないおじいさんのところに持っていった。

「すみません、これいくらですか？」

俺が声を掛けるとおじいさんはゆっくりと顔を上げ、俺を見据えた。
そして、

パンツ！！！！と大きな破裂音を立てておじいさんの頭が破裂した。
中からは何か赤いものが飛び散る。

「ハア！？！？！？！」

俺は素っ頓狂な声を上げて目を丸くする。
思わず尻餅をついてしまった。
そんな俺の目の前に赤いものがヒラリと舞い落ちてきた。

「…これは…羽毛？」

俺は慌てて周囲の赤いもの全てを確認する。

…どれもこれも羽毛だ…赤い羽毛。

「……………リア様？」

俺は恨みがましくリアを見る。

リアは腹を抱えて笑い転げていた。そんなリアに羽毛を投げつけて

からおじいさんだったものの頭部を確認する。

「……………からっぽ」

俺はこの店を消し去ろうと魔力を右手に集めていく。

全魔力の九割ほどを使う、『レッドカーベット炎の世界』程の範囲は必要ない。あれの千分の一ほどの範囲、その代わりに火力を極限まで上昇させていく。俺の知る限りの最高の火力、太陽と同じレベルにまで。創り出す魔法は完成した。

『フロミネンス灼熱地獄の大炎柱』！！「ちよつと待った！！！！」

俺は慌てて魔法の発動をキャンセルする。

おつとイカンイカン！ 怒りに任せてこの首都を消し飛ばしてしまふところだった。誰かに待ったをかけられなければヤバかったかも知れん。

ん？ 誰が俺に待てて言ったんだ？

あの声はリアじゃないぞ。低くてしゃがれたじじいの様な…。

「誰だ？」

「そう怒らんでくれよ…」

「トロイさん！ 久しぶり！」

ため息をつきながらさっきのおじいさん人形が座っていた扉の奥から、リアにトロイと呼ばれた一人のじいさんが出てきた。首元にかけている大きなネックレスが目を引く。

「まさかあの悪戯でここを吹き飛ばされるほどの魔力を集める奴がいるとは思わなかったわい」

ふいー！ と、額に浮かべた汗を拭いながらトロイはぼやく。

「うるさいな…ジジイがからかうのが悪いんだろーが…」

ドッキリやられたので呼び方はジジイで。

俺は眉を潜めながら吐き捨てるように呟いた。リアはまだ後ろで笑っている。

その場の空気を変えるために、トロイに指輪を突き出した。

「これ、いくらだ？」

「うむ…タダで良いじゃろ」

「……何考えてやがる？」

疑り深い視線を向けながら俺はトロイを見る。

トロイは、ほっほっほっ！ と笑いながら首をゆらゆらと揺らす。

「その気持ち悪い動きはやめろ。…まあくれるんなら貰っておくが」
「さっきの詫びじゃよ、それと…」

トロイはそう言ってから、品物が置いてあるスペースにヨタヨタと歩いていく。酒を飲んでるんだろっか。息が酒臭かった。千鳥足だし目が虚ろだ。

四、五歩進むとトロイは置いてある棚の一つに突っ込んだ。
ガシャーン！！ と賑やかな音が店内に響く。

「…大丈夫か？ ジジイ」

「…ぬ、問題なしじゃ…」

トロイはゾンビのように崩れた棚から這い上がる。

その手には何かが握られている。大きさは…ライターぐらいだろう

か、緑色をしている。

トロイはそれを俺に向かって放ってきた。

俺はそれを空中で受け止める。まじまじと眺めてみると透明な…ガラスのような透明な石で出来ていた。

「なんだ？ これ」

「鼻屑にしてもらうための小道具じゃよ」

ほほ…と笑ってトロイは奥へ引っ込んでしまった。

ようやく笑うのをやめたリアが俺の肩を叩く。

「あのおじいさん、人をからかうのが趣味なのよ。笑っとけばいいの。」

無料で色々くれるしね、と続けてからリアは俺の手を引いて店の外へと向かう。

しかしその途中で何かを思い出したかのように俺に向き直った。

「そういえば、さっき何もらったの？」

「ん？ これだけど…なんだろこれ？」

俺はリアに緑色の石を差し出す。

リアはそれをチラリと見て、興味なさそうに視線を外したかと思うと次の瞬間、

「それ…ウインド クリスタル『風の精霊結晶』じゃない！！」

と、叫んで俺の手から強引に石をもぎ取った。

俺はその行動に啞然とするしかない。やっとのことで声帯を震わせる。

「あの、リア様？ それ俺のなんスけど…」

なんか興奮しているようなリアに半ば引き気味になりながら俺は声をかけた。

「何言ってるのよ！ これは私が貰うに決まってるでしょ！！！！！」

「暴君じゃねーか！！ 落ち着けよリア！！」

「…リア…！？」

しまった！ 様付けんの忘れたー！ でも俺悪くなくね？ とガクブルと身体を震わせる俺だが、リアのお叱りを受けることは無かった。リアは顔を真つ赤にすると俺の顔を下から上目遣いで見つめてくる。やべ、なにこれマジで可愛い。

「リアで…いいわよ…！」

「え？」

「だから！ 様付けなくて良いって言ってるの…！」

リアが顔を真つ赤にして叫んだ。

それに俺は笑顔で返した。

「分かった、リア。これからもよろしくな！」

「ッ…！！ これ返す…」

リアは精霊結晶？ とやらを俺に放ってきた。

それを俺は慌てて受け止める。てかさつきから誰も普通に渡さないよな…。放つたりもぎ取つたり放つたり。

「…精霊結晶って何？」

俺はトロイから貰った精霊結晶がどんな物なのか気になってリアに聞いてみることにした。

「精霊結晶つてのはその名の通り精霊が固まって出来た結晶よ。碎けば精霊の力を利用して一時的に凄まじいほどの力を行使できるわ。それは風の精霊結晶だから…風の神人しんじんと同じくらいの力かしらね？」

「しんじん？」

聞きなれない言葉が聞こえたので聞き返す。

「神の人よ。魔力の保有量は子供ですらSランクを遥かに凌駕するわ」

「…無敵じゃん！」

「そうでもないわ、神人は一人に一つの属性しか使えないから反属性ばかり使う高位魔人を沢山集めたら倒せるかも知れない」

「ふーん」

そのような感じの会話をしてから俺はリアと別れた。

リアは明日は用事があるらしいので明後日の正午に『肉と野菜と料理』の前で待ち合わせをすることにした。

部屋に戻ってから『呪い』を指輪にかけようと思い、俺は歩き始めた。

すると、風が吹いて一枚の紙片が俺の前に飛ばされてきた。

「お？」

それは何か文字が書かれたチラシのようなものだっただ。

「『パーフェクトランゲージ
完全言語』」

と、詠唱してからもう一度覗き込んでみると

――― 武芸大会開催！―――

風の四十日目にグランキャッスル中央の王城前で武芸大会が開かれます――！！

腕に自身のある方はぜひ御越しくださいませ――！！

当日参加お待ちしております――！！

――― 武芸大会実行会より―――

と書かれていた。

今は風の三十二日だから、後一週間ほどで開催されんのかね？ と俺は計算してからそのチラシをポケットに突っ込んで、『肉と野菜と料理』へと向かった。

『肉と野菜と料理』 俺の部屋

さて、それでは創造を始めるとするか。

ちなみに荷物は全て無くなっていた。リアとシグントが取りに来たらしい。ってことは荷物持ちやらされたんだろうなシグント。

テーブルの上に指輪を置いて、俺は魔法で『呪い』を創り出そうする。

魔力は付与し続けないといけないから…30くらいやっとくか。

――想像しよう

――物に宿りしその力

――全ての力を弱らせん

――其を身につけし強者には

――力を鎮め弱らせる

――創造しよう

「『デバフエンチャント
弱体化付与』！」

なんか濁った色の光が俺の手から指輪へと注ぎ込まれた。

指輪自体の見た目は変わっていないが、効果はどうなんだろうか。

俺は指輪を手にとると、右手の人差し指にすっぽりとはめる。

途端に全身から力が抜け、倦怠感が俺を襲った。

「…あー…成功かな？」

俺は効果を確かめるために腰の刀を抜く。
振ってみようと思ったのだ。しかし、

「なっ!?!?!」

俺は刀を鞘から抜いた次の瞬間、そのとんでもない重さに驚愕し床に取り落とした。

ガシャッ! と刀が床とぶつかって音を立てる。

「んだこれ…やっぱ重くなってる? …確かめてみるか」

俺はそれを確かめるために、鑑定するためのスキルを創造し始める。

――想像しよう

――其は全てのモノの価値を見る

――其は全てのモノの名前を知る

――其は全てのモノの能力を知る

――創造しよう

「『スキルアイ観察眼』」

俺はスキルを発動してからもう一度刀を見てみる。

すると、視界にはゲームのように刀の名前や能力が現れた。

名称

『イーター神刀魂喰』

能力

『斬ったモノの力を吸収する。強いものを斬れば斬るほど重さと切れ味が上昇していく、鞘に収まっている間は通常のまま』

「そーゆうことね…、まったく力弱めたら振れもしないとか…どんなだよ！」

俺はため息をつくが、明日のうちに武器屋にでも行って剣を買おう
と思いつ。

リアは刀を知らなかったから、この世界では広まっていないが、マ
イナーなのかのどちらかだろう。

西洋剣にも興味があるしいい機会だ、と俺はポジティブシンキング
してからスキルカードを確認する。力が弱まった状態でのステータ
スが気になったのだ

フジミヤ コウト

筋力 B

魔力 B

体力 B

敏捷力 B

物理耐性 C

魔法耐性 C

所有スキル数 11

「こんなもんかな…」

俺はうんうんと頷きながら満足げにスキルカードを消す。

筋力と体力と敏捷力は鍛えていたからそれなりに高い、他のはまあ、妥当だろう。

俺はニヤリと口角を吊り上げる。

「これで…技術を高められる…！」

俺の目指すべき場所である最強の剣士、そのために必要な課題の一つはクリアした。

力や魔力ではトップクラスらしいから残りは技術だ。

それを武芸大会で高められるだろう。

力強く呟いて、俺は晩飯を食べるために階下へと向かった。

15 武器屋へGO！ 新武器GET？

翌日

俺は、昨日リアが言っていた武器屋に向かうことにした。

『デバフエンチャント弱体化付与』した指輪、『ブルータス』を着けて、刀…もとい魂^イ喰^{タイ}を腰に差す。

鞘に納まっている間、重さは変わらないので問題ない。それとブラックドラゴンの鱗も数枚持つて行く。

俺は『肉と野菜と料理』を出ると石畳の街道を歩いて武器屋へと足を進めた。

二、三分ぶらぶらと歩いていると、視界の端に金槌と剣のエンブレムが施された看板を見つけた。

俺は見覚えのあるそのマークの前で立ち止まる。

「たしか…ここだったよな？」

呟いてから、俺は金属で縁取られた木製のドアを押し開ける。中に足を踏み入れた俺だが、

「…誰も…いない？」

店内には武器が所狭しと並べられていた。

壁にはハルバードからスピアなどの長物から弓などの飛び道具にクレイモアなどの大剣まで、棚の中にはダガーやショートソードが並べられていた。

店の奥のほうには机と椅子が置いてある。

しかし、人の姿が見当たらなかった。

「あのーすいませんーん！ 誰かいませんかー？」

俺は店の奥にまで聞こえるように声を張り上げる。

ふと思うのだが、なぜ人は遠くに呼びかけるときに語尾が伸びるのだろう。どうでもいいが。

声を掛けてから三十秒ほど入り口付近で固まっていると入り口の反対側にある扉が白煙と共に轟音を立てて開く。それはまるで中で爆発物が炸裂したかのようなだった。

そして白煙の中からゴホゴホと咳き込みながら歩いてくる人影が一つ。

「けほけほ！ 大成功よ！！！」

そのシルエットは何か棒のようなもの振り回して喜んでいるようだ。俺は戸惑いながらもそのシルエットとの接触を試みる。

「あの…剣がほしいんですけど…」

「客！？」

俺の呼びかけに人影は首をグルン！ とこちらに向ける。

そしてその動きで煙が晴れ、シルエットの姿があらわになった。

「（…女！？）」

俺は心の中で大声を上げる。昨日の全身ローブ女に匹敵するほどの驚きが俺の全身を駆け巡った。それは女であるだけではなく、全身ローブ女とはまた違う意味で美人であつた。

年は二十に届くか届かないかといったところだろう。

健康的な小麦色の肌に鶯色の髪、よく通った鼻に薄い唇。そして印象的な力強い瞳。全体的に程よく筋肉のついた体。

そして一番目を引くのは、タンクトップのような服を大きく押し上げるその胸だ。

「…巨乳…」

「？　どうかした？　お客さん」

「いやいやなんでもないです！！」

しまった…思わず胸を凝視してしまった。俺は慌てて首を振る。そんな俺を不思議そうに眺めるシルエツト、じゃなくて鍛冶屋さん。ふと、鍛冶屋さんの右手に握られている物に視線が向けられる。

それは刀身の中に赤い…——精霊結晶^{クリスタル}みたいな——半透明な石が嵌め込まれたダガーであつた。

「いや…なんでもなくないよねっ？　何かお求めかな？」

俺は鍛冶屋さんに呼びかけられて、ハッ！　と現実を意識を向けた。元気な鍛冶屋さんにごまかすようにあはは…！　と笑ってから口を開く。

「武器、…剣が欲しいんですけど」

「剣？　どんなのが好みかな？」

そう言いながら鍛冶屋さんは手にしていたダガーを机の上に載せると棚の中から様々な剣を取り出した。

ガチャガチャと音を立てながら店の中の端にあった台に剣が乗せられていく。

片手用の直剣からショートソードに湾曲したシミター、ツーハンドソードと長大なクレイモア。

どれも刃から光沢のある銀色の光を放っているが…どれがいいのかはよく分からない。鋼鉄を溶かして造る鑄造の剣は見たことも握ったこともないのだ。

刀などの鍛造で作るものにはそれなりの知識があるのだが…。

俺が顎に手を当てて考え込んでいると鍛冶屋さんが話しかけてくる。

「ねえ、お客さん」

「なんですか？」

振り向かずに、武器を一つ手にとって眺めながら応える。

俺が持ったのは反りのない両刃の直剣だ。刃も乱れなく綺麗にそろっている。流石に波紋などは浮いていないが上物である。

そんな俺を面白そうに見ながら鍛冶屋さんは俺の腰にある魂喰を指差した。

「その剣、悪くなってるなら研ぎ直してあげようか？ そっちのほうに安いよ」

「え？」

一度聞き返してから俺は得心する。

わざわざ剣を持っているのに新しいのを買いに来たため、今使っているのが壊れたと勘違いしたのだろう。

俺は首を横に振って問題がないことをアピールする。

「これは壊れてるとかそんなじゃないですよ」

「そうなの？　じゃあ何で新しい剣が欲しくなったのかな？」

「ちよつと事情がありました…」

まさか自分で造ったブルータスを嵌めたら振れなくなった、と言う訳にもいかないので適当にお茶を濁しておく。眺めていた直剣を置くと今度はクレイモアを手を取った。

「鍛冶屋さん、名前なんて言っんですか？」

「リーナだよ、君は？」

「コートって呼んでください」

などと会話を続けながら俺は棚に置かれた刀剣を見ていくが、何かしつくりと来ない。

俺は手にしていたシミターをそつと棚の上に置くと、鍛冶屋さん…じゃなくてリーナの方を向く。

「剣ってここにあるのだけですか？」

「一応ね、お気に召さなかったかな？」

「なんかしつくり来なくて…」

そこで、俺は机の上に置かれている石のはまったダガーを指差した。特に理由もなく、あえて言えばたまたま、ダガーが視界の中に入ってきたからそうしただけだった。

「そついえば、そのダガー…なんで精霊結晶がはまっているんですか？」

「これが精霊結晶だってわかるのっ！？ コート君！」

昨日、トロイから貰った精霊結晶と色は違うが何処か同種の雰囲気
を放っていたので聞いてみたが、どうやら正解だったようだ。

リーナは俺に指摘されたからか突如、嬉々としてダガーのことをし
やべり始めた。

「このダガーはただのダガーじゃないのよ！！」

「はあ」

「何せ刀身に『火の精霊結晶』ファイア クリスタルを錬金で埋め込んだ特別製なんだか
ら！」

「ほう」

「これによってこれからの精霊結晶の使い方は劇的に変化するのよ
！！」

「なぜ？」

「精霊結晶を壊して一時的に能力を上げるなんて邪道だわ！！ せ
つかく属性を制御するのに最適な精霊たちがいるのにそれを利用し
ないなんて！！」

「ふむ」

「私の作ったこのダガーは柄と刀身の部分に魔力を通しやすいミス
リル鋼を使うことにより、精霊結晶への魔力供給が可能になったの
よ！」

これにより、と続けてからリーナは目を瞑って精霊結晶のはまった
ダガーを水平に構える。

「見てて…」

短く呟いたかと思うと次の瞬間、ボウッ！！ とダガーにはめられ
た精霊結晶から炎が溢れ出す。

それは俺が見ている前でどんどん形を集束させていき、やがてダガーの延長線上に1メートルほどの炎の刀身が現れた。

リーナは目を開けてそれを満足そうに見てから俺に得意げな視線を送ってくる。

「すごいな…」

俺はパチパチと両手を打ち合わせながら感嘆の声を上げた。

リーナは炎を引っ込めるとダガーを傍らに置く。

「精霊結晶はこんな使い方も出来るんだよっ!!」

大きな胸を張ってドヤ顔を作るリーナにも拍手を送ってから俺はポケットに入れっぱなしだった風の精霊結晶のことを思い出した。

ごそごそとポケットをまさぐってそれを取り出す。

「わおっ！ 精霊結晶じゃん！」

「リーナさん、この精霊結晶でも同じことって出来ますか？」

リーナは俺の手の上にある精霊結晶に興味深そうに見て、首を縦に振って何事かを口にする。

「この精霊結晶の純度ならこれよりも良いやつができるかも…、コト君！」

リーナは俺の腕をガツシリと握って俺を見上げてくる。

雰囲気の所為で長身に見えた彼女だが実際は百六十後半くらいだろう。動きの反動で豊かな胸が、たゆん…！と揺れた。

俺は胸をガン見しないように気をつけながら脳内メモリーにはちゃっかりとその光景を保存しておく。

リーナが熱い目で下から俺を見てくる。
その上目遣いをしてくるリーナの姿は、リアとは別種の可愛さがあった。

俺はそこでリーナとリアって名前が似てるなーなどと、とてつもなく関係ないことをふと考える。
そんな俺にリーナは、

「私に武器を作らせてくれないかな!!?」
「へ?」

俺は胸に氣を取られていたせいで間抜けな返事しかすることが出来なかった。

16 俺への刺客！？（前書き）

前の話、最後の部分などかなり付け足しました。

一度読み返してもらえるとうれしいです^^

あと『12 謎の美少女』の最初に付け足しましたがブラックドラゴンのラック君は王都の治安部隊の元で危険度の査定を受けています><

三話ぐらい後から復活します

16 俺への刺客！？

ヒュンヒュンヒュンッ！ ボウガンから放たれた矢が唸りを上げて、裏路地を走る俺へと向かってくる。

俺は魂喰^{イタ}を三度閃かせ、その全てを叩き落した。

「チッ！」

ブルータスはとづくに外してあり、俺の能力は開放されている。

俺は舌打ちをしながら、石畳を踏み碎かんばかりに蹴り抜いて再び走り出す。

「リーナさん…無事だといいいけど」

呟くと、曲がり角から子供の手を引いた婦人が現れ、俺は急ブレーキを掛けて二人の前で急停止した。

驚いた顔をする婦人に一度会釈してから俺は走り出そうとする。

しかし、チャキ…という金属的な音が背後から聞こえ、何かが背に肉薄する気配があつた。

「…ッ！？」

俺は走り出そうとする勢いそのままに右足を軸にして振り向いた。背に迫っていたナイフを握る婦人の手に、ショートフックを打ち込んでナイフごと吹き飛ばす。

手加減はしなかったので婦人の骨の碎ける感触が俺の手に伝わる。
しかし、婦人… もとい暗殺ギルドの構成員の顔には苦痛の表情は浮かばなかった。

「うおっ!？」

今度は子供がエストック… だろうが刺突剣を俺に突き出してきた。
西洋剣の名前と形状、使い方だけは知っているが、如何せん良し悪しが分からないのにはもどかしさを感じる。

慌てて飛び退ると子供の腹を蹴り上げて気絶させた。

崩れ落ちる子供を見ながら婦人のこめかみをけり抜くと俺は呆れて呟いた。

「怖…、こんな子供まで暗殺者なのかよ…」

時は二十分前まで遡る。

「私に武器を作らせてくれないかな？」

「へ？」

間拔けな声を上げた後で頭がリーナの言葉を数秒遅れで理解する。
俺は慌ててぶんぶんと首を縦に振った。

「いいんですか？」

「もちろん！ 精霊結晶^{クリスタル}は貴重だから全然手に入らないんだよねー、だからコート君が持ってきてくれたら私の腕も上がるんだー！」

「へー、それならお願いしてもいいですか？」

「もちろん！」

リーナは満面の笑みを浮かべてから、一度店の奥へと引っ込んだ。少しの間、待ちぼうけを喰らった俺だが、リーナは数個の金属のインゴットを抱えて戻ってきた。

それをゴトリゴトリと重そうな音を立てながら商品棚に並べていく。

「どれがいい？ ミスリルにアダマントイト、オリハルコン…貴重な聖金属はこれぐらいしかないけど…、どんな形状がいいかな？」

「形状…片刃がいいんだけど…出来ますか？」

「もちろんよ！」

言って、リーナはどこから取り出してきた紙にサラサラと何かを書き始めた。

「こんな感じかしら？」

どうやら紙に書いていたのは俺が希望した剣の形状だった。

リーナが俺に見せてくれた紙には片手用の直剣を片刃にして短くしたようなものだった。

「えっと…、刀身を長く出来ませんか？」

俺の要望に、リーナは複雑そうな表情を見せた。

「長く？ 出来ないことはないけど…お金掛かつちやうよ？」

そういうことかと俺は納得した。

俺は鎧もつけていないどう見ても駆け出しの冒険者だ。リーナが金の心配をするのは分かる。

「ちなみに…おいくらですか？」

「うーん…、大金貨六枚…ってところかしらね」

大金貨…六枚って言うのと六百万円か？ お高いねえ聖金属つてのはそんなことを考えながら、俺は布に包まれた『黒竜の鱗』を取り出して、リアに差し出した。持ってきた鱗は八枚、相場に換算すると小金貨六十四枚、大金貨六枚分はある。

「これで足りるかな？」

「これは…鱗？ …この手触り…光沢…まさか『黒竜の鱗』！？」

「代金ぶんの価値はあると思うけど？」

「十分よ！！ さっそく作り始めるわ！ 長さはそれと同じくらいで良い？」

俺の腰の魂喰^{イター}を指差してリーナは俺に確認した。

俺が首を縦に振るのを見るとリーナはインゴットを抱えて店の奥へと行ってしまった。

「作るところが見たいならついてきて」

と言うリーナ。奥がどんなになっているのか気になって俺はついていくことにする。

「おお！」

「私の自慢の工房よ！」

すごいでしょー、とリーナが自慢を始めたところで俺の脳内で声が響く。

「コート！ 今どこにいるの！？」

「へ？ … ああ、『テレパティア念話』か、どうした？ リア」

「だから今どこ！？」

「今？ 鍛冶屋にいるけど…」

「鍛冶屋！？ リーナ姐さんのところ？」

「知り合い？ 意外だなー」

「なんでよ！ ていうか今すぐそこ出て！ リーナ姐さんに迷惑掛けないで！」

「随分な言い草だな…！」

リアの言葉に俺は語気を強めようとするが、それはリアの次の言葉にさえぎられる。

「アンタ、暗殺ギルドに狙われてる…！」

「……は？」

「だから今すぐあたしの家に来て！！ 場所はそこから北西に真っ直ぐ！ 一番目立つ大きな家！」

「……わかった、今行く」

俺が返事するとリアは念話を切ったようだ、何の声も聞こえなくなった。

一応、リーナに声をかけてから出ることにする。

「あー、リーナさん。今日ちょっと用事出来ちゃったんで帰ります！」

「うん？ わかった」

「じゃあ明後日あたりにまた来るんで！」

インゴットを熱し始めているリーナに声をかけて、俺は鍛冶屋の外に出た。

北西って…向こうか？ と歩き始めようとしたところで後ろから俺に声かけられた。

「すみません、道をお聞きしたいのですが」

「はい？」

杖を突いた優しそうな老紳士が俺の背後にいた。

急がないといけならしいが道を知らないと断りを入れるくらいならいいだろう。

俺は口を開こうとするが、老紳士は片手を上げてそれを制す。

老紳士は杖の柄を握ると左右に大きく伸ばした。

「教えていただきたいのは………死後への世界です！」
「なっ!？」

老紳士のステッキから白銀の光がこぼれた。
杖の中に武器を仕込む。

俺は昔の忍者も使っていたその武器に心当たりがあった。

「…仕込み杖かあ!!?」

俺は腰の剣帯から鞘ごと魂喰^{イター}を抜いて老紳士の横なぎの剣撃を防ぐ。
ステッキの柄から伸びる細い刀身はガッツ! と黒い鞘に受け止められる。

「暗殺ギルドか!？」

「そこまで知っていたか…」

老紳士の眼光が強くなり、口調が変化する。

一度、俺から離れると仕込み杖を振りかぶって切りかかってきた。

「クソッ!」

悪態をついてからブルータスを外し、俺は魂喰^{イター}を抜き放つ。

ドガッ! と向かってくる老紳士を剣ごと叩き潰す。もちろん峰打ちだが、ドラゴン並みの筋力で叩きつけたために骨の何本かは折れているだろう。

俺は急いでリアの元へ向かうべく急いで走り出した。

現在、

「あそこか？」

暗殺ギルドの婦人と子供を倒した俺はそれから程なくして、視界内に大きな屋敷を収めていた。

俺は正門はどこだろうと探し始める。

きょろきょろと辺りを見回す俺に声かけられた。

「コート君！　こちらです！」

17 決闘！？ 俺 VS 第三王子（の代理）！！（前書き）

更新遅くなってすみません汗

17 決闘！？ 俺 VS 第三王子（の代理）！！

さて、こんにちは。
藤宮^{ふじみや} 紅都^{こうと}です。

今、俺はシグントに屋敷の裏門前で呼び止められ何処かへと案内されている途中だ。
無駄に豪華な廊下をシグントともに歩きながら執事のような服の背中に声をかける。

「シグント…、俺はなんで呼ばれたのかを知りたいなー！」
「もう少しです」

特に理由を説明されることもないままここに連れて来られた。しかもシグントは「じきにわかります」の一点張りで何も言おうとしない。

いい加減フラストレーションが溜まって来たなーと俺が自覚し始めたところで、シグントが一つの扉の前で立ち止まる。金と銀で装飾が施された大きな扉だ。

「話を合わせてくださいいね？」

俺に小さく耳打ちしながら、重厚な造りのその扉をコンコンとノックしてから、シグントは両手で押し開けた。

次の瞬間、俺はその言葉の意味と、リアが洞窟を出発する時に言っていた「本当に王都に来ていいの？」という言葉の真相を理解した。

そういえば二話ぐらい後に言葉の意味が分かるとか書いてここまで分からなかったな。申し訳ない。

俺が見ている前で扉が開き、シグントは中に向かって声をかけた。

「失礼します。ナナド様、第三王子殿。リア様の婚約者をお連れ致しました。よろしいでしょうか」

「意外と早かったな、入れ」

シグントの声にカツコ良さげな男声が聞こえた。

ん？ リアの婚約者がここにいいのか？ でも俺の他には誰もいないよな…、まさか！

俺の不安は的中する。

シグントは中に足を踏み入れると俺の方に手を向けながら言った。

「冒険者のフジミヤ様。かなり以前からリア様とは交際なされていたようです」

何言っただシグントオオオオ！！！！ と、俺は脳内で叫びたくなるのを鋼のような精神力で抑えると、中に足を踏み入れ、豪華な部屋の中に視線をめぐらせた。

俺が婚約者ってことは、リアが誰かと結婚しなくてはいけないからそれを防ぐために協力して欲しい、とかそんなところだろう。俺は自分の推理力を総動員して答えを導き出した。

部屋の中にいるのは四人、青いドレスを着たリアと赤と黒の服を着た壮年の男性。

それとやたらキラキラした服を着た二十代前半くらいの太った男と、その後ろに立つ無表情な男だ。

俺はシグントが何かしら言うのだろうと待っていたが、一向にその気配がないことに冷や汗を流す。

「フジミヤ様、ナナド様と第三王子殿にご挨拶を」

予想通りだった。リアは部屋の隅でこちらを見つめてくる。

シグントが俺を促して誰かに挨拶をさせたいようだ。とりあえず、部屋の中で一番年をとっていそうな男性から挨拶をすることにした。

「ご紹介に預かりました、冒険者の藤宮 紅都と申します。この度はリア様との婚約をお伝えするためにここへ参りました次第でございます。ナナド様、第三王子様、以後お見知りおきを…」

昔、剣道の実家で習った言葉遣いがこんな所で役に立つとは思わなかったな。

最大限のアドリブで頑張る俺に、赤黒の服を着た男性が頷きながら何かを言おうとするが、それをさえぎるように太った男が椅子の上でふんぞり返りながら俺に話しかけてきた。

「お前がリアの婚約者か。リアは僕のものだ。即刻別れる」

まるでそうすることが当然、と言った感じで太った男が俺に命令してくる。

…二足歩行する豚にそんなことを言われるとは思わなかった俺は少し苛立ちを覚えながら反論する。

「失礼ですが、貴方にそのようなと言われる筋合いはありません」

「…二度とこの国に顔を出せないようにしてほしいのか？」

ここまで自信満々に圧力をかけてくるということはこいつが王子とやらなのだろう。ということはあつちのおじさんがナナドさんか。
フロミネンス ヘルファイア レッドカーベット
こんな国の王都など俺が『灼熱地獄の大炎柱』か『炎の世界』を使

えば簡単に滅ぼせると言うのに傲慢なことだな。

俺がまた反論しようと口を開きかけたとき、リアの口の形が『テレパティア』と小さく動いた。

「あんまり刺激しない方がいいわ。アンタに暗殺ギルドを向かわせたのもこの男よ」

リアに伝えられた情報に、俺は眉を潜めた。

口の中で小さく『リ・テレパティア』と呟いてから思考発声を会話と同時に進行させる。

「貴方にそれが出来るんですか？」

あえて挑発するように言ってみる。こうすれば何か情報が引き出せるかもしれないからだ。

たとえ怒らせて暗殺者が一万人来たとしても、今の能力に『神速神武』まで全開放すれば簡単に全滅させられる。物理的に。いやマジで。

予想通り、二足歩行する豚…王族豚は俺の態度に苛ついた様だ。変な顔になっている。

「リア、聞きたいことがある」

「そういえば、ここに来る途中で暗殺ギルドの方たちに襲われてしまったんですね…。まあ、全員返り討ちにしましたが」

「何よ…！　ってか暗殺者みんな倒したの！？　まあ、『竜殺し』のアンタだったら不思議はないけど…」

「ッ…！　それがどうした？　僕には関係ない」

王族豚は分かりやすくうろたえている。いっそのまま魂喰^{イーター}で首を跳ね飛ばしてやろうかとも思ったがやめておく。国際指名手配犯と

かになつたら嫌だし、なつても国を滅ぼすだけだがリアの故郷が無くなってしまう。

まあ、リアには一応聞いてみるが、

「ねえ、この国滅ぼしていい？」

「あれ？ 貴方が私に刺客を差し向けたのでは？」

「…ごめんもう一回言つて」

「ち、違う！ 僕がそんなことするわけないだろう！」

「だからこの国滅ぼしていい？」

「暗殺者たちに貴方の名前を聞いたのですがねえ」

「ダメに決まつてるでしょう！！！」

「なっ…！ お前いい「そこまで」」

俺の頭の中にリアの大声が響き、王族豚の声をその後ろに立っていた無表情な男が遮る。

俺はそこで無表情男が放つ雰囲気始めて気付く。

（こいつ…、強いな…）

ボディガード

王族の護衛ならば当然かもしれないが、無表情男が言葉と共に一瞬だけ放ったプレッシャーは只者ではなかった。

それにどうやら、それは俺に放つたものではなく、

（あの豚に向けたプレッシャー…。実力もシグントに届くか…？）

俺はリアへと視線を向ける。横目で捉えたリアの姿は明らかに狼狽していた。無表情男のプレッシャーに当てられたのだろう。

無表情男は俺の前に立つと口を開いた。

「デメエ…、意外とやるみたいだな…」

「おい！ アドル！ 貴様何勝手に「黙れ」……く……！」

アドルと呼ばれた無表情男は一言で王族豚を黙らせると片頬を吊り上げ獰猛な笑みを浮かべた。
次の瞬間、

ガキン！ 俺の魂喰^{イター}とアドルのトンファーがぶつかり合い、激しい火花を散らした。

そのまま、俺は眼前のトンファーをアドルごと切断してやろうと魂喰^{イター}に力を込めていく。
すると、アドルはあっさりと引き下がった。魂喰^{イター}を受け流すと後ろへ飛び退った。

「…もうイイ。満足だ」

アドルが呟いた直後にはトンファーはアドルの手から姿を消していた。

王族豚の肩にアドルは手を置いて、

「オイ、女が欲しいンだろ？ ンなら俺に任せな」

自信満々なことを言うてからアドルは俺に挑戦的な視線を向ける。

「テメエ…冒険者なら武芸大会に出るよな？ この王子と戦えよ。
んで負けたら女をよこせ」

「なに！？」

王族豚がアドルの言葉に目をまん丸に見開く

「うるせえぞイタリ。俺が代理で出る。」

「俺が勝つたらどうなるんだ？」

俺の返しにアドルは少し考え込んでから答えた。

「デメエの願いを何でもイタリが叶えてやる」

アドルには特に被害のない交換条件だった。

ナヴィスは直後に念話を発動させ、イエスを呼び出す。

「イエス！ まだ助けは来ないのか！？」

「すでに送っているが？」

「どこにいる！？」

『そんなことは知らん、自分で調べる。私も暇ではない、切るぞ』
「待てよ！」

ナヴィスの必死の食い止めも虚しく、イエスは容赦なく念話を打ち切った。

「くそ！！」

「あの、ナヴィス？」

ルビアナが悪態をつくナヴィスの顔色を伺うような口調で話しかけてきた。冷静に考えてみて初めて自分のしたことの重大さを理解したようだ。

「フェンリルはまだ完全には解き放たれていないと思うのだけど…」
「完全に？」

聞き返すナヴィスにルビアナは頷く。

「『神狼 フェンリル』その力は強大だけど、いきなり現れては自分ごと世界を粉々にしてしまう…。フェンリル自体の力が強すぎだね。フェンリルもそれは望まないから自分の力を世界に徐々に馴染ませていくはずよ」

「具体的にはどのくらいの時間でフェンリルは解き放たれるんだ？」

ナヴィスの質問にルビアナはそうね…と考えて言った。

「最短でも…あと一年はかかるはず」

外伝 アーバニアの双神 2 (後書き)

今回は短くてすいません汗

次の話もすぐに投稿します^^

18 クエスト受注！

「どーゆーことなのか説明してくれるよな？」

王族豚とアドルの出て行った扉を睨みながら、俺は背後のリアとシグントに問いかけた。

リアの父親だというナナドさんはアドルたちを見送りに言って今はいない。つまり、ここでは婚約者のふりをしなくても良いということだ。

己の武器、魂喰^{イタリ}に手をかけて、俺はゆっくりと振り返る。

「リア様は何もしていません。今回の事は私の一存」

後ろを見ると、シグントが深々と頭を下げながら謝罪の言葉を述べてきた。

下を向いたまま言葉を続ける。

「申し訳ございません。しかし、リア様があのイタリ様と婚姻を結びたくないとお申しますので…、実は『黒竜討伐』のクエストもイタリ様からのお誘いを断るための口実。ですが、ガラム洞窟で無類の強さを見せ付けたコート君を見たときに、君をリア様の婚約者として仕立て上げればイタリ様も諦めるのではないかと思ったのです」

シグントの今の説明を聞いて納得がいった。初めから、俺をリアの婚約者としてあの王族豚…イタリだっけ？ に引き合わせ、諦めさせるつもりだったのか。

道理であっさりとパーティへの一時加入を許したわけだ。

だが、俺がこの家に呼ばれたのは何らかのアクシデントがあったからなのだろう。

「なんで俺を今日呼んだの？ 別にリアとはあした約束してたよな？」

「…そ、それは」

シグントが口ごもるが、そんなシグントの前に進み出るリア。ほんの少し逡巡する素振りを見せ、口を開く。

「それは、イタリがアンタのことを知って暗殺ギルドに依頼を出したからよ」

やっぱりか…、さっきのイタリの態度から薄々わかってはいたが、本当にム力つくなあの豚。

そこで、俺の脳裏に一つの疑問がよぎった。

「シグント…俺の情報どこまで漏らした？」

「……！ な、なぜそれを……！」

「簡単だよ、俺はイタリに会ったこともなかったのに暗殺ギルドが俺を狙えるわけないだろう。ってことは、シグントが俺の名前と…少なくとも見た目を教えてることになるから」

名前と容姿の情報さえあれば俺の居場所くらい簡単に掴める。暗殺ギルドが聞き込みとかはあんま想像できないから情報屋みたいなのが諜報員がいるのだろう。

俺が思考の網を広げていく途中で、リアが俺に近寄ってくる。

「侍女が教えてくれたのよ。『王子様の付き人が暗殺ギルドの方に仕事を頼まれていましたよ！』って……。この屋敷にはルーギス以外の者が念話を使うと盗聴できるようになってて、付き人が外に出て行ったのがアンタのことを話した直後だったから怪しいと思ってね」

そこで、リアは一度言葉を切って少しすねたような表情を作る。
どうしたのだろうと俺が首をひねると、リアはこう言った。

「アンタが嫌なら…婚約者の話はなかったことにしてもいいわよ…」
「リア様？」

「でも私は…アンタと一緒に…」リア

俺はリアの言葉を遮るようにその名を呼んだ。
リアの顎に手を当てて、俺のほうを向かせる。

「そんな顔するな、いつも笑ってろ。俺はリアの笑顔が好きなんだ。
心配しなくてもやってやるよ」

眼前のお姫様の顎に当てていた手を放し、洞窟では世話になったかなと俺は片頬を吊り上げた。

俺の視線とリアのそれが交錯する。どれほど視線を交し合っていただろうか、リアがはっとわれに返るとお決まりの台詞を口にする。

「べ、べつに嬉しくなんかないんだから！」

相変わらずのツンデレ発言のリアをシグントが軽く笑って後ろから見ていた。

その後、俺は口裏を合わせるために軽く打ち合わせをしてから、大きな屋敷を出て『肉と野菜と料理』へ向かった。

暗殺ギルドが襲ってくるのではないかと少し危惧したが、誰も居なかった。先ほどの暗殺者をことごとく倒していったのが良かったのか、はたまたイタリがアドルに言われて依頼を取り下げたか。

どちらにしろ、暗殺者が来ないのならそれに越したことはない。俺は用心のために外していたブルータスを指につけ、石畳の上を進んでいく。

リアから、明日は休んでいていいと言われたのでリーナの所に武器を取りに行くまで暇である。

さて何をしようか…と考え事をしながら歩く俺は、そういえばと冒険者ギルドに所属したことを思い出した。金を稼ぐことも含めて戦闘に慣れておくのは悪いことではないだろう。

今までに戦闘を経験したモンスター——この世界では魔物と呼ぶらしい——が竜種だけってのもどうかと思うし。

俺は「思い立ったが吉日」という昔の人の言葉に習い、ぴたりと『肉と野菜と料理』に向かっていた足を止め、冒険者ギルドへと方向転換させる。

二十分後。

「どれがいつかなー」

俺はギルドへの依頼が張られている掲示板の前で首を捻っている。先ほど受け付けのお姉さん、ルエラさんにクエスト受諾の説明を受

けてここにやって来た。

スキルカードに新たに刻まれていた称号『Eランク冒険者』という名の通り、現在俺はEランクの『冒険者』。

ちなみにランクはE→Sまでの六段階。一定以上の成果を上げると自動的に称号が上がっていくらしい。

受けられるクエストは一度に一つ、Dランクのクエストまでなら問題なく受けられるが、Cランクからは契約金という形でお金が必要になるらしい。クエストが成功した場合はそのままの金額が報酬と一緒に帰ってくるが、失敗すれば戻ってこない。

今俺が目をつけているのは三つの討伐系クエストだ。

――血狼討伐――

依頼内容、グランキャッスル周辺の森に生息するブラッドウルフ二十匹の討伐。

討伐証明、ブラッドウルフの牙四十個、もしくは頭部を二十個どちらかをまとめて。

クエスト難易度 D

報酬、大銀貨九枚。

――怪鳥討伐――

依頼内容、グランキャッスルから西へ半日ほど進んだ場所に巣を作った怪鳥ミドルノアの討伐。

討伐証明、ミドルノアの虹色角一個。

クエスト難易度 C

報酬、小金貨二枚。

――炎猫討伐――

依頼内容、グランキャッスルのレストラン『ボルーク』内に住み着

いたフレイムキャットの討伐。

討伐証明、フレイムキャットの炎尾一本。

クエスト難易度 D

報酬、大銀貨七枚。

「うーん…」

俺は首をかしげた。

どれを受ければいいのか分からない。

大体、クエストの難易度が一つ上がっただけで報酬が倍以上に増えているのはどういうことだろう。そんなに難しいのかな？

そんなことを考えながら俺は一度、C、Dランク推奨の下位掲示板から離れる。

それから、階段を上って、A、Bランク推奨の上位掲示板を見に行った。

すると、ラフな出で立ちをしたリーナに出会った。

「あれ？ リーナさん？」

「！ コート君！」

「なにやってるんですか？」

「ちょっと依頼を…」

リーナは照れたように頭をかく。

依頼って何をだろう？ と俺が質問をするために口を開きかけると、

「お待たせしました！」

元気な声が二階に響いた。

リーナと共に階段のほうに目を向けると、ツインテールをぴよこつと揺らす女の子がいた。

誰だ？ と俺は女の子を見るとその子の服に何か引っかかる。

茶色の下地を黄色で彩った、ブレザーのような制服を身に纏っていた。それは以前、受付の時にお姉さんが着ていたものに良く似ている。

「エイドさん。クエストの発注書を確認してもらえますかあ？」

どうやらギルドの職員らしい。エイドというのはリーナの苗字だろう。

俺はリーナが手渡された紙を横から覗き込む。

——精霊結晶採取——

依頼内容、リバン火山での『ファイア火の精霊結晶』の採取。

依頼対象、『ファイア火の精霊結晶』。大きさは中くらいのもの二つ、もし

くは大きなものを一つ。

クエスト難易度、A

報酬、大金貨三枚。

「大金貨三枚!？」

俺は報酬の多さに目を丸くした。三百万円だ。そして迷わず右手を上げる。

「それ俺が受けます！」

19 トレグ火山！

「あっちー……」

クエストを受けた俺が今いるのは『ファイア クリスタル火の精霊結晶』が採れるという
トレグ火山だ。

グランキャッスルから徒歩で一週間ほど南に行った場所にあるその
活火山は、溶岩がグラグラと煮立っていた。
おかげでとても、

「暑い！ ふざけんな！」

温度は優に五十度を超えるだろう。俺は其中でとぼとぼ歩きな
がらトレグ火山の奥へと向かっていった。

周りの熱気で汗を垂れ流しながら進む俺の前に一匹の魔物が現れた。

「グアアオッ！！」

「……みーつけた」

俺は目的の魔物を見つけてにやりと笑う。

頭には角、口からはぼたぼたと赤い溶岩をたらした熊のような姿。

ギルドで借りた魔物名鑑に乗っていた気がする。トレグ火山に生息
する熊型の手ごわい魔物。体高は150センチ、体の半分が溶岩で
出来た『バーンベア』。

俺が探していた魔物だ。

なぜなら、こいつは『火の精霊結晶』を喰って体の中で精製し、より大きな結晶にして体の中に溜め込んでいるからだ。
俺はギルドからの支給品である鋼で出来た片手用の直剣を抜き放った。

正眼に構えてバーンベアを睨みつける。

「グウウウ……！」

うなり声を上げるバーンベア。

「行くぜ？」

短く呟くと、俺はバーンベアに飛び掛った。

トレグ火山に到着する三時間前。

冒険者ギルド、グランキャッスル支店。

「それ俺が受けます！」

勢いよく右手を空中に突き上げた俺を、小さなギルド嬢とリーナがぽかんと眺めている。

「……俺が受けても問題ないよね？」

黙り込む二人に俺は確認を取ろうと口を開いた。

「えっとお、問題はないですう」

「コート君…、これ、君の武器のための依頼なんだけどな…？」

ギルド嬢が問題がないことを肯定したが、リーナはなぜか苦笑いをしていた。

俺は首をひねる。

「武器つて？」

「コート君の武器に精霊結晶を五つ埋め込むことにしたから。とりあえず、君からもらった『風』に相性が良い『火』の精霊結晶がほしいの。ダガーに入れたやつは小さすぎるから『火』が『風』に吹き消されちゃうの」

「へー」

説明をさらりと流すと、俺はリーナの手から依頼書を抜き取って依頼受付へと向かった。

そんな俺の腕をリーナが慌てて掴む。

「ちょっと！ コート君、武芸大会に出るんでしょ？ だったらそのクエスト受けてる時間がないよ！ 『レポート』の魔法か…せめて『ロングムーブ』のスキルが使えないと…」

「それこそ問題ない」

俺はリーナに胸を張って言い切った。瞬間移動の魔法なんぞ創つてしまえば簡単だからだ。

ブルータスはその時だけ外してしまえばいいだろう。

俺はリーナの指を俺の手首から一本一本解くと、（俺が手を握ると

リーナはなぜかぼけーとした）その隙に依頼受付に右手に握った紙を提出した。

「あー！」

「お願いしまーす」

受付のギルド嬢が、俺からにこやかに用紙を受けとる。

「Aランクの精霊結晶採取でよろしいでしょうか？」

「はい、オッケーです」

「この依頼には特例として契約金が発生いたしません。その代わりに、この契約の腕輪をつけていただきます。精霊結晶を持ち逃げする冒険者が過去に何人かいましたので、その対応策です。精霊結晶に反応する腕輪なので」

「ふむふむ、あつ！」

俺は説明を聞いている途中で、剣を持っていないことに気づく。魂¹喰^タはブルータスをつけているときは扱えないのだ。

「ギルドって剣とか売ってませんか？」

「Aランクの依頼ですので、剣などのものは支給品として提供されます」

「ラッキー、それもらえますか？」

「はい、こちらになります」

流暢に言葉を紡ぎながら、ギルド嬢はカウンターの奥から一振りの剣を取り出した。

俺はそれを受け取ると、チャキ……！と少しだけ刀身を覗かせる。ギラリ……と刃が蠟燭の光を反射した。

「他に、何か必要な装備はございますか？」

「いや、ないです」

「それではスキルカードをこの認証球に当ててください」

俺は差し出された透明な球に顕現させたスキルカードを押し当てる。すると認証球がほのかに光り、俺のカードに光が乗り移った。

「登録は完了です。いってらっしゃいませ」

「どもー」

俺はギルド嬢に礼を言ってから、後ろで立っていたリーナの方に向き直った。

小さいほうのギルド嬢はいなくなっていた。いろいろ仕事もあるのだろう。

リーナはむすつとしている。何でだ？

「…なんで怒ってるんでしょうリーナさん」

「だって…コート君に剣を渡せるのはずいぶん先になっちゃうから…」

「明日までには戻ってきますって！」

「無理に決まってるでしょ！！ もう知らない！」

なぜかリーナはプンプンしながらギルドから出て行ってしまった。

まあ、その時に揺れたリーナの体の一部分に釘付けになっていたのは言うまでもないが。

「……………後で謝りにいこ」

乱暴に閉められてギィギィと不満そうな音を立てているドアに視線を向けながら俺は呟いた。

だが、すぐに頭を切り替える。本棚から『トレグ火山の章』と書かれた本を抜きとってから、リーナを追うように俺は外に出た。魔法を創造するのを誰かに見られないようにするためだ。

「ここらへんでいいかな…」

ギルド傍の裏路地に入り、辺りに人がいないことを確認する。そして、地図でトレグ火山の方向と距離を頭に叩き込む。トレグ火山に体を向け、新しい魔法の創造を開始した。使用する魔力は丁度100。ブルータスを外して魔力を右手に集中させる。

――想像しよう

――万里の道を一瞬で詰め
――光でさえも追い抜いて
――何よりも速く突き進む
――其は神の肢を顕現する

――創造しよう

「『テレポーター
韋駄天』」

ギョーン！！と、新魔法を唱えた次の瞬間に、辺りの景色が歪んだ。灰色の町並みが沢山の絵の具をぶちまけた様な極彩色に変化していく。

時間にして二秒ほどの色の奔流が落ち着いたかと思うと、俺は蒸気

を上げる岩の間に座り込んでいた。

「…うえっぷ」

正直吐きそうだった。車酔いの感覚が何倍も酷くなったかのような感覚だ。

とりあえず立ち上がって首を左右に振る。

「ここ…トレグ火山？ 適当に創ったスキルだけど…行きたい所に行ける位置補正付きか…、得したな」

弱々しく呟いて、俺は手に持っていた『トレグ火山の章』を開く。
『完全言語』はなぜかこの前から発動しっぱなしだ。

「なにになに…？ 『ファイア クリスタル 火の精霊結晶』の分布場所…は『バーンベア』の体内…体内イ？」

何度見ても本に書かれた文章は変わらなかった。

『完全言語』は完璧に翻訳するはずだからバグってるわけじゃないのだろう。

今度は魔物が書かれている場所を探して、『バーンベア』の部分を読んでみる。

「バーンベア…、灼熱の角を持った溶岩獣。見た目はこの挿絵ってことか。体内で精霊結晶を精製する…」

驚いたことに、美麗イラストと解説付きだった。絵を描くスキルでもあるのだろうか。

「とりあえず…こいつ殺せばいいのかな？」

ブルータスを嵌めなおしてから、俺は剣を腰のベルトにつけると火山の奥へと向かった。

そして現在、

「行くぜ？」

呟いてから、俺はバーンベアへと飛び掛った。

挨拶代わりにバーンベアの頭から伸びる角へと直剣を叩きつけた。だが、

「…はあ？」

剣が角に触れた瞬間、ドロリ…！と直剣が触れた部分が溶け出した。

俺は慌てて剣を引く。ちらりと剣に目を向けると角に触れていた部分が溶けて歪んでしまっていた。

「くそ…。剣が効かないんじゃないやどうすればいいのかわかんねーよ…」

ため息とともに愚痴を吐き出す。

一瞬、ブルータスを外してもう一本、腰に吊るしている魂喰^{イーター}を使うとかと逡巡するがそれではこれからもブルータスを外してしまうだろう、と思い直す。

ならどうするべきか、と俺はバーンベアと睨み合いながら考える。

「まずは…、火の反属性の水の魔法でも使うか？」
『アクアランス』
「！」

シグントから借りたスキル集の中にあつた水の上位魔法だ。

俺の今の魔力量はBランクの150。『アクアランス』は一発で3ほど消費するから全消費で五十発ほど放てる。

まずは、と俺は3発のアクアランスをバーンベアへと向かわせた。

しかし、ジュジュジュッ！！ と、バーンベアの体表に触れた瞬間にすべての水槍が蒸発する。

「グウウウウ……！！！」

灼熱の熊が唸りを上げる。

「……………どうするかねえ」

天を仰ぎながら、俺は短く呟いた。

20 精霊結晶の暴走！？（前書き）

今回は短めです^^

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします^^

20 精霊結晶の暴走！？

「……………どうするかねえ」

俺は天を仰ぎながら言葉を続ける。

「『テレポーター 韋駄天』」

転移する場所は三十メートル後ろにある岩陰だ。一度、戦術を組み立てなおすための休憩時間。

トレグ火山に向かったときと同じように景色が一瞬だけ歪む。

気付くと俺はバーンベアの視界から離脱していた。

「鋼は溶かされるし、水は蒸発する…。でもなー、一日で帰るって言っちゃったからブルータスはずして魔法で仕留めるか…？」

先ほど使わないと言ったが、やはりAランクの依頼だ。使ったって文句は言われないだろう。

俺はあっさりとブルータスを外して魔力を開放する。

だが、今まで創造した魔法は炎系統ばかりだからバーンベアには効果が薄いだろう。

ならば水系統の魔法、と思って俺は魔法創造を開始する。

今までのような広範囲殲滅魔法ではなく、一固体を対象とした『ロミネンス ヘルファイア 灼熱地獄の大炎柱』の様な大魔法。

使う魔力は9999、『灼熱地獄の大炎柱』並みの魔力量だ。

岩陰から頭をひよいとだしてバーンベアを視界の端に入れる。

——想像しよう

——無数に浮かぶ水の槍

——この世界を埋め尽くし

——光を纏い貫き続ける

——其は世界を滅ぼす刃なり

——創造しよう

「『氷結地獄の千連槍』
フリザード ランサーズ
」

呪文を唱えた瞬間、バーンベアの周囲に無数の……いや3333発のアクアランスの氷版『アイスランス』が出現する。球体状に並んだ氷槍に囲まれ、バーンベアがうろたえる。

量より質の一本の火柱『灼熱地獄の大炎柱』とは違う、質より量の無数の氷槍『氷結地獄の千連槍』。

「んじゃ……穴だらけになりやがれ」

俺の言葉と同時に氷槍がバーンベアに向かって一気に襲い掛かった。ジュジュジュジュジュジュジュジュジュドドドドドッ——

——！！！！。

氷槍はバーンベアにぶつかった途端にジュワツと蒸発していくが、それも最初だけだった。

氷が蒸発するときにバーンベアの持つ熱を気化熱として奪っていくのだ。

バーンベアの氷を瞬時に溶かしていた熱の鎧は姿を消し、氷槍がそ

の体に叩き込まれていく。

そして、俺が見ている間に次々とバーンベアの体に氷槍が突き立ち、あっと言う間に歪な氷の塔が出来上がった。

「これ…どうやって精霊結晶クリスタル採ればいいんだ？ 氷溶かせば——
！」

俺は一から氷を溶かさなければいけないのかと危惧したが、その不安は新たな不安で塗り潰された。

なぜなら、氷の塔の中心がきらりと光ったかと思った次の瞬間。

轟轟ッ！！！！ と塔を真紅の炎が埋め尽くし、氷が全て溶けてしまったのだ。

そして、氷の中から炎を纏った巨大な一本角の大熊が現れた。大きさはちよっとした小屋と同じくらい。

そんな巨獣をみて、俺は一つの可能性に行き着いた。

——精霊結晶は砕けば一時的に凄まじい力を行使できる——

「やべ…精霊結晶砕いちまった…？」

俺は魂喰イーターを引き抜いてポツリと呟く。

バーンベア（精霊結晶付）を倒すためにはどうすればいいか。
やはり、必要なのは量より質、次に創るべきは魔法ではなく剣技のスキル。

全てを滅する魔法ではなく、全てを切り裂くスキルを創る。
魔力とスキルを融合させた、この世界には無い新しい技能。
手に魔力を集めるのではなく、剣に魔力を通わせる。
氷の魔法と竜断ち、二つを一つに。

――想像しよう、

――絶対零度を纏いし刃

――其は全ての炎を切り裂くものなり

――縦一文字に銀光を奔らせる

――竜を切り裂く力を剣に

――創造し、剣を振るえ

「『魔剣技・氷竜斬』」

俺の、俺だけのスキル『魔剣技』。

…さて、どんな力を見せてくれるのか。

20 精霊結晶の暴走！？（後書き）

次回は紅都の新スキル『魔剣技』の話です～
やっと剣士っぽくなってきました！

21 魔剣技！？（前書き）

最近短めです汗

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします^^

21 魔剣技！？

『魔法』と『スキル』は別々のものである。

それを俺は一つにしてみた。スキルは精神力と体力を消費するものだが、そこに魔力を上乗せする。

リーナの『炎のダガー』からヒントを得て、魂喰^{イター}に魔力を流し込む。流し込んだ魔力を氷に変換させる。すなわち、絶対零度の氷刃『魔剣技・氷竜斬』へ

「『魔剣技・氷竜斬』」

俺はスキル名を唱えて腕を振るった。

バーンベア（精霊結晶付）に向かって大上段から振りぬかれた魂喰の銀色の軌跡を追うように氷の刃が出現、空を切り裂きながら飛翔していく。

それはバーンベア（精霊結晶付）の首に当たり、胴体と首を切り離そうとする。

ゆらあ…と揺らめいて精霊結晶の炎が氷の刃を迎撃、二つは一瞬だけ拮抗したかに見えたが、氷の刃が炎の首を跳ね飛ばした。

無数のアイスランスを一度に溶かした炎でさえも、分子の運動を停止させる絶対零度の刃には適わなかったようだ。

空中に投げ出された炎は四散して消えるが、身体から新たに炎が溢

れ出し、バーンベア（精霊結晶付）の首が出来上がる。

大きな岩のすぐ傍に立っていた俺は、それを見て苦笑いを浮かべた。

「俺以上にチートじゃねえか？ 精霊結晶すげえな…」

流石に神人と同じくらいの力を発揮するっただけあるな、と俺は素直に感心した。

俺の動きを伺うかのように唸り声を上げながらゆっくりと俺に近づいてくる。

「ゴオオオオオオッ！！！！！」

ボボボッ！！ とバーンベア（精霊結晶付）は動きを止めたかと思うと唸り声を上げ、ブラッドラゴンのフレイムカノンに匹敵するほどの炎球を俺に放ってきた。

「チッ…」

俺は舌打ちして新しい魔剣技を発動する。

今度は『氷竜斬』のような大技ではなく連発の利く小技だ。

——想像しよう

——無数に閃く氷の剣を

——創造しよう

「『魔剣技・乱氷閃』！！！」

超即興で作った魔剣技だが、上手くいったようだ。俺が魂喰を振るうたびに何十本もの氷の刃が生まれ、炎球に襲い掛かる。

ドパパパパパパパパパッ！！　と小さな水蒸気爆発が連続し、全ての炎球が消し飛んだ。

「まだまだ終わりじゃねーぞ！！」

俺は叫ぶとバーンベア（精霊結晶付）に向かって駆け出した。その途中でまた、新たな魔剣技を創造する。

——想像しよう

——獲物に襲い掛かる氷の顎あぎとを

——獲物を襲う狩人の槍を

——創造しよう

「『魔剣連技・双氷牙・氷皇槍』！！」

俺は声と共に魂喰をバーンベア（精霊結晶付）に向かって突き出す。すると、魂喰の上下から巨大な氷の槍が弧を描いてバーンベア（精霊結晶付）に襲い掛かった。

しかし、バキャンッ！！　と炎の熱に耐えきれず槍が碎ける。まあ、大して魔力を込めてないから不思議は無い、これは『魔剣技・双氷牙』だ。

魔剣技の二段重ね『魔剣連技』。

本命はこの後、二回目の突きと共に繰り出される氷の槍『魔剣技・

氷皇槍』。

氷の顎が砕け散った破片の中、魂喰から伸びた長大な氷の槍がバーンベア（精霊結晶付）の喉元を貫いていく。

先ほどの『双氷牙』とは違う、『氷竜斬』のような絶対零度の氷の槍。

それはバーンベア（精霊結晶付）の体の核である精霊結晶の破片に触れ、猛る炎を凍りつかせた。バーンベア（精霊結晶付）形の炎の氷が出来上がる。

「俺の勝ちだぜ…！」

パキイイン！ と甲高い音をたてて凍ったバーンベア（精霊結晶付）が粉々に砕け散った。

22 クエスト完了！

精霊結晶の力で暴走したバーンベアとの戦いに、俺は俺だけの固有技能『魔剣技』を使って勝利した。

しかし、

「いや…精霊結晶無くなっちゃったし…ある意味俺の負けか？」

がつくりと肩を落として俺はため息をつく。

『魔剣技』という新しいスキルは手に入れたものの、精霊結晶がクエスト達成アイテムなのだ。それがゲットできなければ元も子もない。

なのでバーンベアを探さなければいけなかったのだが、案外簡単にその問題は解決した。

「グオオオオオオ！！」

ドストスと大地を揺らしながら一匹のバーンベア、今度は精霊結晶で暴走してはいないやつが俺に向かって突進してきた。

さっきの奴よりも少し大きい固体だったが、俺は慌てずに魂喰^{イーター}を構える。

「『魔剣技・閃』」

今度はお手軽版だ。

魂喰に刃の形の無属性魔力をまとわせ、右上段から振りぬくだけ。

ヒュン！ と大気を切り裂く軽い音とともに、一本の魔力の刃がバーンベアへと飛翔する。

「グオウツ！」

が、簡単な魔力の刃はバーンベアが唸り声とともに角で碎いてしまった。

俺は少々焦りとともに、次はちゃんとした魔剣技を発動する。

「やばいやばいっと…『魔剣技・乱氷閃』！」

大量に生まれる氷の刃をすべてバーンベアの頭部に集中させる。すると、ドガガガガガガッ！ と頭を微塵切りにするはずだった刃が熱で溶けて無数の鈍器に変化、バーンベアの頭部をぐちゃぐちゃのトマトのようになってしまう。

バーンベアはちょうど俺の足元に体を投げ出す形で動きを止める。

「魔力の量で温度が変わるのか…？」

俺は意外そうに首をかしげる。魂喰を鞘に収めて『アクア』という水を生み出す魔法を使ってバーンベアの体を冷やした。

なんとか触れられる温度まで下げてから指にブルータスを嵌めなおし、鋼の剣で体を切り開いていく。

ザクザクと切り刻んでいると、刃が何かに当たって音を立てた。

最初のバーンベアに歪まされてしまった鋼の剣をばいっと放り捨ててから、俺はバーンベアの体内に手を差し入れる。

肉を掻き分ける不快な感触が手に伝わるが、構わずに探り続けると硬い物が手に触れた。

「お？」

ぶちゆりと水気を含んだ音を立てながら腕を引き抜くと、仄かに熱を持った赤い宝石のようなものが俺の手に乗っていた。

これが『火の精霊結晶』ファイアクリスタルで間違いないだろう。

確認のために左腕につけた契約の腕輪に当ててみると、精霊結晶は腕輪の中に吸い込まれた。腕輪は一瞬だけ強い光を放つ。

「契約の腕輪って…物質転送機能付き？ 確かに持ち逃げされることは無さそうだけど…」。

確認のために精霊結晶当てないと転送されないんじゃない？」

『契約の腕輪』のシステムについての矛盾を列挙するが、俺はそんなことをしている場合じゃないと気づく。

さっき採集した精霊結晶でクエスト達成には十分なようだし、ここはさっさとグランキャッスルに帰るのが得策だろう。

そう思い、俺は『テレポーター韋駄天』を発動させる。

いつも通りに、景色が歪んでいく――。

「おめでとうございます、これでクエストは完了です」

俺はギルドの受付で契約の腕輪を返却しているところだった。どう

も腕輪にかけられている魔法は物質転送ではなく、ただの収納機能だったようだ。

俺のギルド登録のときのギルド嬢がクエストの完了手続きをしてくれた。マドミス王国のギルド嬢は主に三人だけのようだ。あまり大きくないのだろうか。

「これが報酬の大金貨三枚になります」

棚から小さな袋を取り出し、カウンターの上において差し出してくるギルド嬢。

俺はそれに手を伸ばして持ち上げる。

「…重いな」

「大金貨が三枚入っていますからね」

ギルド嬢——大きいからギルド嬢（大）と呼ぶ——が俺の方に身を乗り出してきた。

なぜか目がキラキラしている。

「この前登録したばかりなのに、もうAランククエストを達成ですか…。実は凄腕だったりします？」

「どーかな？ それは今後の活躍に期待ってことで」

「わかりました、期待しておきますね？ あ、私ノイン・ホーストンっていいです。これからよろしくお願いしますね」

「ノインさんね？ よろしく」

ギルド嬢（大）…もといノインに笑いかけてから俺はギルドの扉を開けて外に出る。

灰色の石畳を歩きながら宿屋『肉と野菜と料理』へ向かった。

「あら、おかえりい！」

「ただいま！ 晩飯の時間になったら起こしてください！」

ノルハさんの元気な声を背に受けながら俺は部屋に戻る。

部屋のドアを開けて、中に入ると俺はベッドに倒れこんだ。

（あ…明日、リーナさんところに行かないと…）

俺は明日の予定を脳裏で確認してから、夢の世界へと旅立っていった。

23 新武器（今度こそ本当に！）ゲット！！！（前書き）

今回はいつも通りの長さです^^

23 新武器（今度こそ本当に！）ゲット！！！！

「目を開けるとそこは見知った天井だった。……なーんてな」

俺はベッドの上で目を開けながら呟いた。のそりと掛け布団をはいで起き上がり、首をポキポキと鳴らす。

アーバニアの宿屋のベッドは思ったよりも上質のものだった。

ただ、それは下着などの日用品が発達しているマドミス王国ならではのと思う。もし、これからアーバニア全土を旅するのであれば野宿なども覚悟していたほうが良いだろう。

俺はベッドの淵に座って大きく伸びをした。

立ち上がると靴下をはいて靴を履く。

マドミス王国に来てから何度も繰り返した朝の起動シークエンスだ。

「どんなだろ？」

今日は、リーナのところへ武器を取りに行く日なのだ。武器への期待を込めて独白する。

聖金属と呼ばれる貴重な鉱物を使ってもらい、さらに精霊結晶を埋め込んだ特別製。正直、武器マニアな自分には楽しみでたまらない。床の上で簡単なストレッチをしてから、部屋に備え付けられている

水桶に『アクア』の魔法で水を注ぎ込む。

ちなみに水を生み出す『アクア』を始めとした火をつける魔法『フアイア』、扇風機代わりの魔法『ウィンド』などの基本的な魔法は子供でも使えるらしい。

魔力がない獣人達は下のカウンターでノルハさんのような女将さんから水瓶をもらうそう^だ。

顔を洗ってから、俺は魂喰^{イーター}を帯刀して食堂に下りていく。

「あら、おはようコート君！　なんだい？　今日はやけに早いじゃないか」

俺が食堂に行くと、ノルハさんはテーブルをごしごしと布巾で拭いているところだった。

ノルハさんは顔を上げて、俺に悪戯っぽい視線を向けてきた。

「いやだな…、それじゃ俺がいつも寝てるみたいじゃないですか！」「違うのかい？　あははっ！」

ノルハさんは朗らかに笑うと、布巾をもってキッチンの奥へと歩いていく。

俺はキッチンからすぐのカウンターに腰を下ろして、ノルハさんに声をかける。

「朝飯お願いしまーす」

「はいよ！」

ノルハさんが手際よくサンドイッチを作っていく。

ほんの二、三分で、さまざまな種類のサンドイッチが出来上がった。俺はそれをむしゃむしゃと貪りながらノルハさんに質問する。

「あのー…、治安維持部隊の詰所ってどこにあるんですかね？」

ガラム洞窟で発見した卵から孵った黒竜の幼生「ラック」は危険度の査定という理由で、今現在、グランキャッスルの治安維持部隊という連中に預かってもらっている。

期限はグランキャッスルに俺が到着した日から五日間、なので明日引取りにいかねばならないのだ。

俺の問いに、ノルハさんは少し考えるそぶりを見せた。

「うーん…、治安維持部隊…ねえ。城門のところまで行けば会えると思うけど…。悪いねえ、役に立てなくて」

「いやいや、それが分かっただけでも十分ですよ」

「そういつてもらえると助かるよ。…そういえば、今日はどこに行くんだい？」

「リーナさんって鍛冶屋のところに新しい武器を取りに行くんです！…！」

「…なんでそんなに興奮してるんだい？」

「ハッ…！？ す、すいません…テンション上がっちゃって…」

「まあ…ほどほどにね？」

「あ、あはは…」

俺は頭をかいて苦笑いした。サンドイツチの最後のかけらを口に放り込んで皿をカウンターの奥へと押し下げる。

席を立つと俺はノルハさんに一礼してから、リーナの鍛冶屋へと向かった。

「これはどういうことだろう…」

俺はリーナの鍛冶屋の前で呆然と立ち尽くしていた。

ドアの前には「進入禁止」「入るな危険」などといった文言が書かれた板が所狭しと並べられ、中からは何回も爆音が聞こえてくる。さすがに中に入ることを躊躇するレベルだ。俺はどうするべきかと本気で頭を悩ませ始めるが、それはひとときわ大きい爆発音にさえぎられた。

ドガン！ と火の粉とともに木製のドアが砕け、破片が俺に向かってくる。

慌ててしゃがんで回避、恐る恐る顔を上げて店内を覗き込む。すると粉塵が舞い飛ぶ中でリーナが黒い剣？ のようなものを振り回して喜んでいた。

「あのー、リーナさん？」

「コート君！？」

俺が声をかけるとリーナは勢い良く振り向き、黒剣を腰だめに構えると俺に向かって突進してきた。…突進してきた！？

「なんでだよ！？」

全力でツツコミを入れるが、リーナは構わず突進を続ける。いや、それだけではなく更に加速してから凄まじい速度の突きを俺に放ってきた。

「『プロテクトバリア』！」

とっさに強力な障壁を展開、剣先を防ごうとする。

キーン！ 障壁と黒剣がぶつかり合って甲高い音を立てるが、障壁は何とか剣先を受け止めた。

「……リーナさん？」

再度、目をぎらぎらと輝かせているリーナに俺は声をかけた。

すると、リーナは上目遣いで俺を見つめてくる。その際にタンクトップから見える胸の谷間に少なからず興奮してしまった俺を誰が責められようか。

リーナは黒剣を俺の前に突き出した。黒い刀身には五つの穴が開いてあり、柄に近い二つの孔には透明な赤と緑の珠が嵌められている。おそらく『火』と『風』の精霊結晶だろう。

「んふ、コート君！ ついに完成したんだよ！ 私の最高傑作『アルカディア』が！」

「アルカディアって……その黒い剣ですか？」

「そうだよっ！ 精霊結晶を五つはめ込めるようにした特別製！。しかも私のレアスキル『鍊金』と『付与』で精霊結晶の取り外しがいつでも可能！ 例えば同じ属性の精霊結晶を五個繋げれば『神剣』の類にだって負けないよ！」

怒涛の勢いでマシンガンのように新武器『アルカディア』の解説を続けるリーナ。

俺はそれを神妙な顔で聞いていたが、流石に鬱陶しくなってきたのでさえぎるために行動を起こすことにした。

「それに聖金属を三つも混ぜたから硬度は最高！ 絶対に曲がらないし折れないしひびも出来ないし錆びないし壊れな——」

「ちよつと止まって！」

「——いし何より精霊結晶の力なしでも剣としては超一級品——」

「止まれっばー!!」

甘かった。リーナは真性の武器オタクだ。しかも『アルカディア』は自分の作った武器の中でも最高傑作らしいからますます興奮している。

俺は二度大声を張り上げてリーナのマシンガントークを中断させると、サツと彼女の細い指からアルカディアを抜き取った。

「あーっ！ 返してよ！」

「俺のだろ！ …いや、すみません。でも試し斬りしたくなっちゃいます」

「試し斬り！？ まさか私をつ！？」

「違う！！ なんか俺が猟奇殺人者みたいじゃねえか!!」

「…ならいいけど」

「その目はなんだ!!」

リーナはジト目で俺を見つめてくる。

だが、俺のツツコミを受けると軽く笑って店の奥に進んでいった。

「リーナさん？」

「試し斬りしたいんだよねっ？ じゃあついておいでよっ！」

俺は首をかしげながらリーナの後についていったが、直後にリーナの言葉の意味を知ることになった。

リーナ自慢の煤にまみれた工房を進んでいくと裏口のようなものがあり、リーナの後についてそこをくぐると周囲を石壁に囲まれた空間に出た。

「広いな…」

感嘆の声を上げながら辺りを見回すと、リーナはくすぐったそうに笑う。

「もうっ…！ そんなことはいいいからさっさと発動してみてよ！

まずは『風』からっ」

「分かりました…『風の精霊結晶^{ウインド クリスタル}』だけに魔力を通わせればいいんですよね？」

横目でリーナがうなずくのを確認してから、俺は体の魔力をアルカディアに与え始めた。

使う魔力は10。イメージする魔法は風の刃だ。

ヒュイイイイ！ アルカディアの周囲を風が取り巻き、高速で回転を始めた。

23 新武器（今度こそ本当に！）ゲット！！！（後書き）

今回はめっちゃ気合い入れて書きました！

24 アルカディアの能力!! (前書き)

誤字脱字がありましたらご指摘お願いしまーす^^

24 アルカディアの能力!!

ヒュイイイイ！ と、俺に魔力を与えられたアルカディアは周囲の風を刀身に纏わせる。

「試し斬りにはこれを使ってねー！」

リーナが石で出来た人形を工房の中から引っ張り出してきた。人の形をした人形、材質は鉄のようだ。というか…あれ？

「ちょっと待て！　なんで三体も素手で持ち運べんですか!？」

軽々と笑顔で鉄塊を持ち運びリーナに軽い戦慄を覚える俺。

ズシーンと部屋を中心に二体、部屋の端に一体の人形を置いてリーナは首をかしげた。

「素手で運べるわけないでしょー？　スキルだよスキル。どんなスキルなのかは教えないけどねー」

「…はあ」

「まあその話はおいとして。試し斬りするならこれにねっ？」

「それも待て！　鉄製ですよ！　剣折れますよ！」

「大丈夫だよ、それ何でも切れるからっ」

「さらりとすげーこと言いやがってくれました!？　斬鉄剣かよ！」

「ざんてっけん？　それが何かわかんないけど風を纏わせると切れ味がもっと増すから鉄なんて空気より簡単に斬れるよっ」

「斬撃力上昇！ 空気よりつてもはや抵抗感じないんじゃ！？」

「他にもいろいろあるよ！ 風を一気に凝縮して打ち出せば風の矢みたいなのも撃ちだせるよっ」

「てめえボケに役割変えてんじゃねーぞ！ 凄すぎてもうツツコミ
できねえよ！ キヤラ違うだろ！？」

「はいはい、それより早く試し斬りー！ 風の斬撃と風の矢ねー！」

早く早く！ とリーナは俺を急かした。

俺はあきらめたように首を振ると、アルカディアに意識を集中させる。

アルカディアに更に魔力を喰わせて風の密度を上げる。この時点で俺の手にかかるアルカディアの重量はほぼゼロになっていた。

風の魔力が剣にかかる重力を相殺しているのだろう。

俺はそれに少し感心しながらアルカディアを上段に構えると、リーナが置いてくれた鉄人形に斬りかかった。

「ふっ！」

呼吸とともに気合を乗せて、鉄人形の首にアルカディアを水平に叩きつける。

話は変わるが、恐らく今の俺の筋力と魂喰^{イター}の切れ味をもってすれば鉄の切断くらいは出来る。

だがブルータスで力を封印している今、それが出来るかと言われたら答えは否、出来ないだろう。それは恐らくアルカディアでも同じ。そう思っていた俺の予想は、いとも簡単に裏切られた。

スッ！！ と何の抵抗もなくアルカディアの刃が鉄人形の首と胴体を切り離す。

次は風の矢だ。わずかに驚きながら、新たに魔力を加えてアルカディアを取り巻く風を剣先一点に集中させる。アルカディア全体を取り巻いていた風に加えて周囲から再び大量に風を集めていった。

キィィィン！ と剣先に集められた風が高速で回転、小さな竜巻のようになつていく。

ぐぐつ！ と力を溜め、アルカディアを肩の高さまで持ち上げて腕を引く。それとは逆に左手は無造作に突き出して鉄人形との距離を測る。

「セイッ！」

左腕を引く。その反動を利用してアルカディアを遠くの鉄人形に向けて思い切り突き出した。剣道時代一番得意だった捻転力を最大に乗せる突き『無明』^{むみょう}。まあ、無明は無名。特に名前は付けていないのだが。

ギョルアアッ！ とアルカディアの剣先から放たれた風の矢が、螺旋を描きながら鉄人形の頭部を吹き飛ばした。

「おおー！」

「すごいなこれ…」

リーナが感嘆の、俺は興奮と驚きの入り混じった声を上げた。俺は魔力供給を停止する。すると仄かに纏っていた風が消え、ズシリと俺の腕にアルカディア本来の重量が戻ってくる。

「魔力を風に変換してんのか…」

「『風』は順調だねー！ 良かった良かった！ それじゃ次は『火』行ってみよー！」

「…へいへい」

なげやりに返事をしてから、今度は『火』の精霊結晶に魔力を通わせる。

俺の魔力を与えられた『火の精霊結晶』^{ファイア クリスタル}は一度強く瞬いたかと思う

と、ボボボツ…！　と炎でアルカディアを紅く彩った。

「これも試し斬りか？」

「もっちろん！」

俺は首を無くした鉄人形の隣、まだ五体満足（？）の鉄人形へとアルカディアを向けた。

スツ…と上段にアルカディアを持ち上げる。

「疾ッ！」

鉄人形の脳天から足元までまっすぐにアルカディアを振り下ろした。アルカディアの炎が一直線に走りぬき、鉄人形の体を両断する。が、鉄人形は倒れない。炎によって熔かされた断面は赤熱し、一度アルカディアが通り過ぎた後に再びくっ付いたのだ。

「嘘だろ…！？」

『風』もすごかったが『火』も同等以上だ。

リーナはトコトコと擦り寄ってきて、俺の右腕を抱きかかえる。なんか危ない感じで目が輝いていた。

というか、人の腕を抱きかかえるのはやめて欲しい。あたってるから、あたってるから！

「すっごいでしょー？　これが私の最高傑作だい！」

「キャラぶれまくりですよリーナさん」

「きやらって何かな？」

リーナはやつと俺の右腕を解放してくれた。

あぶねえあぶねえ…、俺の内なる斬魂刀が思わず正解しそうになっ

ちまった。破壊力ありすぎだぜあの乳は。
と心の中で呆れたようにつぶやいていると、俺は突然あることをひらめいた。

それを練習するために、リーナに一つ頼みごとをすることにする。

「リーナさん、武芸大会の前日まで…ここ貸してくれませんか？」

さて、新技の修行…始めますか！

——グランキャッスル武芸大会当日——

「もう！　なんでこんなことになるの！？」
「…すいません」

リーナは憤慨している。
それも当然かもしれない。リーナの鍛冶屋の裏、試し斬りをする場所にはあちこち鉄人形がひしゃげてべつとりと張り付いている。

床の石も炭化し、見るも無残な有様だ。
しかし、

「おかげで完成しました。ありがとうございます」

俺はリーナに礼を言う。

なぜならアルカディアは魂喰^{イーター}よりも魔剣技の発動に適していたのだ。
『火』『風』に限っては魔力の制御効率も数段良いし、新技の開発も出来た。

ただ、新技を一度使っただけでこの有様なので、人相手に使っても
良いかわからないのが欠点だが。

「それじゃ、行ってきますね？ リーナさん」

「応援しに行くからよろしくねっ！ とうかこんなに人の庭荒らし
として負けたら許さないからっ！」

リーナの声援を背に浴びながら、俺は武芸大会の開催場所へ向かった。

広場にて――

「申し込みってどこですりゃ良いんだろ…」

俺がきよろきよろとあたりを見回すと『受付』と書かれた板が掲げられている場所があった。

おそらくあそこが申し込みの場所だろうと、俺はそちらに近づいていく。

が、そこで今まさに申し込みをしている先客がいたのだ。

「な!？」

「武芸大会の申し込みはここですよしいんですの?」

「え? はいここですが…どなたが参加されるのですか?」

「私に決まっているでしょう?」

そこにいた先客とは、ローブを優雅にひるがえす、黄金の髪を持った美少女だった――。

25 武芸大会 開始!!

大きな城であるグランキャッスルの中でも、本丸というべき王族の暮らす城の前。

グランキャッスル中央広場の入り口にて俺は大きな驚きに見舞われていた。

「な!？」

「武芸大会の申し込みはここですよしいんですの?」

「え? はいここですが…どなたが参加されるのですか?」

「私に決まっているでしょう?」

俺の前で武芸大会参加の申し込みをしていたのは、以前宿屋で俺の唇を奪っていったあの金髪ローブ女だった。ただし今度はフードをかぶってはいなかったが。

気の弱そうな顔をした受付の女の人、強気な金髪ローブ女に押されてたじたとになっているが、何とか登録を済ませたようだ。

「は、はい…。すみません、登録が完了しました…。広場に特設された会場のほうに向かってください…」

受付の女の方は半泣きになりながらもローブ女に何かを手渡し、受付の後ろのほうにある門を指差した。

ローブ女は俺に気づかず、そちらに向かって歩いていく。

俺はその背中を見送りながら、泣きそうになっている受付の女の人

のところに歩み寄った。

「すいません、俺も参加したいんですけど…」

「…はい、すみませんでしたあ…。…グスッ（泣）」

「なんで！？ すいません俺が泣かしたみたいになってるんで泣き止んでくださいお願いします！」

なぜか泣き出した受付の女の人に必死でお願いする俺。

もう泣きそうどころか決壊寸前の巨大ダムみたいになってるんですけどどうすればいいんですかこれえ！！ と心の中で叫びながら謝っている、女の人は少し落ち着いたように涙を拭きながら俺に頭を下げた。

「すいません…、さっきの人がすごく怖くて… 大体私人見知りなのに受付の仕事任されて今日はもう十三回も泣きそうになっちゃって…」

「十三回！？ なにその不吉な数字！」

「はい…、向いてないんですこの仕事…、なのに侍女長さまが…」

自己嫌悪…というかただの愚痴を言い始めた女の人。

このままだと参加登録してもらえ無さそうなので、俺はどうにかして泣き止んでもらおうと女の人の背中をさすって慰めようとする。だが、近寄って気づいたことが一つ。

（良くみると若いぞこの人。俺より少し上ぐらいかな？）

少しドキドキしてしまうが今はそれより申し込みが先だ。さつさと泣き止んでもらおう。

俺は受付の机の上に目を走らせた。あわよくばさつきローブ女が受け取っていたものをもらってしまおうという魂胆だったが、名簿の

ようなものを見つけ動きを止める。

「あのー俺、紅都って言うんだけど、君の名前教えてくれない？」

「コートさん…ですか？」

「うん」

「わ、わたしはエレンと言います…」

「エレン…ね。それはそうと元気だしなよ。エレンは良くがんばってる」

「え？」

俺に頑張っていると言われたことが予想外だったのだろう。エレンは小さく疑問の声を漏らした。

俺はテーブルの上においてあった名簿を指差して答える。

「だって、これエレンが登録してきた人の数だろ？　これだけ沢山相手してこれたんだから立派だよ」

「本当…ですか？」

「ほんとほんと、だから俺の登録も早く——」

「嬉しいですっ！」

さっさと登録してもらおうと痺れを切らした俺だが、それはエレンの大声に遮られた。

涙で潤ませた瞳を輝かせて俺のほうを見上げてくる。

「今までそんなこと言われたことなんてなかったです！　元気が出ました！　登録ですね？　じゃあ名前をここに記入してください」

ずい！　と俺の前に紙と羽ペンが突き出された。

俺はエレンの変貌振りに多少ひるみながらも、手渡された本のしおりの様な紙片に己の名前を記入する。

「それが参加証なので無くさないくださいね？」

「あ、ありがとう」

「わたし、コートさんのこと応援してますから！ 頑張ってください！」

エレンは良くみるとなかなかかわいい顔をしていた。めがねでもかけさせれば文芸部にでもいそうな感じの女の子である。

そんな子から応援してますから、なんていわれたら多少舞い上がってしまうのも仕方ないだろう。

俺は浮かれながらもさっきローブ女が入っていった入り口に向かった。

入り口を入った先にある会場はローマのコロッセオのようだった。俺の入った入り口からは下にまで一直線に階段がつながっている。恐らくあそこが戦いのステージなのだろう。

上には一般市民が観戦する席が設けられていた。今もすでに大勢の人々が何かを話している。

ステージのほうに視線を向けると、そこには俺と同じように武器を携えた者たちが百人ほど、静かに戦いの時を待ち構えていた。

「どいつもこいつもピリピリしてんなー……」

みんな殺気立っていて地味に怖い。俺は苦笑いをしながら階段を降りていった。

階段を下まで降りてきよろきよろとあたりを見回していると、突然横から声かけられる。

「お久しぶりですねね？」

首を声の方向に向けると、そこには楽しそうに微笑んでいるローブ女の姿があった。

俺は、そんな風に笑っているこいつにキスをされて、なぜかリアに怒られるという苦い経験をしたので少し警戒心を強める。

「この前は印を付けてくれてどうもありがとう」

「ふふ、そんなこと気にしなくても良いですよに」

「『また会えるかもしれないね？』ってのはこーゆーことか。まあ、参加者だとは思わなかったけど」

「あら、覚えていてくださっただんですの？」

「忘れられない経験だったからな」

こんな感じの会話を続けていくうちに、ステージよりも2、30メートル高い位置にある壇上にスーツを着た一人の男性が現れた。

下にいる参加者たちもその男に気づいて上を見上げている。

いつの間にか上の観戦席にもたくさんの人が集まっていた。

そして、参加者の大体が上を見上げたころになって、スーツ姿の男が口を開いた。

「さてさて皆さん！ 今日にはグランキャッスル武芸大会にお越しいただき真にありがとうございます！ 私は大会実行委員長のレグナス、大会の司会進行を勤めさせていただきますー！！」

スーツ男、レグナスは拡声器でも使っているのかと思わせるような大声を張り上げた。

俺はレグナスの名前を聞いたところで、まだローブ女に名前を聞いていなかったことを思い出す。

「なあ、お前、名前なんていうの？」

「…内緒ですわ」

それより、とローブ女は言葉を続けた。

「レグナスさんの説明が始まりますわよ。聞いたほうがよろしいのでは？」

どうやら本当に話が始まりそうだったので俺はしぶしぶ追及をあきらめ、レグナスの方を向く。

レグナスは大きく両手を広げると、俺たちを見下ろしながら喋り始めた。

「それでは、武芸大会の一回戦、そのルールを説明いたします！ 皆さんもこのように集まって不思議に思われているかもしれませんが、ご心配なく。一回戦の内容とは、ステージを四つに区切ったバトルロワイヤルでございます！！」

瞬間、レグナスの言葉と同時にステージの床から十字に土の壁が競りあがってきた。

「！？」

ステージの底にいた参加者全員が狼狽する。

いや、全員という表現は少し違うかもしれない。俺の横にいるロー

ブ女だけは何の反応も見せなかった。
レグナスは更にルールの説明を続ける。

「一回戦の内容は、区切られた各区画ごとに、立っているのが四名になるまで戦うこと。そして勝ち残った十六名で本戦を行います！
それでは、一回戦バトルロワイヤル、始め！」

武芸大会第一回戦、バトルロワイヤルが始まった。

26 バトロワ！ ロープ女の謎の技！？（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

26 バトロワ！ ロープ女の謎の技！？

「それでは、一回戦バトルロワイヤル、始め！」

レグナスの声が響いた瞬間、参加者がそれぞれの武器を抜き放つ。四つに区切られたバトルステージを百人の殺気が覆っていた。一触即発といった感じでお互いをにらみ合う。

だが、そんな空気をもともせず、ロープ女は俺に話しかけてきた。

「全く、バトルロワイヤルなんて無粋なことをしますわね？ 私はまだ貴方とは戦いたくはないのですけれど」

「そうか？ 俺はあんたとやってみたいけどな？」

「ベッドの中の戦いなら、ご遠慮させていただきますわよ？」

「！？ ちげーよそういう意味じゃねえ！」

「うふふ、わかってますわ」

そんな感じで会話をしていると、周囲の男たちがギラギラとした視線を俺とロープ女に向けてきていた。男たちが俺らに言葉をぶつけてくる。

「なんでガキと女がこんなとこにいるんだあ？」

「ママのミルクでも飲んでナ！」

「お譲ちゃんの来るとこじゃないぜ？」

「てか何であんな可愛い子と！」

一部、私怨のこもった台詞が混じっていたが気にしないことにする。しかし、どの世界でもこういうときの悪口は同じようなものなんだ

なーと俺はひそかに感心する。

所詮モブキャラどもに何を言われようが俺は気にしない。異世界人だし。

しかし、ローブ女は俺のようにはいかなかったようだ。

「ねえ…、この人たち私が倒しても？」

「は？」

「多少…癪に障りましたわ、それで納得できないのでしたら、宿屋で助けていただいたお返しということで」

「……………」

お礼としてキスされた気がするんですがっつか怖いよこの女！俺は苦笑いしながら内心ではがたと震えていた。

ローブ女が今放っているプレッシャーは、下手すればブラックドラゴンと同じ程度。

（…ん？ ブラックドラゴン？ ……なにか忘れているような…）

些細な違和感を覚えた俺だが、首を少し傾げるだけにとどめておいた。

それより今はローブ女がなぜブラックドラゴンに匹敵するほどのプレッシャーを放っているのが気になる。

俺とは違い、きれいな美貌に氷のような微笑を浮かべているローブ女は、右手を地面と水平に持ち上げた。

「後悔なさい…」

俺はどんな凄まじい攻撃が男たちに放たれるのかとびくびくしていたが、ローブ女がしたことは、パチン！と指を鳴らしただけだった。

しかし、次の瞬間。

俺とローブ女を除く人間が全て、まるで人形の操り糸が切れたしまったかのように崩れ落ちた。

シ……ン……。と会場が一瞬で静まり返る。

やがて、何かを思い出したようにレグナスが実況を再開した。

「おーっとこれは！ 選手登録名『シークレット』選手と『コート』選手以外のAブロックの選手が全員崩れ落ちたア！」

と、レグナスはエキサイトしながら実況を続ける。

というかここはAブロックだったのか、という無意味な驚きがあったが、俺はその次のレグナスの言葉に更に驚く。

「おお！？ こちらはCブロックの『アドル』選手。Aブロックに気をとられているうちに他の全員の参加者を打ち倒している！ というか君たち！ 1ブロック四人が勝ち抜けるルールなのだがどうしてくれるんだ？」

困り顔のレグナスに、ローブ女がさらりと答えた。

「他のブロックの勝ち抜け人数を六人と七人にすればよいのでは？」

そんなこんなで武芸大会の初日を終えた俺は、何か物足りなさを感じながら、久しぶりに宿屋『肉と野菜と料理』へと帰還していた。

ギィ…とドアを開けて中に入る。

中ではノルハさんがテーブルを拭いているところだった。他の客はいないみたいだ。まあ、昼食時は過ぎているし、親父どもが酒を飲みにくる時間帯でもないので当然かもしれないが。

ノルハさんは来客が俺であることに気づくと、満面の笑みを浮かべて大声を張り上げた。

「コートくん！！今までどこに行ってたんだい？」

「お久しぶりです。ノルハさん。ちよつと特訓してまして…」

「特訓ねえ、まあいいけどさ！それより…」

一度言葉を切って、ノルハさんはニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「女の子は怒らせると怖いよー、特にあんなタイプはね？」

あはは！と豪快に笑ってノルハさんは厨房の奥へと引っ込んでいつてしまった。

俺はノルハさんの言葉に首をかしげながら、階段を上って自室へと向かう。

「ここに帰ってくんのも久しぶりだな…」

感慨深げに呟いて、俺は自室の扉を開けた。

だが、扉を開けた次の瞬間に俺は啞然とすることになる。なぜなら、中では黒髪の女が一糸纏わぬ状態で体を拭いていたからだ。

「……………部屋間違えました」

ボタン！と、俺はしばしの沈黙の後に勢い良くドアを閉めた。

しかし、部屋の位置を再確認してみると、ここは確かに俺の部屋である。

大体、各部屋のドアにかけている『リミテッドロック限定施錠』のスキルは、その部屋を使っている者か店主、またはどちらかが認めた者しか開けられないはずなのだ。

つまり、俺がドアを開けられたということは、まだこの部屋は俺の部屋なのだ。

だが、その部屋に得体の知れない女がいる。

それがどういうことを意味するのかというと…、

「泥棒かお前！」

半ば蹴破るようにしてドアを蹴りつけると俺は中に飛び込んだ。

そして、部屋の中にいた全裸の女——今はシートで体を隠してベッドの上にいたが——に向かって詰め寄る。

すると、女は顔を真っ赤にしながら、俺を睨み付けた。

「ラック！ ファイアーボール！」

「がっ」

女の叫び声に反応したのは、ドアのそばにいた黒い塊。

もそもそと蠢いたあと、体の一部がガパ！ と開いて中から小さな火球が飛び出してきた。

俺は反射的にアルカディアを引き抜くと、『ファイアクリスタル火の精霊結晶』の力を使って火球を吸収する。

これはリーナのところで身につけた技のひとつだ。

そこで、俺は女の声に聞き覚えがあることに気付く。ひとつの不安に駆られながら、つつくりと後ろに振り返った。

「もしかして…リアか？」

黒髪の女は、顔を真っ赤にしたまま答えた。

「当たり前でしょうが！！ そのくらい見たら気付きなさいよ！！」

「んで…この黒い塊はラック？」
「がうー！」

ここで、俺は武芸大会で感じた違和感にたどり着く。

「そういえば！ ラック迎えに行くの忘れてた！！！！！」

新技の特訓に夢中になってしまった自分を責める俺に、リアが辛らつな一言を放った。

「いいから、早く出てってくれない？ この変態覗き魔ド忘れ最低男ッ！！！」

27 トーナメント一戦目！

「それではトーナメント第一戦！ 始め！」

レグナスの声が観客席とバトルステージに響く。

リアに変態と言われた翌日。

武芸大会本選のトーナメントで、俺は前に宿屋で会ったスキンヘッドと戦っていた。

スキンヘッドは巨大なバトルアックスを担ぎ上げながら俺を睨み付ける。

「ゲハハハ！ 俺は運がいいぜえ！ ほかの誰かにやられる前にテメエを殺れるなんてな！」

「つーかあの弱さでよく予選突破できたな」

「うるせえ！」

「ああ。あのロープとアドルが半分倒したからそのお陰か（笑）」

「うるせえつつつてんだろ！！」

スキンヘッド：もといハゲはバトルアックスを大上段に構えると、闘牛を思わせる動きで突進してきた。

俺は顔に笑いを浮かべながらアルカディアを鞘から抜き放つ。魂喰^{イーター}

は観客席にいるリーナとラックに預けてきた。

突進してくるハゲを見ると、一瞬だけ『精霊結晶^{クリスタル}』の力を使おうか

どうか迷ったが、このハゲには必要ないな、と頭を振る。

だらりと右腕を下げてハゲの光る頭部を見据えた。

「うおりゃあー!!」

ハゲは声を上げると、大上段に振りかぶったバトルアックスを俺に振り下ろしてきた。

だが、俺は体を九十度捻ることで難なく回避。シャリンツ！ とバトルアックスの上を滑らせてアルカディアをハゲの胴体に叩き込む。

「遅いぜ？」

びたーん！ とハゲのレザーアーマーにアルカディアの剣の側面がヒットした。

俺はアルカディアをそのまま振りぬくと、硬直するハゲの背後まで移動する。

ワアッ！ と観客から歓声が上がった。

「どうかしたか？」

顔を真っ赤にしながらパクパクと口を開閉させているハゲに、俺は余裕を含んだ笑みと共に話しかけた。

ハゲが何か言いかけたが、それをレグナスの実況が塗りつぶす。

「おーっとコート選手！ ゴルオ選手に見事な技を決めました！

観客からも盛大な歓声があー！」

あのハゲ、ゴルオって名前だったのかww。

つかレグナスも最初のイメージと大分違うよな…。

と内心で呟きながら、俺はゴルオ——やっぱハゲでいいや——に視線を移した。

アイツの持つバトルアックスなど、昨日のリアの怒りに比べたらなんと違うことはない。

俺は自嘲気味な笑みを浮かべて、アルカディアを真っ直ぐにハゲに向ける。

そして、一度言ってみたかったあの台詞。

「——かかって来いよド三流。格の違いってやつを見せてやる！」

とりあえず昨日の出来事まで時間は遡る。

「いいから、早く出てってくれない？ この変態覗き魔スケベ度忘れ最低男ッ——！」

という言葉と共に廊下に放り出された俺は、その三分後に部屋の中で正座させられていた。

…俺の部屋なんだけど。

そう言い出したかったが、目の前のリア様が鬼神の如きオーラを放っているので何も言い出せない。

おまけにひざの上にラックが乗せられているのでマジ重い。

いつの時代の拷問方法だと言いたくなかったが、リアが怖くて黙って耐えるしかなかった。

「……………」

そのまま三十分ほど無言で耐え続けた俺だが、そろそろ無言の圧力と脚の痺れに我慢ができなくなったので俺はラックを押しのとちち立ち上がるとする。

しかし、

「いだだだだ！」

「……………」

足がしびれて動かなかった。

ドサツと俺は床に倒れこむが、そんな俺を見るリアの視線は絶対零度の空気を含んでいる。

「…あのー、リア様？」

「……………」

「お願いですから何か喋ってください！」

「……………」

「ほんとにお願いします！ 何でもしますから許してください！」

「……………」
「ねえ」

「はい！ 何でもワタクシめにお申し付けくださいませ！」

「……………」
「なんで何日も帰ってこなかったわけ？」

「えー？ えーとですね！ 新しい剣を手に入れまして！ それをうまく扱う訓練をしてたらいつの間にか時間が経っていたという次第でございます！」

「……………」
「何回も念話かけたんだけど？」

「すいませんー一生懸命やってたんで気づきませんでした！」

「……………」
「何でもゆうこと聞くて言ったわよね？」

「はい！ 出来ることなら何でも！」

「……………」
「じゃあ、武芸大会の優勝賞品ちょうだい」

ホフク前進のような姿勢でリアと話していた俺は、「優勝賞品」という言葉に疑問を覚えて立ち上がる。

だが、足の痺れが抜けきっていたわけではなかったので、とりあえ

ずリアの座っているベッドの横に腰を下ろした。

「ッ！ な、なんで横に座るのよ！」

「…まだ説教っスか。…そろそろ明日の本選に影響しそっなんスけど…」

「う、ううー！ …じゃあ…仕方ないけど…」

「ええと…、あ、ありがとうございます」

なんか顔を炎のように赤くしてしぶしぶ了承するリアに、俺は戸惑いながらも礼を言う。
そして、何故か硬直した空気を変えるために俺は「優勝賞品」について聞くことにした。

「…優勝賞品ってなに？」

「知らないの！？」

「…恥ずかしながら」

「あっきたー！ 何にも知らないであの大会出た訳！？ いい？ あの大会は優勝すると三つの賞品がもらえるの。大金貨100枚と勲章、それは毎年一緒だから私は要らないけど、欲しいのは最後の一つ。『エレメントテイアラ精霊の冠』よ！」

「…えれめんとていあら？」

「そう！ 賞品は毎年変わるから二度と手に入らない逸品！ 本当は優勝者から買い取ろうと思ってたけどアンタが手に入れてくれるなら楽だわ！」

「わ、わかった。じゃあそれをリアにプレゼントするよ」

俺がそういうとリアの顔がボンツと赤く染まっていく。

え？ また怒らせた？

と、内心でビクビクしていたが、俺は爆発される前に他の話に切り替えようと試みた。

「ていうか…、なんでリアがラックといんの？ あとなんで俺の部屋に？」

最初から感じていた疑問をぶつけてみたが、それこそ地雷だったらしい。

赤かったリアの顔色は平常に戻ったが、今度はオーラが灼熱に染まっ
っていく（様な気がした）。

「……うるっさい！！！！ うるさいうるさいうるさい！！」

物理攻撃で俺を叩きのめすのかと思ったが、意外にもベッドから立ち上がって俺を見た後に、ドアから疾風のように出て行ってしまった。

そして、俺の脳内に一方通行の念話が届けられる。

「アンタが優勝できたら説明するわよ！」

俺は床であくびをしているラックを見つめながら一言。

「『うるさいうるさいうるさい！！』って…、……………シャナかよ……」

翌日。

朝、リーナの鍛冶屋に立ち寄って魂喰^{イター}とラック。そして昨日もらったチケットを渡して俺は武芸大会の会場に向かった。

会場に行くとトーナメント表が張り出されていたので、それを見する。

「うげ…、一番最初の試合じゃねーか」

一回戦の相手はゴルオとかいう名前の奴だった。

それには特に興味もないのでスルー。ローブ女の名前？ …登録名『シークレット』と『アドル』を探してみると、

「順当に勝っていきやあアドルとは準決勝で、ローブ女とは決勝でぶつかるなあ」

なんかお決まりの展開だなあと思っていると、後ろから肩を捕まれた。

強引に振り向かせられる。

「久しぶりだなあー？ チビ！」

いつか宿屋で吹っ飛ばして『重力の戒め』グラビティエリアをかけたあのスキンヘッドだった――。

現在。

「——かかって来いよド三流。格の違いってやつを見せてやる！」

挑発的な笑みを浮かべてハゲにアルカディアを突きつける。

もちろん指にはブルータスがはまっているが、アースで一度に三人

を相手にするよりかは楽だろう。
ゆらゆらとアルカディアの切っ先を揺らす。
そして、ハゲが瞬きをした次の瞬間。

「藤宮流・縮地」

実家に伝わる特殊な歩法『縮地』。もとは沖縄から伝わったらしいものだが、なぜか祖父に教え込まれた技の一つ。

実に使うのは二年ぶりだが、うまくいったようだ。
重心移動とタイミングを合わせ、ハゲの右をすり抜けるように一歩で5メートルほどの距離を進む。

ハゲの目が大きく見開かれ驚いていることが分かったが、それを気にせずアルカディアで相手の顔面を思いっきりブツ叩いた。
ただし…刀身の側面で――！

「へぶうおっ!？」

側面とはいえ、聖金属の合金で作られたアルカディア自体の重さは十キロほど。それを顔面に当てられたらどうなるか。

剣がハゲの鼻をつぶし、思い切りのけぞらせて奇声を上げさせる。
さすがに体が大きいだけあって体が吹っ飛ぶということはなかったが、一瞬だけ硬直すると、力が抜けたようにステージに崩れ落ちた。
俺は倒れ伏したハゲを見ながら呟く。

「ワリィ…。格の違いを見せるまでもなかったな」

シン…と会場が静まりかえったあと、レグナスが声を張り上げる。
それとともに、観客から天が割れんばかりの大歓声が響く。

「ト、トーナメント一回戦！『コート』選手の勝利です！！」

27 トーナメント戦目！（後書き）

鋼の錬金術師！

「降りてこいよドニ流。格の違いつて奴を見せてやる……！」から
です^^

外伝 アーバニアの双神 3

「ルビアナア！！！！ お前フェンリルにどんな特性つけやがった！？ 単純な戦闘能力だけじゃないだろ！！」

アーバニアに君臨する二人の神のうちの一人、ナヴィスが妻である女神ルビアナを怒鳴りつけた。

実はナヴィスはさつきからフェンリルが下界に解放された時の被害の大きさや影響などを調べていたのだが、その際にとんでもない事実が発覚したのだ。

それは、

「フェンリルの封印地点の歪みが大きい！！ 今の下界でも最強ランクの魔物が生み出されてる。今は一月に一体くらいだが、フェンリルの封印が解ければ常時魔物が生み出されることになるぞ！！」

「そ、そんなに怒らないで…。私はフェンリルが一人では寂しいだろうと思つて、魔物の自動生成機能を付加させてあげただけなのに…」

「それがダメなんだよ！！ つーかさつき産まれた魔物…劣化版フェンリルみたいなのがイエスがこっちに呼んだ奴の所に向かつてるぞ！？！？」

「あ…超感覚も付加させてあげたから、私たちの会話も聞いてたかも…」

「ふざけんなよテメエ！！ 何つけたのか全部言え！」

パニックに陥りすぎて口調が変わり始めたナヴィスだが、彼の手元にある宝玉では下界の様子が映し出されていた。

「えっと、魔物自動生成と超感覚と神の盾と主神の槍は体の中に埋

イエス
グングニル

め込んで、後は超加速と……」

「お前後でお仕置きな！ それより、この魔物の行き先が分かった！
……後三日でマドミス王国のグランキャッスルって所に着く！
チッ……世界の果てから三日でこんなところまで行けるのかよッ……！」

外伝 アーバニアの双神 3 (後書き)

なんかもう外伝って言わない気もしてきたなこれ…><

外伝は短めが多いので気にしないでください汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763v/>

最強の剣士 ～紅の都を創る者～

2011年12月18日09時33分発行